

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度	自	2022年4月1日
(第105期)	至	2023年3月31日

株式会社トーエネック

名古屋市中区栄一丁目20番31号

(E00076)

目次

頁

表紙

第一部 企業情報	2
第1 企業の概況	2
1. 主要な経営指標等の推移	2
2. 沿革	4
3. 事業の内容	5
4. 関係会社の状況	7
5. 従業員の状況	8
第2 事業の状況	10
1. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	10
2. サステナビリティに関する考え方及び取組	12
3. 事業等のリスク	20
4. 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	22
5. 経営上の重要な契約等	28
6. 研究開発活動	29
第3 設備の状況	30
1. 設備投資等の概要	30
2. 主要な設備の状況	30
3. 設備の新設、除却等の計画	31
第4 提出会社の状況	32
1. 株式等の状況	32
(1) 株式の総数等	32
(2) 新株予約権等の状況	32
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等	32
(4) 発行済株式総数、資本金等の推移	32
(5) 所有者別状況	33
(6) 大株主の状況	33
(7) 議決権の状況	34
2. 自己株式の取得等の状況	35
3. 配当政策	35
4. コーポレート・ガバナンスの状況等	36
(1) コーポレート・ガバナンスの概要	36
(2) 役員の状況	43
(3) 監査の状況	48
(4) 役員の報酬等	51
(5) 株式の保有状況	53
第5 経理の状況	60
1. 連結財務諸表等	61
(1) 連結財務諸表	61
(2) その他	100
2. 財務諸表等	101
(1) 財務諸表	101
(2) 主な資産及び負債の内容	115
(3) その他	115
第6 提出会社の株式事務の概要	116
第7 提出会社の参考情報	117
1. 提出会社の親会社等の情報	117
2. その他の参考情報	117
第二部 提出会社の保証会社等の情報	118

[監査報告書]

[内部統制報告書]

[確認書]

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2023年 6月29日
【事業年度】	第105期(自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
【会社名】	株式会社トーエネック
【英訳名】	TOENEC CORPORATION
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 社長執行役員 藤田 祐三
【本店の所在の場所】	名古屋市中区栄一丁目20番31号
【電話番号】	(052)221-1111(大代表)
【事務連絡者氏名】	経理部会計第一グループ長 濱田 雄介
【最寄りの連絡場所】	名古屋市中区栄一丁目20番31号
【電話番号】	(052)221-1111(大代表)
【事務連絡者氏名】	経理部会計第一グループ長 濱田 雄介
【縦覧に供する場所】	株式会社名古屋証券取引所 (名古屋市中区栄三丁目8番20号) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号) 株式会社トーエネック 東京本部 (東京都豊島区巣鴨一丁目3番11号) 株式会社トーエネック 大阪本部 (大阪市淀川区新北野三丁目8番2号) 株式会社トーエネック 静岡支店 (静岡市葵区研屋町51番地) 株式会社トーエネック 三重支店 (津市桜橋二丁目177番地1) 株式会社トーエネック 岐阜支店 (岐阜市茜部中島三丁目10番地) 株式会社トーエネック 長野支店 (長野市三輪二丁目1番8号) (注) 大阪本部は金融商品取引法で定める縦覧場所ではないが、投資家の 便宜を図るために備え置くものである。

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第101期	第102期	第103期	第104期	第105期
決算年月	2019年3月	2020年3月	2021年3月	2022年3月	2023年3月
売上高 (百万円)	218,984	224,843	215,677	219,617	232,053
経常利益 (百万円)	10,146	12,511	13,726	13,394	8,983
親会社株主に帰属する 当期純利益又は 親会社株主に帰属する 当期純損失 (△) (百万円)	6,672	9,314	8,832	8,283	△5,548
包括利益 (百万円)	10,543	10,211	12,638	9,130	△6,897
純資産額 (百万円)	102,132	109,628	119,740	126,596	117,193
総資産額 (百万円)	263,458	292,299	308,232	301,599	300,172
1株当たり純資産額 (円)	5,463.36	5,864.44	6,405.63	6,772.38	6,267.16
1株当たり当期純利益又は 1株当たり当期純損失 (△) (円)	356.94	498.34	472.57	443.23	△296.83
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	38.8	37.5	38.8	42.0	39.0
自己資本利益率 (%)	6.8	8.8	7.7	6.7	△4.6
株価収益率 (倍)	8.5	6.4	8.3	7.4	—
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	9,616	16,593	24,111	5,943	12,640
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△24,030	△4,642	△3,716	2,969	△2,119
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	11,958	△8,000	△9,933	△27,522	△8,358
現金及び現金同等物の 期末残高 (百万円)	32,472	36,390	46,857	28,424	30,601
従業員数 (人)	6,096	5,999	5,918	5,938	6,038

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載していない。

2 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第104期の期首から適用しており、第104期以降に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっている。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第101期	第102期	第103期	第104期	第105期
決算年月	2019年3月	2020年3月	2021年3月	2022年3月	2023年3月
売上高 (百万円)	196,866	203,392	196,351	197,749	207,618
経常利益 (百万円)	8,563	10,223	12,241	11,053	7,412
当期純利益又は 当期純損失 (△) (百万円)	5,796	7,904	7,292	6,724	△6,502
資本金 (百万円)	7,680	7,680	7,680	7,680	7,680
発行済株式総数 (株)	19,329,990	19,329,990	19,329,990	19,329,990	19,329,990
純資産額 (百万円)	88,088	93,094	99,883	104,789	95,637
総資産額 (百万円)	238,073	265,886	281,694	274,375	268,781
1株当たり純資産額 (円)	4,712.70	4,980.78	5,344.28	5,606.94	5,115.88
1株当たり配当額 (円)	105.00	150.00	140.00	135.00	95.00
(うち1株当たり中間配当額)	(30.00)	(70.00)	(55.00)	(45.00)	(45.00)
1株当たり当期純利益又は 1株当たり当期純損失 (△) (円)	310.07	422.89	390.20	359.80	△347.86
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	37.0	35.0	35.5	38.2	35.6
自己資本利益率 (%)	6.7	8.7	7.6	6.6	△6.5
株価収益率 (倍)	9.8	7.5	10.0	9.1	—
配当性向 (%)	33.9	35.5	35.9	37.5	—
従業員数 (人)	4,887	4,858	4,780	4,743	4,808
株主総利回り (%)	101.3	110.6	138.8	122.9	130.0
(比較指標：配当込みTOPIX) (%)	(95.0)	(85.9)	(122.1)	(124.6)	(131.8)
最高株価 (円)	3,570	3,975	4,200	4,025	3,865
最低株価 (円)	2,737	2,514	2,880	2,958	3,000

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載していない。

2 最高株価・最低株価は、2022年4月4日より東京証券取引所プライム市場におけるものであり、それ以前については東京証券取引所市場第一部におけるものである。

3 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第104期の期首から適用しており、第104期以降に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっている。

2 【沿革】

1944年10月、電気工事業整備要綱により、愛知、静岡、三重、岐阜県の東海4県下に所在した有力電気工事業者23社が合併して、本社を名古屋市中区西松ケ枝町に、支社を静岡、三重（津）、岐阜の各都市に設置し、資本金200万円をもって東海電気工事株式会社を設立した。

設立後の主な変遷は次のとおりである。

1949年10月	建設業法による建設大臣登録第128号の登録を完了
1961年11月	冷暖房、衛生、水道、その他管工事の営業を開始
1962年 4月	名古屋証券取引所第二部に株式を上場
1965年 9月	現在地に本店所在地を変更
1971年10月	東京・大阪証券取引所第二部に株式を上場
1972年 2月	名古屋・東京・大阪証券取引所第一部に指定
1973年 8月	建設業法の改正により建設大臣許可（般・特－48）第1574号を受理
1981年10月	東工産業株式会社を設立
1984年 6月	電気通信工事、消防施設工事の営業を開始
1986年10月	株式会社長野テクノサービスを設立
1989年10月	東海電気工事株式会社は株式会社トーエネックに、東工産業株式会社は株式会社トーコーにそれぞれ社名変更
1991年 4月	株式会社三重テクノサービス、株式会社飯田テクノサービスを設立
1991年10月	株式会社静岡テクノサービスを設立
1994年 7月	株式会社トーコーが、長野・三重・飯田・静岡の各テクノサービスを吸収合併し、株式会社トーエネックサービスに社名変更（現・連結子会社）
1995年10月	合弁会社TOENEC PHILIPPINES INCORPORATEDを設立（フィリピン共和国）（現・連結子会社）
1996年 6月	合弁会社TOENEC (THAILAND) CO., LTD. を設立（タイ王国）（現・連結子会社）
2001年 6月	電気通信事業等の営業を開始
2003年 9月	統一能科建筑安装（上海）有限公司を設立（中華人民共和国）（現・連結子会社）
2005年 2月	大阪証券取引所への上場を廃止
2007年10月	株式会社シーテックへ変電・送電・工務地中線に係る事業を譲渡 株式会社シーテックより配電地中線に係る事業を譲受
2016年 2月	旭シンクロテック株式会社の株式を取得し子会社化（現・連結子会社） これにより、同社の連結子会社であるPT. ASAHI SYNCHROTECH INDONESIAを子会社化（インドネシア共和国）（現・連結子会社）
2022年 4月	名古屋証券取引所プレミアム市場、東京証券取引所プライム市場へ移行

3【事業の内容】

当社グループは、連結財務諸表提出会社（以下「当社」という。）、連結子会社6社及び持分法適用関連会社4社で構成され、設備工事業を主な事業の内容としている。

当社グループの事業に係る位置付け及びセグメントとの関連は、次のとおりである。また、当社は中部電力㈱〔電気事業〕の子会社である。

〔設備工事業〕

当社は、配電線工事、地中線工事、屋内線工事、空調管工事、通信工事の施工を行っており、工事の一部を㈱トーエネックサービスが下請施工している。

㈱トーエネックサービスは、屋内線工事等の施工を行っている。

旭シンクロテック㈱は、空調管工事の施工を行っている。

海外子会社である統一能科建筑安装（上海）有限公司、TOENEC（THAILAND）CO.,LTD.、TOENEC PHILIPPINES INCORPORATED、PT. ASAHI SYNCHROTECH INDONESIAは、それぞれ中華人民共和国、タイ王国、フィリピン共和国、インドネシア共和国において屋内線工事、空調管工事等の施工を行っている。

海外持分法適用関連会社であるTri-En TOENEC Co.,Ltd.、HAWEE MECHANICAL AND ELECTRICAL JOINT STOCK COMPANYは、それぞれタイ王国、ベトナム社会主義共和国において屋内線工事、空調管工事等の施工を行っている。

また、当社は、中部電力グループ（中部電力㈱、中部電力パワーグリッド㈱、中部電力ミライズ㈱）から配電設備の新增設工事やその他の修繕工事等を受注しており、その周辺業務を㈱トーエネックサービスに発注している。

（注） TOENEC（THAILAND）CO.,LTD. は、Tri-En TOENEC Co.,Ltd. への事業移管が終了し清算手続き中である。

〔エネルギー事業〕

当社は、太陽光発電事業、学校空調システムサービス、マンション高圧一括受電サービス事業等を行っている。

〔その他〕

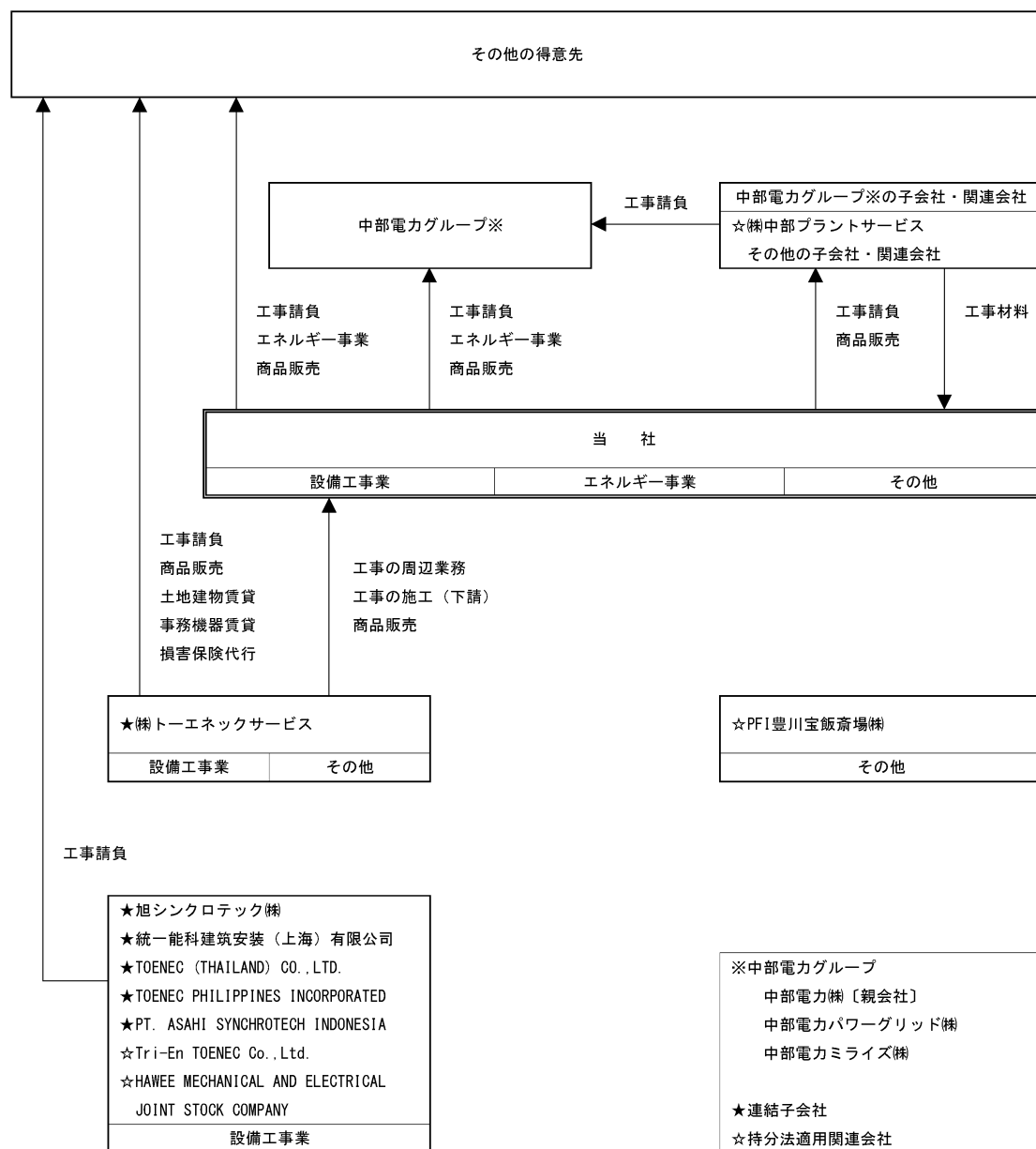
当社は、商品販売を行っている。

㈱トーエネックサービスは、商品販売、土地建物の賃貸、事務用機器の賃貸、損害保険代理業等を行っている。

P F I 豊川宝飯斎場㈱は、P F I 事業である豊川市斎場会館の施設整備、維持管理及び運営を受託している。

㈱中部プラントサービスは、中部電力㈱の子会社であり、火力・原子力発電所の建設・点検・保守工事を行っている。

事業の系統図は次のとおりである。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の 内容	議決権の所有 又は被所有 割合 (%)	関係内容
(親会社) 中部電力㈱ (注) 1	名古屋市東区	430,777	電気事業	被所有 51.90	営業上の取引 工事請負、商品販売 役員の転籍 2名
(連結子会社) ㈱トーエネックサービス (注) 2	名古屋市中区	100	設備工事業 その他	所有 100	営業上の取引 当社が商品を販売している。 当社が電気工事を発注している。 当社が警備業務を委託している。 当社が機器等のリースを受けている。 当社が建物の保守管理を委託している。 設備の賃貸借 当社が事務所の一部を賃貸している。 役員の兼任 2名
(連結子会社) 旭シンクロテック㈱ (注) 2	東京都港区	40	設備工事業	所有 100	営業上の取引 空調管工事を受発注している。 役員の兼任 4名
(連結子会社) 統一能科建筑安装 (上海) 有限公司 (注) 2	中華人民共和国	41 (百万RMB)	設備工事業	所有 100	営業上の取引 当社が施工協力を行っている。 役員の兼任 2名
(連結子会社) TOENEC (THAILAND) CO., LTD. (注) 2、4	タイ王国	10 (百万BAHT)	設備工事業	所有 100	資金援助 当社が貸付を行っている。 役員の兼任 2名
(連結子会社) TOENEC PHILIPPINES INCORPORATED (注) 2	フィリピン共和国	1 (百万PESO)	設備工事業	所有 100	営業上の取引 当社が施工協力を行っている。 役員の兼任 1名
(連結子会社) PT. ASAHI SYNCHROTECH INDONESIA (注) 2	インドネシア共和国	35,750 (百万RP)	設備工事業	所有 96	営業上の取引 当社が電気工事を発注している。 役員の兼任 1名
(持分法適用関連会社) PFI豊川宝飯斎場㈱	豊川市御津町	100	その他	所有 36	営業上の取引 当社が斎場会館の運営・維持を受託して いる。 資金援助 当社が貸付を行っている。 役員の兼任 2名
(持分法適用関連会社) ㈱中部プラントサービス	名古屋市熱田区	240	その他	所有 20	営業上の取引 当社が電気工事、空調管工事等を受注し ている。
(持分法適用関連会社) Tri-En TOENEC Co., Ltd. (注) 4	タイ王国	114 (百万BAHT)	設備工事業	所有 30	営業上の取引 当社が施工協力を行っている。 役員の兼任 1名
(持分法適用関連会社) HAWEE MECHANICAL AND ELECTRICAL JOINT STOCK COMPANY	ベトナム社会主義共 和国	300,000 (百万VND)	設備工事業	所有 40	役員の兼任 1名

(注) 1 有価証券報告書を提出している。

2 特定子会社に該当しない。

3 「主要な事業の内容」欄には、セグメント情報に記載された名称を記載している。

4 TOENEC (THAILAND) CO., LTD. は、Tri-En TOENEC Co., Ltd. への事業移管が終了し清算手続き中である。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2023年 3月31日現在

セグメントの名称	従業員数（人）
設備工事業	5,300
エネルギー事業	61
その他	115
全社（共通）	562
合計	6,038

（注） 従業員数は当社グループ（当社及び連結子会社）からグループ外への出向者を除き、グループ外から当社グループへの出向者を含む就業人員である。

(2) 提出会社の状況

2023年 3月31日現在

従業員数（人）	平均年齢（歳）	平均勤続年数（年）	平均年間給与（円）
4,808	41.53	19.37	7,099,152

セグメントの名称	従業員数（人）
設備工事業	4,226
エネルギー事業	61
その他	26
全社（共通）	495
合計	4,808

（注） 1 従業員数は当社から他社への出向者を除き、他社から当社への出向者を含む就業人員である。
2 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでいる。

(3) 労働組合の状況

当社グループには、提出会社の労働組合としてトーエネック労働組合がある。同組合は、1951年6月1日に結成され、2023年3月末現在の組合員数は3,651人であり、上部団体として電力総連に加盟している。

また、連結子会社の労働組合としてトーエネックサービス労働組合がある。

なお、提出会社及び連結子会社ともに労使関係は円満に推移しており、特記すべき事項はない。

(4) 管理職に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の差異

① 提出会社

当事業年度				
管理職に占める女性労働者の割合 (%) (注) 1	男性労働者の育児休業取得率 (%) (注) 2	労働者の男女の賃金の差異 (%) (注) 1、3		
		全労働者	うち正規雇用労働者 (注) 4	うち非正規雇用労働者 (注) 5
2.3	88.6	66.9	82.1	50.4

(注) 1. 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(2015年法律第64号)の規定に基づき算出したものである。

2. 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(1991年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(1991年労働省令第25号)第71条の4第2号における育児休業等及び育児目的休暇の取得割合を算出したものである。

3. 男女の賃金の差異を比較する指標「平均年間賃金」(総賃金/人員数)を算出するための「人員数」は、育児短縮勤務者などのフルタイム勤務者以外も労働時間に応じた換算を行わず1名としてカウントしている。

4. 「正規雇用労働者」における属性情報は、以下のとおりである。

人員数 男性：3,983人 女性：397人

平均年齢 男性：38.4歳 女性：42.6歳

平均勤続年数 男性：17.8年 女性：22.2年

平均年間時間外労働実績 男性：369.8時間 女性：165.4時間

5. 「非正規雇用労働者」における属性情報は、以下のとおりである。

人員数 男性：516人 女性：209人

うち時間給制適用者数(比率) 男性：96人(18.6%) 女性：111人(53.1%)

② 連結子会社

当事業年度					
名称	管理職に占める女性労働者の割合 (%) (注) 1	男性労働者の育児休業取得率 (%) (注) 2	労働者の男女の賃金の差異 (%) (注) 1		
			全労働者	うち正規雇用労働者	うち非正規雇用労働者
(株)トーエネックサービス	1.9	0.0	71.1	92.6	51.9
旭シンクロテック(株)	6.1	66.7	65.8	72.8	39.0

(注) 1. 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(2015年法律第64号)の規定に基づき算出したものである。

2. 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(1991年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(1991年労働省令第25号)第71条の4第2号における育児休業等及び育児目的休暇の取得割合を算出したものである。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

(1) 会社の経営の基本方針

当社グループは、

- ① 社会のニーズに応える快適環境の創造
- ② 未来をみつめ独自性を誇りうる技術の展開
- ③ 考え挑戦するいきいき人間企業の実現

を経営理念の柱に掲げ、総合設備企業として事業を展開している。

(2) 経営環境及び対処すべき課題

今後の景気見通しについては、ウィズコロナの下で景気が持ち直していくことが期待されるものの、不安定な国際情勢や世界的な金融引締めなど、景気の下振れリスクは依然として残されている。

建設業界においては、公共投資に加え、民間設備投資も堅調な推移を見込む一方で、原材料価格の高騰や、サプライチェーンの混乱等が事業環境に与える影響について、引き続き注視が必要な状況である。

このような状況のもと、当社グループにおいては中期経営計画2027（2023年度～2027年度）をスタートさせた。新たな中期経営計画では、カーボンニュートラル社会への移行、デジタル技術の発展、少子高齢化の進行といった事業環境の変化を踏まえた上で、お客さまや社会と共に成長し続けていくための取り組むべき施策を4つの基本方針（①成長分野への挑戦、②既存事業の深化、③人材投資の更なる拡充、④経営基盤の強化）にまとめた。将来を見据えたエリア戦略の展開、グループ一体でのバリューチェーンの強化、働き方改革の推進、安全・施工品質の確保などに、なお一層取り組んでいく。

基本方針を力強く推進するための3つの重要なテーマ（カーボンニュートラルへの取り組み、デジタル化・DXの推進、人材の確保・活躍推進）を成長ドライバーに位置付けた。これらにより、ZEB化や省・創・活エネに関するサービスなど、多様化するお客さまのカーボンニュートラルへの対応に、積極的に取り組んでいく。また、DX推進基本方針及び人材戦略を策定し、これらの方針・戦略のもと、デジタル技術を活用し更なる生産性の向上や新たな価値の創出に取り組むとともに、成長の源泉である人材の質・量を高めるため、積極的な採用活動の展開や人材育成の強化、働きがい・働きやすさを実感できる職場環境づくりに努めていく。

これまで引き継がれてきた理念、使命、経営基盤をベースとしつつ、挑戦や変革によってこれから先もお客さまや社会へ確かな価値を提供し続けることで、持続的な成長を実現していく。

< 中期経営計画2027（2023年度～2027年度） >

基本方針

1 成長分野への挑戦

- お客さまのカーボンニュートラルへの対応
- 再生可能エネルギー関連事業および工事の強化
- DX関連投資やポストコロナへの対応
- 将来を見据えたエリア戦略の展開
- アジアを中心とした海外事業の更なる強化
- 新規事業の創出・展開
- 付加価値創出に資する技術研究開発および事業展開に向けた取り組みの推進

2 既存事業の深化

- 営業・施工における総合体制の強化
- グループ一体でのバリューチェーンの強化
- 施工力・技術力の更なる向上
- 効率化・生産性向上の取り組み推進
- 電力安定供給体制の構築に向けた施工体制の維持・充実
- コスト競争力の強化

3 人材投資の更なる拡充

- 持続的な成長の実現に向けた人材の確保
- 人材育成の更なる強化・充実
- ダイバーシティの確保
- いきいきと活躍できる職場づくり
- 働き方改革の推進

4 経営基盤の強化

- 安全・施工品質の確保
- 健全で透明性の高い企業運営の維持
- ステークホルダーとの信頼関係強化
- ゼロエミッションに向けた取り組みの着実な実施

成長ドライバー

カーボンニュートラル
への取り組み

デジタル化・DXの推進

人材の確保・活躍推進

(3) 目標とする経営指標

中期経営計画2027で目標とする経営指標は以下のとおりである。

<2027年度数値目標（連結）>

売上高 2,700億円、経常利益 180億円、ROE 8.0%

（注） 文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものである。

2【サステナビリティに関する考え方及び取組】

当社グループは、「お客さまと、社会と、人と、共に成長し続ける総合設備企業へ」をビジョンに掲げ、人材の力を最大限に引き出し、確かな技術でお客さまや社会に対して共通価値を創出し続けることで皆さまと共に持続的な成長を達成することを表明している。

○お客さまと共に

お客さまへのお役立ちを追求し期待され、必要とされる価値提供を通じてお客さまと共に成長

○社会と共に

当社の技術を活かした事業展開により社会的課題の解決に貢献し社会と共に持続的に発展

○人（仲間）と共に

安全・安心にいきいきと働ける職場環境を醸成し皆が仕事に『誇り・喜び』を感じ仲間と共に成長を実感

なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものである。

（1）ガバナンス

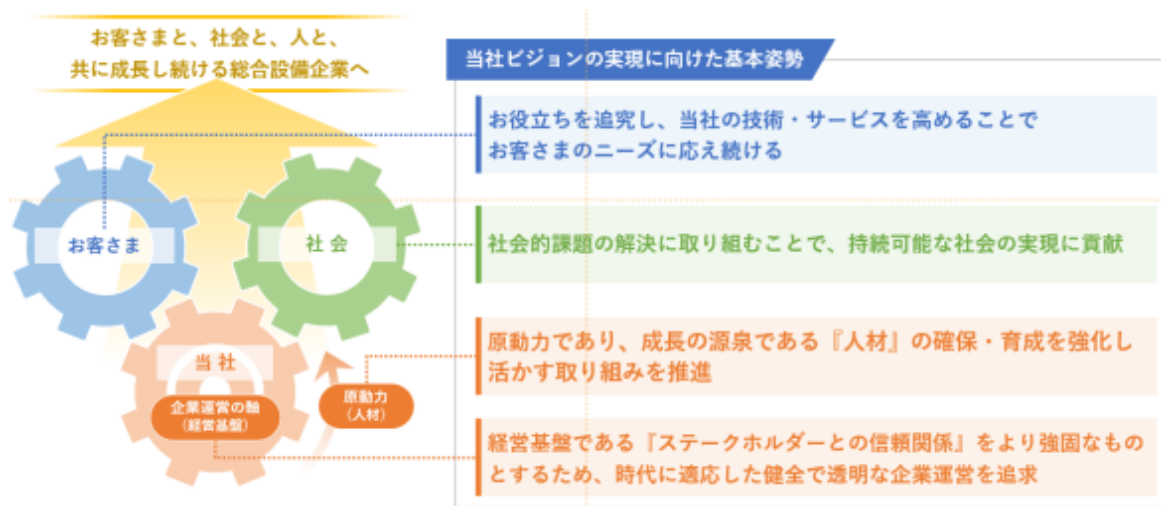
当社グループは、ESGの取り組みを推進するため、ESGに関する会社規程等に基づき、基本的な方針及び施策を審議する委員会等を設置している。重要事項は経営執行会議へ付議し決定するとともに、取締役会へ報告し、取締役会が監督するガバナンス体制を構築している。

気候変動に関しては、「トーエネックグループ環境基本方針」の下、基本的な方針及び施策を審議する「環境対策推進会議（議長：社長）」を設置している。

人的資本に関しては、「人材育成方針」の下、基本的な方針及び施策を審議及びモニタリングする「人材育成委員会（議長：人事部統括）」を設置している。

（2）戦略

当社グループは、事業や企業運営においてESG経営（三方よし）を実践することで、ビジョンの実現を目指している。



気候変動に関しては、当社グループの売上高の大半を占める「設備工事業」と「エネルギー事業」を対象範囲に、「2℃シナリオ」と「4℃シナリオ」について、将来の世界観を踏まえ、重要なリスク及び機会を抽出し項目を特定した。

<重要なリスク>

	時間軸	2℃シナリオ※1		4℃シナリオ※2	
		想定される社会の変化	当社への影響	想定される社会の変化	当社への影響
政策と法 〔炭素価格導入によるコスト増〕	中	欧州で既に普及しているカーボンプライシングが日本でも導入	CO2排出量に応じた炭素価格の支払が求められ、コスト増	排出削減の取り組みが遅れ、導入無、あるいは高額な価格設定がされない	炭素価格が導入されないため、影響なし
エネルギー価格高騰 〔車両燃料費増〕	中	再エネ普及により化石燃料需要の増加が抑えられ、価格上昇幅が抑制される	化石燃料由来の燃料価格上昇により燃料コスト増	再エネ普及が進まず化石燃料需要が高まり、2℃シナリオと比較してさらに価格上昇が進む	化石燃料由来の燃料価格上昇により燃料コスト増
省エネ基準規制 〔建材調達コスト増〕	中	炭素価格が調達する建材の価格に上乗せされる	炭素価格導入により建材調達コスト増	炭素価格が導入されないため、CO2排出抑制に起因する建材の価格上昇無	炭素価格が導入されないため、建材調達コストは変動せず
洪水・高潮被害 〔再エネ売電収入減〕	短	2030年まで気温上昇が継続し、現在よりも災害頻度が上昇	災害発生により太陽光発電設備が損壊、稼働停止により売電収入減	2030年時点では顕著な気温差ではないものの、2℃シナリオと比較してさらに災害の頻度、程度が上昇	災害発生により太陽光発電設備が損壊、稼働停止により売電収入減
風水害 〔再エネ売電収入減〕	短		降水量、降雨日数が増加し、太陽光発電による発電量が減少、売電収入減		

<重要な機会>

	時間軸	2℃シナリオ※1		4℃シナリオ※2	
		想定される社会の変化	当社への影響	想定される社会の変化	当社への影響
資源効率性 〔車両燃料費減〕	中	CO2排出抑制に向け、乗用車、貨物車等において次世代自動車の普及が進展	小型乗用車、貨物車などの次世代自動車への切り替えにより、車両燃料費減	次世代自動車の普及が遅れ、現状の小型乗用車への普及程度に留まる	小型乗用車の次世代自動車への切り替えにとどまり燃料費削減効果は軽微に留まる
エネルギー源 〔再エネ関係工事売上増〕	中	気候変動対策として再エネ利用の機運が高まり、電源構成における太陽光発電、風力発電等の再エネの割合が上昇する	太陽光関連工事、風力発電関連工事の売上増	電源構成に大きな変化なく、化石燃料への依存が継続する	太陽光関連発電、風力発電関連工事は現状程度に留まる
エネルギー源 〔再エネ売電収入増〕	中		再エネ導入需要の高まりに応需すべく太陽光発電施設設置を進めることによる売電収入増		再エネ導入需要が変化せず、太陽光発電施設は現状から大きく増加しない
エネルギー源/製品・サービス/市場 〔ZEB・ZEH・省エネサポート売上増〕	中	企業のCO2排出削減に向けた意識が高まり、新築物件の殆どがZEB・ZEH等の基準を満たすものとなる	省エネサポート業務強化による、ZEB・ZEH関連工事や省エネ改修工事の受注増	企業のCO2排出削減に向けた意識が現状から大きく変化せず、ZEB・ZEH化ニーズは現状程度に留まる	省エネサポート、ZEB・ZEH関連の工事は現状程度に留まる
製品・サービス/レジリエンス 〔災害対応機会増〕	短	気温上昇が継続し、現在よりも災害頻度が上昇する（4℃よりは低）	BCP強化による災害発生時の迅速な復旧工事の対応、機会増	気温上昇が継続し、現在よりも災害の頻度、程度が上昇する	BCP強化による災害発生時の迅速な復旧工事の対応、機会大幅増

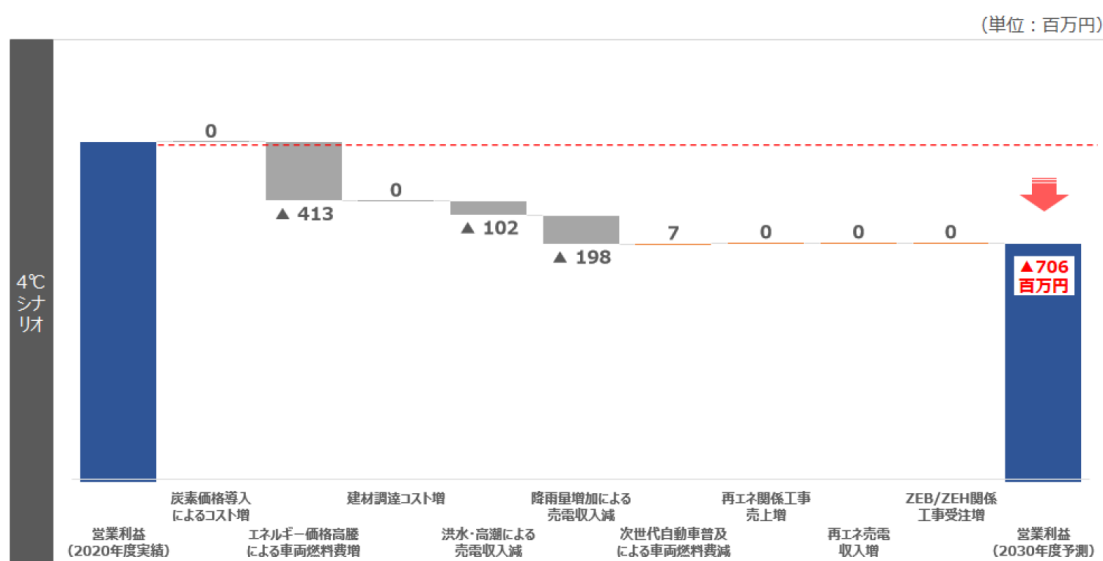
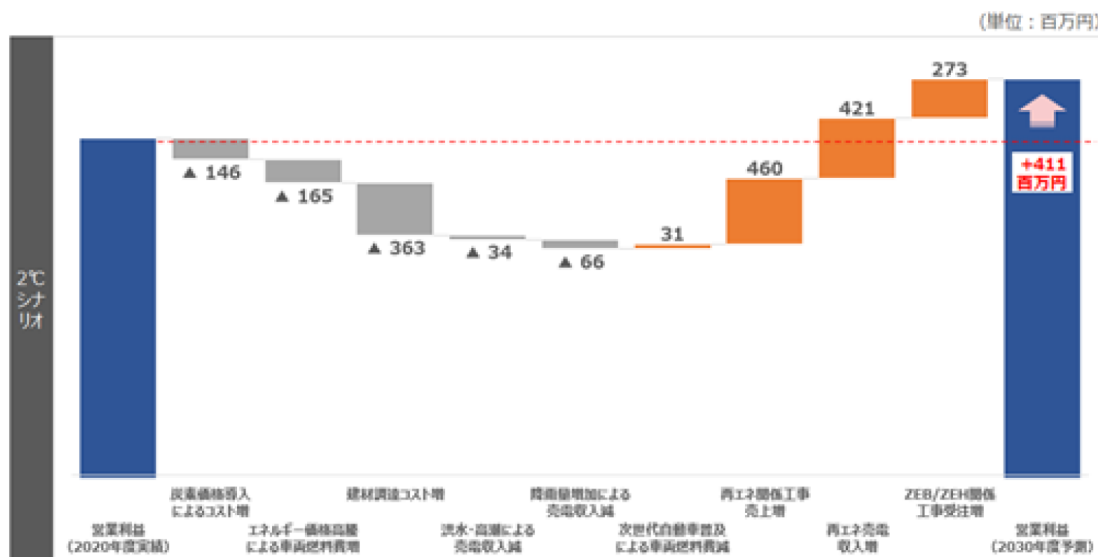
※1 国際エネルギー機関（IEA）：SDS（Sustainable Development Scenario）などを参照

※2 気候変動に関する政府間パネル（IPCC）：RCP8.5などを参照

＜営業利益への影響評価＞

気候関連のリスクと機会が与える財務的影響の評価から、2℃シナリオでは、特に再エネ関係工事及び再エネ売電の利益増加額が大きいため、2030年度の当社の営業利益が増加する結果となった。一方、4℃シナリオでは、当社の営業利益が減少する結果となった。

このシナリオ分析の結果を当社の経営戦略に統合し、特定した機会の拡大及びリスクの低減に向けた取り組みを推進することにより、営業利益の最大化を目指す。



＜対応策＞

気候関連のリスクと機会への主な対応策としては、以下の取り組みを進める。

イ 車両更新時に対象車両は全て電動化する。（電動化に適さない工事用特殊車両等は除く。）

ロ 事業場の建替等をする際は、太陽光発電設備の設置（創エネ）を前提に検討し、さらに条件が整う場合は、ZEB認証を取得することを目指す。

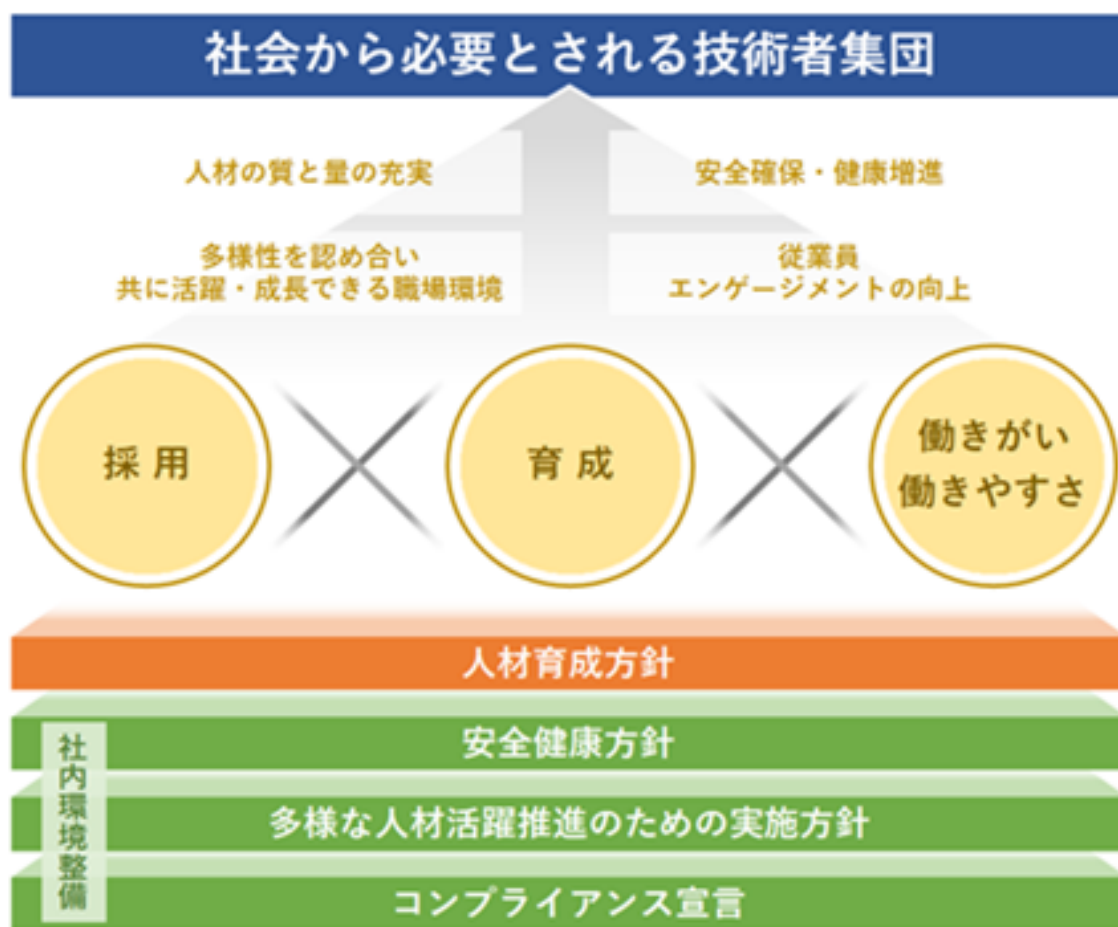
人的資本に関しては、下記方針を基本的な考え方として社会から必要とされる技術者集団の形成を目指している。

[人材戦略方針]

当社の原動力であり、成長の源泉は人材です。社会に安心とやさしい環境をお届けするために、人材の投資を更に拡充し、人材の質と量の充実を図っていきます。

また、多様な人材が、健康で安全にいきいきと働けるよう従業員エンゲージメントを高める施策を積極的に推進していきます。

こうした取り組みを通して、当社で働く一人ひとりが仕事に誇りと喜びを感じ、社会から必要とされる技術者集団でありたいと考えます。



<基本姿勢>

①採用

当社が力強く成長し続けていくためには、既存事業の強化及び将来の成長基盤を築くことが必要であり、その実現に向けては、優秀な人材を採用することが不可欠である。そのため、新卒者だけではなく、即戦力となる経験者、そして国籍、性別、障がい、価値観などに関係なく多様な人材の採用を推進していく。

②育成

当社の人材育成は、従業員の働きがいの向上と会社の持続的な成長を目的に進めている。人材育成を進めることで、個人の成長が会社の成長となり、それが好循環を生み出していく。人材育成方針の下、従業員一人ひとりが自ら成長する意欲を持ち、知識や技術力そして人間力を高めていくよう人材育成に取り組んでいく。

③働きがい・働きやすさ

当社の最も大切なものは従業員である。当社が持続的な成長を果たすためには、従業員一人ひとりが、いきいきと働きがいを感じながら仕事に従事することが必要である。従業員と会社がお互いを理解・信頼できる良い関係性であるよう、これからも従業員のエンゲージメント向上に取り組んでいく。

<多様な人材活躍推進のための取り組み>

①目的

『多様な人材』がいきいきと活躍できる魅力ある企業を創造する。

②目標

イ.いきいきと働ける企業風土の醸成

それぞれの能力と価値観を認め合い、支え合う企業風土を醸成

ロ.ワーク・ライフ・バランスの推進

育児、介護、地域活動など仕事以外の責任と要望を果たし得る労働条件を再整備

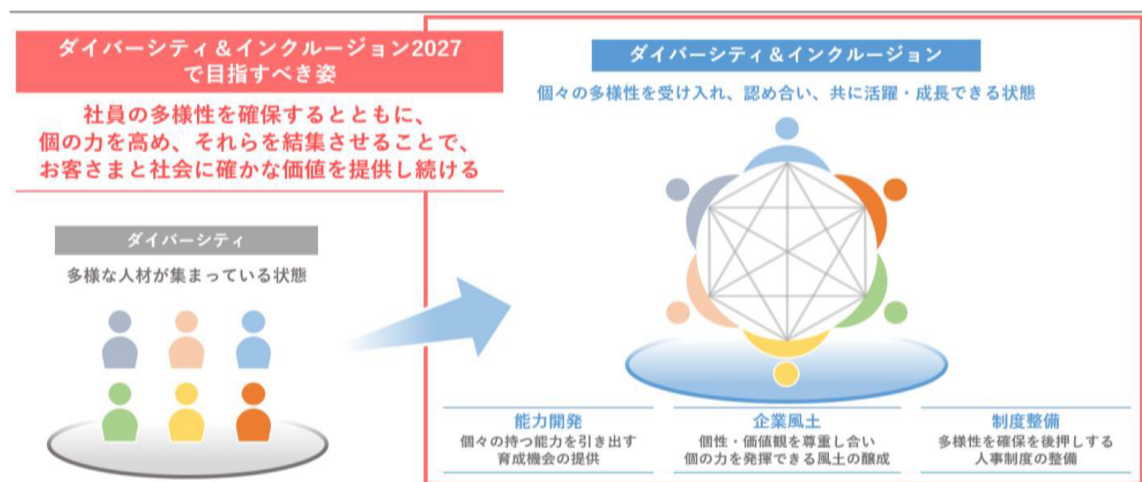
ハ.「多様さ」の活用による競争力の向上

性別、年齢などに関わらず、誰もが能力を最大限発揮できる職場環境を整備し、競争力を向上

③ダイバーシティ&インクルージョン2027

多様性は人的資本の確保や価値向上において重要な要素であることから、2027年度に向けた目指すべき姿や目標をまとめた『ダイバーシティ&インクルージョン2027 (D&I 2027)』を策定した。

[目指すべき姿]



イ. 考え方・具体的な取り組み及び指標

(イ) 女性活躍

多様さの活用による競争力向上を掲げ、性別、年齢等に関わらず、誰もが能力を最大限発揮できるよう環境整備を進めている。意思決定に関わる女性社員を増やすための、キャリア意欲醸成に向けた活動や、働き続けるための環境整備を整えて、女性管理職数の目標値を設定し、性別問わず個々の個性と能力を十分に発揮できる活力ある組織を目指す。

(2020年度) 愛知県ファミリーフレンドリー企業賞

(2022年度) あいち女性輝きカンパニー表彰企業優秀賞

(ロ) ワーク・ライフ・バランス

従業員が仕事と自分の時間のバランスを取り、充実した日々を過ごせる会社を目指し、「自分の時間を大切にできる会社」として全社一体となって働き方改革に取り組んでいる。また、男性育休取得率や介護離職者数の目標を設定し、育児・治療・介護と仕事の両立支援の制度導入や支援ツールの充実と意識啓発による職場風土づくりを行っている。

(2022年度) 名古屋市子育て支援企業表彰企業優秀賞

(ハ) 障がい者雇用

誰もが多様な個性や、特性を理解し合い、共に助け合い、工夫して、人に優しい職場風土を目指し、定着と能力発揮に向けた本人・サポート者支援の継続や研修の実施、就労農園の活用により雇用拡大と障がい者理解への意識醸成に取り組んでいる。

また、障害者技能競技大会出場機会の提供支援により、毎年県大会への出場者があり、全国大会を目指している。(2019、2020、2021年度全国大会出場)

<安全及び健康に関する方針>

当社は、安全健康方針を以下のとおり定めている。

[安全健康方針]

共に働く仲間がいきいきと、充実した生活を送ることができるように、安全と健康の確保を経営の最重要事項に位置付け、「労働災害の根絶・心とからだの健康保持増進・働きやすい職場環境づくり」に取り組みます。

この安全健康方針に沿って、持続的な安全健康活動を展開していきます。また、そのために必要な経営資源を投入します。

[安全健康行動基準]

全ての役員・従業員は、「自分のため、家族のため、共に働く仲間のため」に次のとおり行動します。また、その行動を互いに尊重し、対話と協調により安全と健康への意識を高めます。

1. 安全と健康を最優先します。

▶ 業務を進めるにあたり様々な条件や制約等がある中でも、常に、働く人の安全と健康の確保を最優先に考え判断・行動します。

2. ルールを理解し、必ず守ります。

▶ 法令、規程、マニュアル等、安全や健康に関わる様々なルールと、それを実践する技術・技能の習得に努めます。その上で、必ずルールに基づいて行動します。

3. 安全と健康の確保に向け、自ら考え、行動します。

▶ 安全と健康は「自らの行動でつくり上げるもの」であることを意識し、継続的な活動を自ら進んで実践します。

4. 仲間の不安全行動や不調のサインを見逃しません。

▶ 仲間の行動や様子に関心を持ち、不安全行動は即座に正し、協力会社の方々を含め地位や立場を超えて発言・行動します。また、心身の不調のサインを見逃さず、早期に対応します。

5. リスクの洗い出しを行い、災害の未然防止を図ります。

▶ 災害に繋がるあらゆるリスクを洗い出し、回避もしくは低減する方法を検討して、確実に実践します。

6. 問題の原因を追究し、対策を充実させます。

▶ 災害や失敗を繰り返さないために、真の原因を明らかにして、人・モノ・仕組み等あらゆる側面から効果的な対策を講じます。

(3) リスク管理

当社グループは、重大な影響を与えるESGに関するリスクについて、経営企画部署及び各部門が、経営計画の策定及び重要な意思決定にあたり、毎年定期的かつ必要に応じて把握・評価し、経営執行会議において審議を受けるとともにこれを管理することとしている。また、毎年定期的かつ必要に応じて、取締役会において審議・報告することとしている。

気候変動に関しては、TCFD提言に基づく気候関連のリスクと機会の特定と評価の結果を環境対策推進会議で審議するとともに、特定したリスクと機会に関する対応策の進捗状況の確認を行う。また、「ゼロエミッションへの達成目標」を設定し、排出量をモニタリングしている。

なお、環境対策推進会議にて、影響が大きいと評価された気候関連リスクは、経営企画部が事務局を務めるグループ全体のリスク管理とも連携している。グループ全体のリスク管理において決定された気候関連のリスク対策は、必要に応じ、環境対策推進会議へ共有される。

人的資本に関しては、要員数や技術力が不足することにより事業計画や各部署の業務執行に支障を来す恐れがあることから、中長期の要員計画及び教育計画を立案し、経営執行会議において審議を受けるとともに、取締役会において審議・報告することとしている。

(4) 指標及び目標

当社は、ESGに関する指標及び目標を定め、ESGの取り組みを推進している。

気候変動に関しては、「ゼロエミッションの達成目標」を定め、目標達成に向けた取り組みを進めるとともに、総合設備企業としての強みを活かし、脱炭素社会の実現に貢献していく。

<当社のゼロエミッションの達成目標>

[2030年]	
■	売上高あたりのCO2排出量を2013年度比で46%以上削減します
* 上記目標達成に向けた具体的な取り組み内容 *	
・ 車両更新時に対象車両は全て電動化します（電動化に適さない工事用特殊車両等は除く）	
・ 事業場の建替等をする際は、太陽光発電設備の設置（創エネ）を前提に検討し、さらに条件が整う場合は、ZEB認証を取得することを目指します	
[2050年]	
■	CO2排出量ネットゼロを実現します

<CO2削減目標と実績>

[単位：t-CO2]

対象	基準年排出量	排出量実績	目標年排出量
	2013年度	2021年度	2030年度
原単位 ^{※1}	874	650 (△26%)	471 (△46%)
Scope1+2	16,759	12,852	—
(Scope1 ^{※2})	9,222	7,810	—
(Scope2 ^{※3})	7,537	5,042	—
Scope3 ^{※4}	—	42,139	—

※1 (Scope1+2 [t-CO2]) / (売上高 [百万円]) × 10,000

※2 事業者自らによる温室効果ガスの直接排出（車両燃料等）

※3 他社から供給された電気、熱・蒸気の使用に伴う間接排出

※4 Scope1、2以外の間接排出（事業者の活動に関連する他社の排出等）

人的資本に関しては、人材戦略に関する指標及び目標を定め取り組みを推進している。

<主な取り組み及び指標>

①採用

主な取り組み

- ・ 多様な人材の採用強化（経験者、外国人、デジタル人材等）
- ・ 女性従業員の積極的な採用
- ・ 障がい者雇用率の充足

関連指標		実績 (2022年度)	目標値 (2027年度)
社員に占める経験者採用の割合（人数）		6.2%（268名）	
定期採用者に占める女性社員の割合（人数）	合計	10.7%（15名）	15%以上
	業務職	83.3%（10名）	
	技術職	3.9%（5名）	
障がい者雇用率		2.8%	2.8%以上

②育成

主な取り組み

- ・ 人間力の強化に向けた教育の実施
- ・ プロフェッショナル人材を育成するための重点資格取得に向けたサポートの充実
- ・ 女性活躍を促進させるための育児時短勤務者へのモチベーション向上研修の実施や積極的な管理職の登用
- ・ 中核社員の育成・確保のための経験者の管理職の登用

関連指標	実績 (2022年度)	目標値 (2027年度)
女性管理職の人数	18名	31名以上
管理職（社員）に占める経験者 採用者の割合（人数）	9.1%（67名）	

③働きがい・働きやすさ

主な取り組み

- ・ ワーク・ライフ・バランスを推進するための育児・介護・病気療養等の両立支援体制の充実
- ・ 男性育児休暇取得促進に向けた教育の実施
- ・ 心理的安全性の高い職場づくりのための各種活動及び教育の実施

関連指標		実績 (2022年度)	目標値 (2027年度)
社員の育児休業及び育児目的 休暇の割合	男性	88.6%	100%
	女性	100%	
社員の平均勤続年数	全体	18.1年	
	男性	17.8年	
	女性	22.2年	

（注）「指標及び目標」については、連結グループでの記載が困難であるため当社単体での記載としている。

3【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が連結会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があると認識している主要なリスクは、以下の様なものがある。

当社グループは、これらのリスク発生の可能性を十分認識したうえで、発生の回避及び発生した場合の的確な対応に努める所存である。

なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものである。

(1) 電力会社向け売上高について

当社は、中部電力㈱の子会社である。親会社並びにその分割子会社である中部電力パワーグリッド㈱及び中部電力ミライズ㈱より配電設備の新增設工事や、その他修繕工事等を受注・施工しており、当社の売上高の約4割を占めている。今後、上記3社の事業環境変化に伴う電力設備投資抑制により、工事量減少が見込まれるため、生産性向上などコスト競争力の強化に努めている。

しかしながら、想定を上回る電力設備投資の抑制及び市場価格等の下落による上記3社との取引価格の低下があった場合には、売上高や利益が低下する恐れがあり、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローに影響を及ぼす可能性がある。

(2) 一般得意先向け売上高について

当社グループの事業は、設備工事業を主としており、建設市場や一般得意先の設備投資など景気の動向に左右される。設備投資抑制による受注高減少や低価格競争に対応するため、新規市場・新規顧客の開拓など受注拡大のための施策を展開している。

しかしながら、想定を上回る景気の悪化により設備投資の大幅な抑制があった場合には、売上高や利益が低下する恐れがあり、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローに影響を及ぼす可能性がある。

(3) 完成工事原価の変動リスク

当社グループの工事原価は、主に材料費、労務費、外注費、経費からなり、受注前原価検討による原価低減や資材の廉価購買などに努めている。

しかしながら、想定を上回る工事原価の変動があった場合には、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローに影響を及ぼす可能性がある。

(4) 重大な不良工事

当社グループは、安全かつ高品質な施工をお客さまへ提供するために、施工に関するマニュアルや手引の整備、技術教育、現場パトロールの実施など、品質管理の徹底に努めている。

しかしながら、工事施工に関し、品質上重大な不具合や事故が発生した場合には、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローに影響を及ぼす可能性がある。

(5) 保有資産に関するリスク

当社グループは、事業活動上の必要性から事業用不動産、有価証券等の資産を保有している。事業用不動産に関しては、当該資産から得られる将来キャッシュ・フローによって資産の帳簿価額を回収できるか検証している。また、有価証券等の資産は、その必要性や保有に伴う便益やリスクが資本コストに見合っているか検証し、適切でない、又は見合っていない場合は売却を行うこととしている。

しかしながら、事業用不動産の収益性が著しく低下した場合や有価証券等の時価が著しく下落した場合には、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローに影響を及ぼす可能性がある。

(6) 取引先の信用リスク

当社グループは、取引先と契約を締結したうえで契約条項に基づき工事を施工し、工事代金を受領している。契約の際には、取引先の与信管理を行い不良債権の発生防止に努めている。

しかしながら、取引先が倒産し、大型不良債権が発生した場合には、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローに影響を及ぼす可能性がある。

(7) 太陽光発電事業にかかるリスク

当該事業は、通常その事業期間が長期にわたることから、十分な調査及び想定されるリスクの回避・低減の検討を行ったうえでプロジェクトを選定している。

しかしながら、事業環境に著しい変化が生じた場合や業務遂行上重大な災害・事故等が発生した場合には、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローに影響を及ぼす可能性がある。また、事業について自治体や地域住民への説明が十分でない場合は、レピュテーションが低下する可能性がある。

(8) 退職給付債務

当社の退職年金資産の運用にあたっては、中長期的な投資環境を見通し、適正な資産運用ができるよう年金資産運用検討委員会において検討している。

退職年金資産の運用結果が前提条件と異なる場合、その数理計算上の差異は、発生年度以降の一定の期間で費用処理することとしている。

しかしながら、退職年金資産の運用利回りの悪化や割引率の低下により、掛金や退職給付費用が大幅に増加した場合には、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローに影響を及ぼす可能性がある。

(9) コンプライアンス

当社グループでは、コンプライアンス宣言に基本方針と行動基準を定めるとともに、従業員教育を実施し、コンプライアンスの徹底に努めている。

しかしながら、コンプライアンスに反する事象の発生により、当社グループの社会的信用が低下した場合には、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローに影響を及ぼす可能性がある。

(10) 情報の流出

当社グループでは、個人情報などの重要情報を適切に管理するため、法令などに則り、社内体制及び情報の取り扱いに関するルールを定めるとともに、情報システムのセキュリティ強化や従業員教育などに取り組んでいる。

しかしながら、情報が外部に流出し、当社グループの社会的信用が低下した場合には、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローに影響を及ぼす可能性がある。

(11) 自然災害等の発生

当社グループは、大規模自然災害や戦争・クーデター・テロ等有事の発生、感染症の世界的流行等による業務中断リスクを抑えるため、事業継続計画などを定めている。

しかしながら、大規模自然災害や戦争・クーデター・テロ等有事の発生、感染症の世界的流行等により、人的・物的被害の発生や物流網の寸断による資材調達の停滞、人員不足による工事の中断・遅延や世界的景気の悪化などによる受注高・利益の低下の事態が生じた場合には、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローに影響を及ぼす可能性がある。

(12) 気候変動に関するリスク

当社グループでは、「トーエネックグループ環境基本方針」を定め環境保全に積極的に取り組むとともに、脱炭素社会の実現に向けて地球温暖化防止を推進し、事業活動を通じて脱炭素化を目指し取り組みを進めている。また、当社グループは2022年4月にT C F D（気候関連財務情報開示タスクフォース）提言への賛同を表明し、気候変動による事業への影響を想定し、リスクマネジメントを強化するとともに、対策と事業戦略を一体化していくための取り組みを開始している。

しかしながら、当社グループにおいて脱炭素社会に向けた取り組みの遅延により、環境経営を推進する得意先からの受注が大幅に減少した場合や、各種規制、炭素価格の導入等がなされ、資材調達コストが大幅に上昇した場合、また、異常気象に伴い生産性が低下した場合には、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローに影響を及ぼす可能性がある。

4【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要並びに経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は以下のとおりである。

また、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものである。

(1) 経営成績

当期における我が国経済は、ウィズコロナの新たな段階への移行が進められる中、緩やかに持ち直しの動きが続いた。建設業界においても、公共投資は底堅い動きで推移し、民間設備投資は堅調な企業収益等を背景に持ち直しの動きがみられたが、一方で原材料価格の高騰やサプライチェーンの混乱、急激な為替変動などの影響が懸念される状況にあった。

当社グループは、中期経営計画2022（2020年度～2022年度）の重点方針（①事業拡大と基盤強化、②収益力向上に向けた競争力の強化、③人材の育成強化、④企業風土改革の推進）に基づき、成長が見込まれるエリア（首都圏、近畿圏等）や業種（半導体、医療・医薬関連等）における営業活動の強化や柔軟な施工体制の構築、積極的な技術職の採用、人材育成の強化、働き方改革及びかいぜん活動の推進等の諸施策を進めてきた。また、企業の存続にはお客さまや社会との信頼関係が不可欠であることから、安全・品質の確保やコンプライアンスの推進、ガバナンスの強化等にも継続的に取り組んできた。

この結果、中期経営計画2022の最終年度にあたる当期の業績は、受注高、売上高ともに過去最高水準となった。しかしながら工事の進捗が当初の想定を下回ったことに加え、一部の工事及び事業で採算性が低下したこと、太陽光発電事業に係る固定資産の減損損失等を計上したことなどにより、数値目標（売上高2,450億円、経常利益120億円、ROE 6.5%）に対しては未達となった。

〔連結業績〕	売上高	232,053百万円	（対前期比 5.7%増）
	営業利益	10,287百万円	（対前期比 26.9%減）
	経常利益	8,983百万円	（対前期比 32.9%減）
	親会社株主に帰属する当期純損失（△）	△5,548百万円	
〔個別業績〕	売上高	207,618百万円	（対前期比 5.0%増）
	営業利益	8,373百万円	（対前期比 31.4%減）
	経常利益	7,412百万円	（対前期比 32.9%減）
	当期純損失（△）	△6,502百万円	

セグメントごとの経営成績は、次のとおりである。

〔設備工事業〕

設備工事業は、前期と比較して増収となったものの、一部の工事で採算性が低下したことや一般管理費の増加などにより、売上高214,981百万円（前期比5.6%増）、セグメント利益（営業利益）12,493百万円（前期比21.1%減）となった。

〔エネルギー事業〕

エネルギー事業は、太陽光発電事業の売電収入が増加したものの、一部の事業で採算性が低下したことなどにより、売上高12,522百万円（前期比8.1%増）、セグメント利益（営業利益）3,335百万円（前期比0.5%減）となった。

〔その他〕

その他の事業は、売上高8,427百万円（前期比2.4%増）、セグメント利益（営業利益）391百万円（前期比28.6%減）となった。

(2) 財政状態

当社グループの財政状態については、総資産は300,172百万円となり、前連結会計年度末に比べ1,427百万円の減少となった。これは、流動資産においては現金預金の増加（1,086百万円）、受取手形・完成工事未収入金等の増加（10,366百万円）など、固定資産においては有形固定資産の減少（13,960百万円）などによるものである。

負債は182,978百万円となり、前連結会計年度末に比べ7,975百万円の増加となった。これは、流動負債においては支払手形・工事未払金等の増加（5,954百万円）、短期借入金の増加（4,900百万円）など、固定負債においてはリース債務の減少（5,979百万円）などによるものである。

純資産は117,193百万円となり、前連結会計年度末に比べ9,402百万円の減少となった。これは、利益剰余金の減少（8,071百万円）などによるものである。

(3) キャッシュ・フロー

当連結会計年度における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）の期末残高は、前連結会計年度と比較して2,176百万円増加し、30,601百万円となった。

なお、当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりである。

営業活動によるキャッシュ・フローは、税金等調整前当期純損失（4,046百万円）、減価償却費（9,887百万円）、減損損失（10,004百万円）、リース解約損失引当金の増加（967百万円）、売上債権の増加（10,339百万円）、仕入債務の増加（5,130百万円）、法人税等の支払（3,553百万円）などにより、12,640百万円の資金増加（前連結会計年度は5,943百万円の資金増加）となった。

投資活動によるキャッシュ・フローは、有形固定資産の取得による支出（2,378百万円）などにより、2,119百万円の資金減少（前連結会計年度は2,969百万円の資金増加）となった。

財務活動によるキャッシュ・フローは、短期借入金の増加（4,900百万円）、リース債務の返済による支出（7,526百万円）、配当金の支払（2,518百万円）などにより、8,358百万円の資金減少（前連結会計年度は27,522百万円の資金減少）となった。

当社グループの資本の財源及び資金の流動性については、次のとおりである。

当社グループの運転資金需要のうち主なものは、設備工事業における材料費、外注費、販売費及び一般管理費等の営業費用である。また、投資を目的とした資金需要のうち主なものは、設備工事業における当社事業場の新築によるものである。

運転資金は、主として営業活動によって得られた自己資金を充当し、必要に応じて金融機関からの借入れにより資金調達を実施している。長期資金は、営業活動によって得られた自己資金を充当するほか、金融機関からの借入れ、社債発行及びファイナンス・リース等による資金調達を実施しており、多様な調達手段の確保及び返済期日の分散化に努めている。なお、当連結会計年度末における有利子負債は、97,056百万円となっている。

営業活動によって得られた資金は、上記のとおり、運転資金や長期資金に充当するほか、「第4〔提出会社の状況〕3〔配当政策〕」に記載のとおり、連結配当性向30%を目処に株主還元することとしている。

(4) 重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

当社グループの連結財務諸表は、我が国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されている。この連結財務諸表の作成にあたり重要となる会計方針については、「第5〔経理の状況〕 (1) 〔連結財務諸表〕 〔注記事項〕 (連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)」に記載のとおりであるが、決算日における資産・負債の報告数値、報告期間における収益・費用の報告数値に影響を与える重要な見積りは次のとおりである。

① 完成工事高及び完成工事原価の計上

当社グループは、設備工事業における工事契約において、一定の期間にわたり充足される履行義務については、期間がごく短い工事契約を除き、履行義務の充足に係る進捗度を見積もり、当該進捗度に基づき収益を一定の期間にわたり認識している。なお、進捗度の見積りは、実施した工事に関して発生した工事原価が、完成までに予想される工事原価総額に占める割合（インプット法）を使用している。決算日における履行義務の充足に係る進捗度の見積りは、施工部署が作成した実行予算を基礎としており、発注者又は外注業者等との間で行われた協議の結果に関する情報を主要な仮定として織り込んでいるが、経済状況による材料費・外注費の変動や設計変更などに伴いその見積りが変更された場合には、当該連結会計年度においてその影響額を損益として処理することとなる。

② 工事損失引当金

当社グループは、将来の工事損失の発生に備えるため、工事損失が確実視される場合に、当連結会計年度末において合理的に見積もることができる工事損失見込額を工事損失引当金として計上している。工事損失引当金の計上にあたっては、期末時点で入手可能な情報に基づき最善の見積りを行っているが、工事の進捗遅延による経費の増加、想定外の労務費や資材価格の高騰などにより、追加損失が発生する可能性がある。

③ 固定資産の減損

当社グループは、固定資産の収益性の低下により、固定資産の回収可能価額が帳簿価額を下回る場合、帳簿価額を回収可能価額まで減損し、当該減少額を減損損失として計上している。

固定資産の回収可能価額について、期末時点で入手可能な情報に基づき最善の見積りを行っているが、当初見込んでいた収益が得られなかった場合や将来キャッシュ・フローなどの前提条件に変化があった場合、固定資産の減損を実施する可能性がある。

④ 退職給付債務及び退職給付費用

退職給付債務及び退職給付費用は、数理計算上で設定される前提条件に基づいて算定されており、これらの前提条件には、割引率、年金資産の長期期待運用収益率、退職率、死亡率等が含まれている。当社グループは、この数理計算上で設定された前提条件は適切であると考えているが、実績との差異又は前提条件自体の変更により、退職給付債務及び退職給付費用に影響を与える可能性がある。

⑤ 貸倒引当金

当社グループは、債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を貸倒引当金として計上している。貸倒引当金の計上にあたっては、期末時点で入手可能な情報に基づき最善の見積りを行っているが、債権に影響を与える予測不能な状況の変化などにより、追加引当が必要となる可能性がある。

⑥ 繰延税金資産

当社グループは、繰延税金資産の計上に際して、将来の課税所得の見積りに基づいて回収可能性を検討しており、回収が不確実と考えられる部分については、評価性引当額として繰延税金資産を計上していない。繰延税金資産の回収可能性の検討にあたっては、期末時点で入手可能な情報に基づき最善の見積りを行っているが、経済環境の変化や収益性の低下などにより将来の課税所得が見込みを下回る場合、繰延税金資産を減額する可能性がある。

(5) 受注及び売上の状況

受注及び売上の状況は、次のとおりである。

① 受注実績

セグメントの名称	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日) (百万円)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日) (百万円)
設備工事業	210,662	258,971 (22.9%増)
エネルギー事業	—	—
その他	—	—
合計	210,662	258,971 (22.9%増)

② 売上実績

セグメントの名称	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日) (百万円)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日) (百万円)
設備工事業	203,614	214,981 (5.6%増)
エネルギー事業	11,582	12,522 (8.1%増)
その他	4,420	4,549 (2.9%増)
合計	219,617	232,053 (5.7%増)

(注) 1 当社グループ（当社及び連結子会社）では設備工事業以外は受注生産を行っていない。

2 当社グループ（当社及び連結子会社）では生産実績を定義することが困難であるため「生産の状況」は記載していない。

3 売上高総額に対する割合が100分の10以上の相手先の売上高及びその割合

期別	相手先	売上高（百万円）	割合（％）
前連結会計年度	中部電力グループ（※）	75,916	34.6
当連結会計年度	中部電力グループ（※）	75,076	32.4

※ 中部電力グループ：中部電力㈱、中部電力パワーグリッド㈱、中部電力ミライズ㈱

4 上記の金額は、セグメント間の取引について相殺消去後の数値である。

なお、参考のため提出会社個別の事業の状況は次のとおりである。

設備工事業における受注工事高及び完成工事高の状況

① 受注工事高、完成工事高及び次期繰越工事高

期別	区分	前期繰越 工事高 (百万円)	当期受注 工事高 (百万円)	計 (百万円)	当期完成 工事高 (百万円)	次期繰越 工事高 (百万円)
前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	配電線工事	1,865	75,606	77,472	71,713	5,758
	地中線工事	5,981	9,537	15,518	9,677	5,841
	屋内線工事	48,780	64,099	112,879	61,409	51,469
	空調管工事	15,875	20,248	36,124	19,461	16,663
	通信工事	14,125	18,995	33,120	19,891	13,229
	計	86,628	188,487	275,115	182,154	92,961
当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)	配電線工事	5,758	73,042	78,801	73,500	5,300
	地中線工事	5,841	10,984	16,825	8,934	7,890
	屋内線工事	51,469	100,512	151,982	70,067	81,915
	空調管工事	16,663	27,917	44,580	18,609	25,970
	通信工事	13,229	19,377	32,606	19,781	12,825
	計	92,961	231,835	324,796	190,894	133,902

- (注) 1 前事業年度以前に受注した工事で、契約の変更により請負金額の増減がある場合は、当期受注工事高にその増減額を含む。したがって、当期完成工事高にもかかる増減額が含まれる。
- 2 次期繰越工事高は（前期繰越工事高＋当期受注工事高－当期完成工事高）である。

② 受注工事高の受注方法別比率

工事受注方法は、特命、競争及び中部電力パワーグリッド㈱との配電関係工事請負契約に大別される。

期別	区分	特命 (%)	競争 (%)	請負契約 (%)	計 (%)
前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	配電線工事	13.2	0.1	86.7	100
	地中線工事	63.8	36.2	—	100
	屋内線工事	33.8	66.2	—	100
	空調管工事	27.4	72.6	—	100
	通信工事	91.2	8.8	—	100
当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)	配電線工事	9.8	0.1	90.1	100
	地中線工事	52.2	47.8	—	100
	屋内線工事	25.0	75.0	—	100
	空調管工事	43.6	56.4	—	100
	通信工事	90.7	9.3	—	100

(注) 百分比は請負金額比である。

③ 完成工事高

期別	区分	中部電力グループ (※) (百万円)	官公庁 (百万円)	一般民間会社 (百万円)	合計 (百万円)
前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	配電線工事	66,748	44	4,920	71,713
	地中線工事	4,448	41	5,187	9,677
	屋内線工事	734	2,493	58,181	61,409
	空調管工事	1,828	162	17,470	19,461
	通信工事	66	99	19,725	19,891
	計	73,826	2,842	105,485	182,154
当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)	配電線工事	66,153	52	7,294	73,500
	地中線工事	4,072	42	4,819	8,934
	屋内線工事	596	2,437	67,032	70,067
	空調管工事	2,109	843	15,656	18,609
	通信工事	87	127	19,566	19,781
	計	73,020	3,503	114,370	190,894

※ 中部電力グループ：中部電力㈱、中部電力パワーグリッド㈱、中部電力ミライズ㈱

(注) 1 前事業年度の完成工事のうち主なもの

前田建設工業㈱	(仮称) 亀戸六丁目計画 (商業棟) 新築工事
㈱大林組	(仮称) N3計画 新築工事
積水ハウス㈱	「読売新聞中部支社跡地」有効活用計画
鹿島建設㈱	中電武豊火力貯炭建築
大成建設㈱	ホテルインディゴ犬山有楽苑新築工事

当事業年度の完成工事のうち主なもの

カンボジア電力公社	プノンペン首都圏送配電網拡張整備事業
㈱竹中工務店	三井不動産ららぽーと門真
㈱熊谷組	日本電産㈱向日町プロジェクトC棟建築工事
法務省	小倉拘置支所庁舎等新営 (電気設備) 工事
㈱竹中工務店	名古屋国際展示場新第1展示館

2 売上高総額に対する割合が100分の10以上の相手先の完成工事高、兼業事業売上高及びその割合

期別	相手先	完成工事高		兼業事業売上高		合計	
		(百万円)	(%)	(百万円)	(%)	(百万円)	(%)
前事業年度	中部電力グループ (※)	73,826	37.3	2,049	1.1	75,875	38.4
当事業年度	中部電力グループ (※)	73,020	35.2	2,018	0.9	75,039	36.1

※ 中部電力グループ：中部電力㈱、中部電力パワーグリッド㈱、中部電力ミライズ㈱

④ 次期繰越工事高（2023年 3月31日現在）

区分	中部電力 グループ（※） （百万円）	官公庁 （百万円）	一般民間会社 （百万円）	合計 （百万円）
配電線工事	7	19	5,273	5,300
地中線工事	1,431	3	6,455	7,890
屋内線工事	493	2,471	78,950	81,915
空調管工事	2,211	4	23,755	25,970
通信工事	8	111	12,705	12,825
計	4,151	2,610	127,140	133,902

※ 中部電力グループ：中部電力㈱、中部電力パワーグリッド㈱、中部電力ミライズ㈱

（注） 次期繰越工事のうち主なもの

NECファシリティーズ㈱	セル6・UTY棟 受変電設備設置工事	2024年 2月
㈱大林組	崇教眞光本山電気設備工事（総本山・別棟）	2024年10月
新光電気工業㈱	千曲工場新築に伴う電気設備工事	2023年11月
大成建設㈱	春日・後楽園駅前地区再開発（南街区）SA棟・SC棟	2023年11月
鉄建建設㈱	ミャンマー鉄道整備事業 フェーズⅠ C P 1 0 2	2023年 9月

兼業事業における売上高の状況

区分	前事業年度 （自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日） （百万円）	当事業年度 （自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日） （百万円）
エネルギー事業	11,582	12,522
商品販売		
電線類	1,071	1,160
その他工事用材料	2,917	3,013
その他	23	27
商品販売計	4,013	4,202
計	15,595	16,724

（注） 当事業年度における商品販売先は同業者79.1%、その他20.9%となっている。

5 【経営上の重要な契約等】

該当事項なし。

6 【研究開発活動】

当社グループにおける研究開発活動は、提出会社においてのみ行っており、連結子会社においては行っていない。

当社は、「独自技術の展開」という経営理念に基づき、付加価値の創出に資する技術研究開発、及び効率化に資する技術研究開発を基本方針とし、電気・空調等、総合的なエネルギー利用、環境保全に関する研究開発に取り組んでいるほか、安全性の向上、施工技術の高度化、環境保全やコストダウンを目的とした研究開発を推進している。

当連結会計年度における研究開発費は、507百万円である。

〔設備工事業〕

技術研究開発部における主な研究開発

(1) マイクログリッドシステムの最適運用技術の開発

当社施設に太陽光発電、蓄電池、コージェネレーションシステム、水素製造装置、水素燃料電池などを組み合わせ、それらの一部に直流配電システムを採用したマイクログリッドシステム(MGS)を構築した。2022年度は各種設備の運転データ分析・評価により、エネルギー効率向上のための改善点を明らかにし、これらを解決する最適運用手法を策定した。

(2) 設計業務及び施工担当者業務における省力化ツールの開発

働き方改革の推進の一環として、設計・施工業務の省力化が可能な各種ツール開発に取り組んでいる。設計業務では、2021年度に開発したBIM(Building Information Modeling)情報を活用した電灯設備の負荷容量集計表、幹線計算書などの自動作成ソフトウェアに対し、使い勝手向上のための機能を追加した。また、動力設備用負荷集計ソフトウェアの仕様を決定した。施工担当者業務では、工事に関する帳簿保管義務の有無を確認するための一覧表を簡単に作成するソフトウェア、省力化スリーブ（特別仕様）の強度計算書作成を支援するソフトウェアを開発した。

工事施工部門における主な研究開発

(1) 配電工事における準備作業の効率化に関する研究

2021年度に全社配備した材料の組み立て作業（準備作業）に使用する専用台車の作業性や耐久性の向上を目的に、各営業所の現在の使用状況（使用実績）を調査するとともに、20営業所に出向き作業員の生の声を吸い上げた。作業員からは現場での使用にあたっては「運搬する際に背が高くて不安」「大きくて作業車の積載場所を取りすぎる」などの意見があり、現場持ち出しのネックとなっていることが確認できたため、コンパクトにできる仕様に変更した。なお、営業所内での使用（若年層の育成のために使用）については、特に研修クルーを有している営業所では活用されておりおおむね好評であった。

2023年度にリリースし、現場での実感、使いやすさなどの評価、レビューを第一と考え、フォローを実施する。

(2) 停電・仮送電作業の効率化に関する研究

低圧仮送電工法の仕様変更

2020年度に導入した針電極は現場から好感触を得られたが、電極の接触が不安定になる要素があったことから改良仕様を検討した。技術的に難易度が高いものの、試作品の「導通性能」「電気抵抗」「電線被覆影響」「電線導体影響」「耐久性」「適用電線範囲」の課題抽出が完了し、最適な形状を検討中である。

また、布設型工事用変圧器は、軽量化しつつ中部電力設備の変圧器バンク80%の電源確保可能な工事用変圧器の開発に向け詳細検討を実施した。その結果、詳細設計が完了し試作品が完成したため、2023年度早々に、現場試行による改良により型式を決定する。加えて量産化に向けた調整に入るとともに、今後のラインナップ追加について、検討及び研究を進める。

〔エネルギー事業〕

研究開発活動は特段行っていない。

〔その他〕

研究開発活動は特段行っていない。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当社グループの当連結会計年度中に実施した設備投資の総額は5,956百万円であり、そのうち主なものは、設備工事における工事用の車両・機械・工具の取得によるものである。なお、設備投資の金額には、無形固定資産、長期前払費用への投資を含んでいる。

また、前連結会計年度末までに計画していた重要な設備の新設のうち、当連結会計年度に計画を中止したものは、「3 設備の新設、除却等の計画 (1) 重要な設備の新設等 (注) 2」に記載している。

2【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2023年 3月31日現在

事業所名 (所在地)	帳簿価額（百万円）					従業員数 (人)
	建物・構築物	機械、運搬具 及び工具器具 備品	土地		合計	
			面積 (㎡)	金額		
本店 (名古屋市中区)	649	171	83,798 (990)	3,754	4,574	221
教育センター (名古屋市中南区)	2,202	160	26,056 (3,408)	2,516	4,880	95
本店別館 (名古屋市中港区)	822	243	23,148 (16,596)	3,137	4,203	935
東京本部 他7事業所	10,695	6,208	417,760 (171,177)	22,361	39,265	3,496
エネルギー事業部 (熊本県大津町他)	2,936	73,211	－ (5,317,773)	－	76,148	61

(2) 国内子会社

2023年 3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	帳簿価額（百万円）					従業員数 (人)
		建物・ 構築物	機械、 運搬具及び 工具器具 備品	土地		合計	
				面積 (㎡)	金額		
(株)トーエネックサ ービス	本店 (名古屋市中区)	231	35	－ (－)	－	266	179
	名古屋支店 他 7 事業所	221	116	－ (－)	－	338	478

(注) 1 帳簿価額に建設仮勘定は含まない。

2 土地及び建物の一部を連結会社以外から賃借している。賃借料は2,045百万円であり、土地の面積については、() 内に外書きで示している。

3 提出会社の前連結会計年度において本店に含めていた資産の一部について、組織変更に伴い、当連結会計年度より教育センターに含めて表示している。

3【設備の新設、除却等の計画】

重要な設備の新設及び除却等の計画は以下のとおりである。

(1) 重要な設備の新設等

会社名	事業所名 (所在地)	設備の内容	投資予定額		資金調達方法	備考
			総額 (百万円)	既支払額 (百万円)		
提出会社	本店 (洲崎ビル) (名古屋市中区)	建物他	未定	3	自己資金	2024年9月完成予定
提出会社	本店 (新本店ビル) (名古屋市中区)	建物他 (建替)	未定	591	借入金及び自己資金	2028年度完成予定

(注) 1 既支払額は、当連結会計年度末の金額を記載している。

2 前連結会計年度末までに計画していた重要な設備の新設のうち、当連結会計年度に計画を中止したものは次のとおりである。

会社名	事業所名 (所在地)	設備の内容	投資予定額	
			総額 (百万円)	既支払額 (百万円)
提出会社	エネルギー事業部 (太陽光発電所) (静岡県)	機械装置他	16,420	10,484

(注) 第2四半期連結会計期間において事業の見通しが不透明となり、当初想定していた収益が見込めなくなったため、減損損失(10,004百万円)を計上している。本事業計画については、2023年1月24日開催の取締役会において撤退を決議している。

(2) 重要な設備の除却等

上記、新本店ビル建替のための除却等を除き、重要な設備の除却等の計画はない。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数（株）
普通株式	40,000,000
計	40,000,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2023年 3月31日)	提出日現在発行数 (株) (2023年 6月29日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	19,329,990	19,329,990	名古屋証券取引所 (プレミアム市場) 東京証券取引所 (プライム市場)	単元株式数 100株
計	19,329,990	19,329,990	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

①【ストックオプション制度の内容】

該当事項なし。

②【ライツプランの内容】

該当事項なし。

③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項なし。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項なし。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2017年10月 1日 (注)	△77,319,964	19,329,990	—	7,680	—	6,831

(注) 2017年6月29日開催の第99回定時株主総会決議により、2017年10月1日付で当社普通株式5株を1株に併合した。これにより、発行済株式総数は77,319,964株減少し、19,329,990株となっている。

(5) 【所有者別状況】

2023年 3月31日現在

2023年 3月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）								単元未満株式の状況（株）
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数（人）	－	29	22	155	107	1	4,077	4,391	－
所有株式数（単元）	－	20,394	686	105,501	9,355	1	56,657	192,594	70,590
所有株式数の割合（％）	－	10.59	0.35	54.78	4.86	0.00	29.42	100	－

（注）1 自己株式635,825株は、「個人その他」に6,358単元及び「単元未満株式の状況」に25株を含めて記載している。

2 「その他の法人」及び「単元未満株式の状況」の欄には、証券保管振替機構名義の株式がそれぞれ4単元及び20株含まれている。

(6) 【大株主の状況】

2023年 3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数（千株）	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合（%）
中部電力株式会社	名古屋市東区東新町1	9,666	51.71
トーエネック従業員持株会	名古屋市中区栄1-20-31	1,124	6.01
日本マスタートラスト信託銀行株式会社（信託口）	東京都港区浜松町2-11-3	826	4.42
トーエネック共栄会	名古屋市中区栄1-20-31	627	3.36
株式会社日本カストディ銀行（信託口）	東京都中央区晴海1-8-12	264	1.42
DFA INTL SMALL CAP VALUE PORTFOLIO（常任代理人 シティバンク、エヌ・エイ東京支店）	PALISADES WEST 6300, BEE CAVE ROAD BUILDING ONE AUSTIN TX 78746 US （東京都新宿区新宿6-27-30）	215	1.15
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内2-7-1	201	1.08
トーエネック名古屋協力会持株会	名古屋市東区大幸1-8-8	139	0.75
トーエネック岡崎協力会持株会	愛知県岡崎市菅生町元菅17-2	135	0.73
トーエネック労働組合	名古屋市中区栄1-20-31	131	0.70
計	—	13,333	71.32

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2023年 3月31日現在

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 635,800	—	—
完全議決権株式 (その他)	普通株式 18,623,600	186,236	—
単元未満株式	普通株式 70,590	—	1 単元 (100株) 未満の株式
発行済株式総数	19,329,990	—	—
総株主の議決権	—	186,236	—

(注) 1 「完全議決権株式 (自己株式等)」の欄は、全て当社の保有の自己株式である。

2 「完全議決権株式 (その他)」及び「単元未満株式」の欄には、証券保管振替機構名義の株式がそれぞれ400株 (議決権4個) 及び20株含まれている。

3 「単元未満株式」の欄には、当社所有の自己株式25株が含まれている。

② 【自己株式等】

2023年 3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数の 合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数の 割合 (%)
(自己保有株式) 株式会社トーエネック	名古屋市中区栄1-20-31	635,800	—	635,800	3.28
計	—	635,800	—	635,800	3.28

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項なし。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項なし。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

会社法第155条第7号による取得

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
当事業年度における取得自己株式	743	2,612,550
当期間における取得自己株式	32	116,360

(注) 当期間における取得自己株式には、2023年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含まれていない。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他（譲渡制限付株式報酬としての自己株式の処分）	5,611	13,558,252	—	—
その他（単元未満株式の買増請求による売渡し）	65	157,064	—	—
保有自己株式数	635,825	—	635,857	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、2023年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び買増請求による売渡しによる株式数は含まれていない。

3【配当政策】

当社は、株主に対する利益還元を最重要政策として位置付けており、将来にわたる事業展開のための内部留保の充実などを総合的に勘案し、連結配当性向30%を目処とする配当を通じて業績に応じた利益還元を行うことを基本としている。また、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としており、これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会である。

当事業年度（第105期）の配当については、特別損失の計上などにより親会社株主に帰属する当期純損益がマイナス（純損失）となったが、安定的な株主還元を行うという観点から、1株当たり年間95円とした。

なお、当社は「取締役会の決議によって、毎年9月30日を基準日として中間配当をすることができる。」旨を定款に定めている。

当事業年度の剰余金の配当は次のとおりである。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たりの配当額 (円)
2022年10月28日取締役会決議	841	45
2023年 6月28日定時株主総会決議	934	50

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、「創造と挑戦を軸に事業を展開し、社会・お客さまの信用を得て、個性あふれるエクセレントカンパニー」をめざすことを経営理念に掲げている。コーポレートガバナンス・コードに示された各原則等を踏まえ、経営の効率性・企業の透明性を高めることにより、コーポレート・ガバナンスの強化に努めている。

② 企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当社は、取締役会から取締役への権限移譲を可能にし、より迅速かつ効率的な意思決定を行うとともに、監査等委員である取締役に取締役会における議決権を付与することで取締役会の監督機能を強化し、更なるコーポレート・ガバナンスの充実を図るため、監査等委員会設置会社を採用している。

当社は、経営の意思決定・監督と執行の分離、業務執行の迅速化などを図るため、執行役員制を採用するとともに、経営の監督機能の強化を図るため、取締役13名のうち6名を社外取締役に構成している。

さらに、監査の実効性を確保するため、監査等委員会、内部監査部署及び会計監査人は、相互に綿密な連携を保っている。

こうした現状の体制によって、経営の公正性・透明性は十分に確保されていると考えている。

イ 取締役会

取締役会は、原則として月1回開催し、中長期的な経営戦略や役員の指名及び報酬等に関する事項、親会社等との重要な取引等、経営上重要な事項を決定するとともに、取締役の職務執行の監督を行っている。また、監督機能の強化を図るため、取締役13名のうち6名を社外取締役に構成している。

さらに、役員の指名及び報酬等に係る手続きの客観性・透明性を強化するため、取締役会の任意の諮問機関として「指名・報酬委員会」を設置している。指名・報酬委員会は、取締役会の諮問に応じて、取締役候補者の指名、代表取締役の選定・解職、取締役（監査等委員である取締役を除く。）の報酬に関する事項などを審議し、取締役会への答申を行っている。

また、親会社である中部電力㈱並びにその分割子会社である中部電力パワーグリッド㈱及び中部電力ミライズ㈱との重要な取引について、一般株主の利益保護の観点から審議する独立社外取締役に構成された「親取引審議委員会」を設置している。

ロ 監査等委員会

監査等委員会は監査等委員である取締役4名（うち3名は社外取締役）で構成されている。監査等委員会は、株主の負託を受けた独立の機関として監査計画を策定し、取締役の職務の執行を監査している。その方法は、取締役会や経営執行会議等の重要な会議体への出席、取締役等からの報告聴取、重要書類の閲覧等により、実施している。

ハ 経営執行会議

各部門の業務執行体制に対して、経営上の根幹にかかわる業務執行の審議を行うとともに、業務執行の状況等の報告を受ける「経営執行会議」を設置し、原則として月1回以上開催している。

ニ 財務報告に係る内部統制委員会

財務報告に係る内部統制の整備・運用状況等を審議し、財務報告に係る内部統制を効率的に運用するために「財務報告に係る内部統制委員会」を設置している。

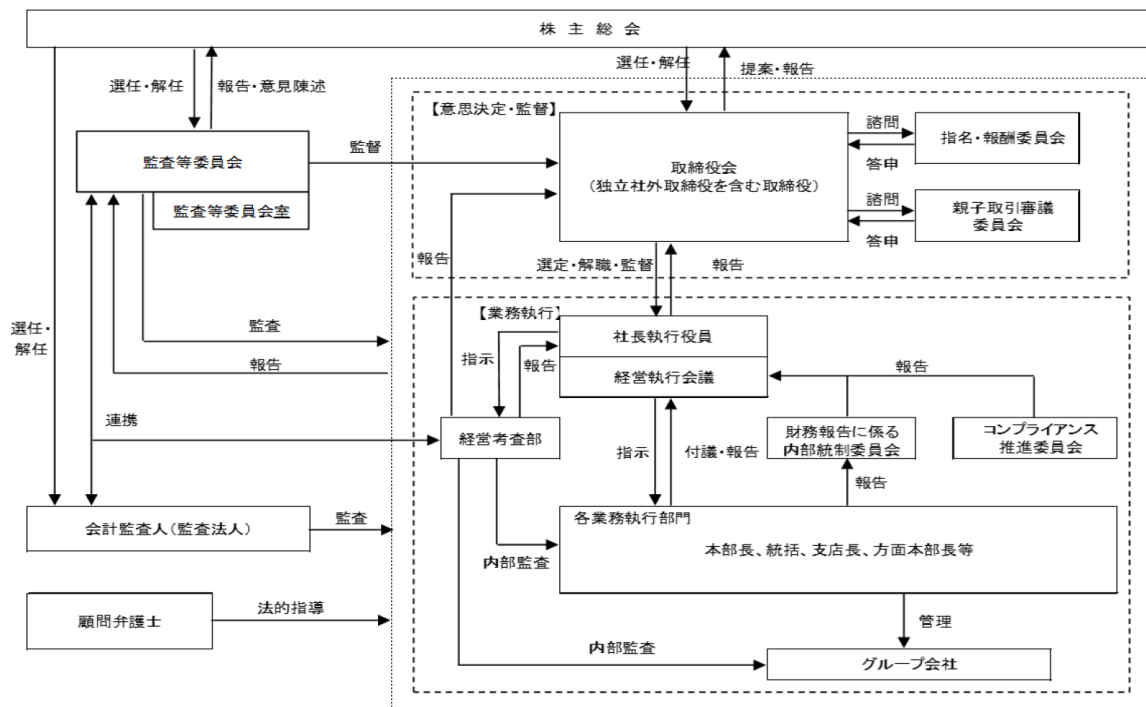
ホ コンプライアンス推進委員会

コンプライアンスリスクの予防体制の強化・充実を図るために「コンプライアンス推進委員会」を設置している。

なお、各機関の構成員は下記のとおりである。

役職名	氏名	取締役会	指名・報酬委員会	親子取引審議委員会	監査等委員会	経営執行会議	財務報告に係る内部統制委員会	コンプライアンス推進委員会
代表取締役社長 社長執行役員	藤田 祐三	◎	◎			◎	◎	◎
代表取締役 副社長執行役員	滝本 嗣久	○	○			○	○	○
代表取締役 副社長執行役員	堀内 保彦	○				○	○	○
社外取締役※	飯塚 厚	○	○	○				
社外取締役※	鵜飼 裕之	○	○	◎				
社外取締役※	吉本 明子	○		○				
取締役専務執行役員	平田 幸次	○				○	○	○
取締役専務執行役員	池山 竜夫	○				○	○	○
取締役専務執行役員	山崎 重光	○				○	○	○
社外取締役 常任監査等委員	寺田 修一	○			◎			○
社外取締役 監査等委員※	杉田 勝彦	○	○	○	○			
社外取締役 監査等委員※	柴田 光明	○		○	○			
取締役 監査等委員	木村 昌彦	○			○			○
専務執行役員	大嶋 主税					○	○	○
専務執行役員	佐治 嘉隆					○	○	○
専務執行役員	吉岡 修					○	○	○
執行役員 経営考査部長	内田 厚						○	○
法務部長	上村 昌史							○
トーエネック 労働組合本部委員長	西野 幸介							○
(株)トーエネックサービス 代表取締役社長	鈴木 一郎						○	○
旭シンクロテック(株) 代表取締役社長	峯田 雅章						○	○

(注) ※は非常勤、◎は各機関の長である。



③ 企業統治に関するその他の事項

管理部門には、内部監査体制をつかさどる部署として経営考査部、顧問弁護士から法的指導を受けて法務全般を担当する法務部、会計監査人との対応を図る経理部を置き、企業の透明性とコンプライアンスの確保に努めている。

内部統制システムに関しては、当社の基本方針として「会社の業務の適正を確保するための体制」を定め、経営管理に関する体制、リスク管理に関する体制、コンプライアンスに関する体制、監査に関する体制及び企業グループの業務の適正を確保するための体制を整備している。

〈会社の業務の適正を確保するための体制〉

イ 経営管理に関する体制

(イ) 業務執行に関する体制

- 取締役会は、原則として毎月1回開催し、法令・定款所定の決議事項及び会社の業務執行を決定するとともに、取締役から職務執行状況の報告を受けるなどして、取締役の職務執行を監督する。また、社外取締役により、社外の視点から監督を行う。
監査等委員会は、業務の執行状況の聴取等を通じて、取締役の職務執行を監査する。
- 業務執行における重要な事項について多面的に審議するため、経営執行会議を設置する。経営執行会議は、原則として毎月1回以上開催し、取締役会に付議する事項及び社長が決定すべき経営上の重要事項を審議するとともに、業務執行の状況等に関する報告を受ける。
- 経営の意思決定・監督と執行の分離及び迅速な業務執行を実現するため、執行役員制度を採用し、役付執行役員及び執行役員を置く。
- 経営の意思決定と特定分野の業務執行との乖離を防止するため、取締役会において適宜、役付執行役員、執行役員、参与及び使用人に執行状況の報告や議案の説明等をさせる。
- 取締役並びに役付執行役員、執行役員、参与及び使用人（以下「取締役等」という。）の職務執行の適正及び効率性を確保するため、会社規程等において、各部門（本部、本店の部をいう。以下同じ。）及び各部署の業務分掌並びにそれらの長の権限等を定める。
また、取締役等は、業務執行状況について、適時に、取締役会、経営執行会議又は上位者に報告する。
- 取締役等の意思決定の適正を確保するため、決裁手続きにおいて、起案箇所、関係部門及び審査部門による審査を行う。

- ・取締役等の職務執行に係る情報の保存及び管理を適正に行うため、会社規程等において、取締役会議事録、経営執行会議資料、決裁文書等の作成、保存及び管理に関する事項を定める。

(ロ) 内部監査に関する体制

- ・取締役等の職務執行の適正及び効率性を確保するため、執行部門から独立した組織として社長直属の内部監査部署を設置する。内部監査部署は、各部門の業務の執行状況等を定期的に監査し、その結果を、社長に報告するとともに、必要に応じ各部門に改善を勧告する。また、重要な事項等については取締役会に直接報告する。

ロ リスク管理に関する体制

- ・全社及び各部門のリスク管理が適正に行われるよう、組織、権限をはじめとする会社規程等を整備する。
- ・経営に重大な影響を与えるリスクについては、経営企画部署及び各部門が、経営計画の策定及び重要な意思決定にあたり、毎年定期的かつ必要に応じて把握・評価し、経営執行会議において審議を受けるとともにこれを管理する。また、毎年定期的かつ必要に応じて、取締役会において審議・報告する。
- ・安全・品質をはじめとする各部門の業務に係るリスクについては、各部門の長が、これを把握・評価・管理する体制を整備するとともに、毎年定期的かつ必要に応じて、その体制、運用状況を点検する。また、各部門の計画の策定・実行にあたっては、各部門の業務に係るリスクを把握・評価し、その結果に基づいてこれを管理する。
- ・法令等に従って財務報告を適正に行うために、組織及び会社規程等を整備し、適切に運用する。
- ・非常災害その他当社の財産、社会的信頼等に重大な影響を与える事象が発生した場合の情報伝達及び対応について会社規程等に定めるとともに、これらの事象が発生した場合に備え定期的に訓練等を実施する。
- ・内部監査部署は、必要に応じて内部監査を行う。

ハ コンプライアンスに関する体制

(イ) 社内体制

- ・コンプライアンスの徹底を図るため、会社規程等に基づき、社長を委員長としたコンプライアンス推進委員会を設置するとともに、本店部長、本店本部総括部長及び支店長・方面本部長等をコンプライアンス責任者とする全社的な体制を整備する。
- ・コンプライアンスの定着を図るため、会社規程等に基づき、取締役及びコンプライアンス責任者を対象とした啓発活動を実施し、管下使用人への適切な指導・監督に当たらせるとともに、使用人に対し各種研修を行う。
- ・コンプライアンス違反事象の未然防止・早期改善のため、通常の業務報告経路とは別に、内部通報の窓口「コンプライアンスホットライン」を社内及び社外に設置する。なお、コンプライアンスホットラインの利用者の保護について、会社規程等を定める。
- ・反社会的勢力との関係遮断については、対応部署を定め、会社規程等を整備するとともに、関連する外部専門機関と連携して対応する。

(ロ) 中部電力グループ体制

- ・中部電力グループ・コンプライアンス推進協議会に参加し、これに基づいた取り組みを行う。

ニ 監査に関する体制

(イ) 監査等委員会の職務を補助すべき使用人に関する事項

- ・監査等委員会の職務を補助するため、執行部門から独立した組織として監査等委員会直属の監査等委員会室を設置する。
- ・監査等委員会室には、監査等委員会の意向を踏まえた員数の使用人を置く。

(ロ) 監査等委員会の職務を補助すべき使用人の独立性及び当該使用人に対する監査等委員会の指示の実効性の確保に関する事項

- ・監査等委員会室に所属する使用人は、執行部門の業務に係る役職を兼務せず、また取締役（監査等委員である取締役を除く。）の指揮・命令を受けない。
- ・取締役等（監査等委員である取締役を除く。）は、監査等委員会の指示に基づき職務を遂行したことを理由として、監査等委員会室に所属する使用人に不利益を及ぼさない。
- ・監査等委員会室に所属する使用人の異動及び評価にあたっては、監査等委員会の意向を尊重する。

(ハ) 監査等委員会への報告に関する体制

- ・取締役が指名する者は、次のとおり、職務の執行状況等について監査等委員会に報告する。
- ・当社に著しい損失を与えるおそれのある事実を知ったときは、ただちに監査等委員会に報告する。
- ・部門ごとに原則として毎年1回、当該部門の業務の執行状況について監査等委員会に報告する。
- ・重要な決裁文書については決裁後すみやかに監査等委員会に回覧する。また業務執行に係るその他の文書についても求めに応じて、監査等委員会の閲覧に供する。

(ニ) 監査等委員会に報告した者が当該報告をしたことを理由として不利益を受けないことを確保するための体制

- ・取締役等（監査等委員である取締役を除く。）は、監査等委員会又は監査等委員会室に所属する使用人に報告をしたことを理由として、報告した者に不利益を及ぼさない。

(ホ) 監査費用等に関する事項

- ・監査等委員が職務の執行について生ずる費用等の請求をしたときは、すみやかに当該費用等を支払う。

(ヘ) その他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保する体制

- ・監査等委員は、経営執行会議及びその他重要な会議体に出席のうえ、意見を述べるができるものとし、取締役等（監査等委員である取締役を除く。）は、当該意見を尊重する。
- ・社長は、監査等委員会と代表取締役が経営に関し意見交換する機会を設ける。
- ・内部監査部署及び会計監査人は、監査計画の策定・実施にあたって監査等委員会と協議するとともに、実施結果を監査等委員会に報告する。

ホ 企業グループの業務の適正を確保するための体制

(イ) 親会社との関係に係る体制

- ・当社は、親会社である中部電力㈱が定めるグループ経営方針、グループ運営に関する規範に沿って密接な連携のもとに業務を執行する。

(ロ) トーエネックグループの体制

- ・当社グループの業務の適正及び効率性を確保するため、グループ会社全般を統括する部署及びグループ各社を管理する部署を設置し、会社規程等に基づき、経営上の重要事項については、協議又は連絡を求めるとともに、グループ会社のリスク管理、コンプライアンス等に関する体制を整備する。
- ・グループ各社の経営に重大な影響を与えるリスクについては、各社が把握・評価し、管理するとともに、グループ各社の社長等は、毎年定期的にグループを統括する部署に報告する。
- ・グループ会社の取締役等及び監査役又はこれらの者から報告を受けた当社の取締役等は、グループ会社においてグループ経営に重大な影響を与える事象が発生した場合、当社監査等委員会に報告する。
- ・当社グループにおけるコンプライアンス推進のため、各社において、コンプライアンス担当その他の推進体制を整備するとともに、基本方針の制定をはじめとする自律的な取り組みを行う。
- ・コンプライアンス違反事象の未然防止・早期改善のため、グループ各社は、当社の内部通報の窓口「コンプライアンスホットライン」を活用する。
- ・当社の取締役等は、必要に応じグループ会社の監査役を兼務する。
- ・当社の取締役等は、グループ会社の監査役及び取締役等との定期的な会合の場を設け意見交換を行う。
- ・当社の内部監査部署は、必要に応じてグループ会社に対して内部監査を行う。

④ 取締役会等の活動状況

当事業年度において当社は、取締役会を16回、指名・報酬委員会を3回、親子取引審議委員会を4回開催しており、個々の取締役の出席状況は次のとおりである。

役職名	氏名	出席回数		
		取締役会 全16回	指名・報酬委員会 全3回	親子取引審議委員会 全4回
代表取締役社長	藤田 祐三	16回/16回	3回/3回	—
代表取締役	滝本 嗣久	16回/16回	3回/3回	—
代表取締役	堀内 保彦	16回/16回	—	—
社外取締役	飯塚 厚	16回/16回	3回/3回	4回/4回
社外取締役	鵜飼 裕之	13回/13回	3回/3回	3回/3回
社外取締役	吉本 明子	13回/13回	—	3回/3回
社外取締役	稲垣 隆司	3回/3回	—	1回/1回
社外取締役	吉川 直利	3回/3回	—	1回/1回
取締役	高木 勲	3回/3回	—	—
取締役	西脇 哲也	16回/16回	—	—
取締役	平田 幸次	16回/16回	—	—
取締役	水野 朝之	16回/16回	—	—
取締役	池山 竜夫	13回/13回	—	—
取締役	山崎 重光	13回/13回	—	—
社外取締役 常任監査等委員	鈴木 健一	16回/16回	—	—
社外取締役 監査等委員	杉田 勝彦	16回/16回	3回/3回	4回/4回
社外取締役 監査等委員	柴田 光明	15回/16回	—	3回/4回
取締役 監査等委員	木村 昌彦	16回/16回	—	—

(注) 1 稲垣隆司氏、吉川直利氏、高木勲氏は、第104回定時株主総会（2022年6月28日開催）の終結の時をもって取締役を退任した。

2 鵜飼裕之氏、吉本明子氏、池山竜夫氏、山崎重光氏は、第104回定時株主総会（2022年6月28日開催）で取締役に選任された。

⑤ 責任限定契約の内容の概要

当社は、会社法第427条第1項および定款の規定により、各取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）との間で、任務を怠ったことによる損害賠償責任を会社法第425条第1項に定める最低責任限度額に限定する契約（責任限定契約）を締結している。

⑥ 役員等賠償責任保険契約の内容の概要

当社は役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結し、被保険者が負担することになる会社訴訟、株主代表訴訟、第三者訴訟の争訟費用を含む損害（ただし、保険契約上で定められた免責事由に該当するものを除く。）を当該保険契約により填補することとしている。なお、当該保険の保険料は、当社が全額を負担している。

当該保険契約の被保険者は当社および当社子会社の取締役および監査役である。

なお、当該保険の契約期間は1年間であり、2023年7月に更新する予定である。

⑦ 取締役の定数

当社の取締役（監査等委員である取締役を除く。）は15名以内とし、監査等委員である取締役は5名以内とする旨を定款で定めている。

⑧ 取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めている。

また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨も定款に定めている。

⑨ 株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項

イ 自己の株式の取得の決定機関

当社は、機動的な経営の遂行を可能とするため、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって自己の株式を取得することができる旨定款に定めている。

ロ 中間配当の決定機関

当社は、株主への機動的な利益還元を行うため、取締役会の決議によって、毎年9月30日を基準日として中間配当をすることができる旨定款に定めている。

ハ 取締役の責任免除

当社は、取締役が期待される役割を十分に発揮できるようにするため、会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる取締役（取締役であった者を含む。）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議をもって免除することができる旨定款に定めている。

⑩ 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めている。これは、株主総会を円滑に運営することを目的とするものである。

(2) 【役員の状況】

① 役員一覧

男性 12名 女性 1名 (役員のうち女性の比率7.7%)

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
代表取締役社長 社長執行役員	藤田 祐三	1959年 4月19日生	2014年 7月 2015年 7月 2018年 4月 2018年 6月 2020年 4月 2021年 4月	中部電力株式会社執行役員 お客さま本部配電部長 同社常務執行役員 名古屋支店長 当社専務執行役員 東京本部長 当社取締役 専務執行役員 東京本部長 当社代表取締役 副社長執行役員 経営全般に関し社長を補佐 秘書部、技術研究開発部、情報通信統括部統括 当社代表取締役社長 社長執行役員 (現)	(注) 3	4,140
代表取締役 副社長執行役員 経営全般に関し社長を補佐 秘書部、人事部、 教育センター、資材部統括	滝本 嗣久	1962年12月11日生	1986年 4月 2013年 6月 2014年 6月 2018年 4月 2020年 4月 2020年 6月 2022年 4月 2023年 4月	当社入社 当社参与 配電本部地中線部副部長 当社執行役員 静岡支店長 当社執行役員 東京本部副本部長 当社専務執行役員 東京本部長 当社取締役 専務執行役員 東京本部長 当社代表取締役 副社長執行役員 経営全般に関し社長を補佐 経営企画部、経理部、資材部統括 当社代表取締役 副社長執行役員 経営全般に関し社長を補佐 秘書部、人事部、教育センター、資材部統括 (現)	(注) 3	2,506
代表取締役 副社長執行役員 経営全般に関し社長を補佐 エネルギー事業部統括 空調管本部長	堀内 保彦	1957年12月18日生	1981年 4月 2010年 6月 2011年 6月 2012年 6月 2014年 6月 2016年 6月 2019年 4月 2020年 4月	当社入社 当社理事 配電本部地中線部長 当社執行役員 配電本部地中線部長 当社執行役員 静岡支店長 当社常務執行役員 営業本部副本部長 海外事業部統括補佐 当社取締役 専務執行役員 空調管本部長 (注) 5 当社取締役 専務執行役員 エネルギー事業部統括 空調管本部長 当社代表取締役 副社長執行役員 経営全般に関し社長を補佐 エネルギー事業部統括 空調管本部長 (現)	(注) 3	3,526
取締役 〔非常勤〕	飯塚 厚	1959年 5月12日生	2015年 7月 2016年 7月 2017年 7月 2018年11月 2019年 1月 2020年 6月 2021年 6月 2023年 6月	財務省東海財務局長 国税庁次長 財務省関税局長 (2018年 7月同省退職) S O M P Oホールディングス株式会社顧問 損保ジャパン日本興亜総合研究所株式会社理事長 (2020年 6月退任) 当社取締役〔非常勤〕 (現) 日本郵政株式会社 専務執行役員 同社 代表執行役員副社長 同社 取締役兼代表執行役員副社長 (現)	(注) 3	605

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
取締役 〔非常勤〕	鵜飼 裕之	1954年 3月 5日生	2010年 4月 2014年 4月 2020年 4月 2021年 4月 2021年 6月 2022年 6月	国立大学法人名古屋工業大学 副学長 兼同大学院工学研究科教授 同大学 学長 学校法人東邦学園愛知東邦大学 副学 長兼経営学部教授 学校法人東邦学園 理事（現） 学校法人東邦学園愛知東邦大学 学長 （現） ASTI株式会社 社外取締役（監査等委 員）（現） 当社取締役〔非常勤〕（現）	（注）3	126
取締役 〔非常勤〕	吉本 明子	1963年 2月 4日生	2013年 7月 2015年 7月 2017年 7月 2018年 7月 2019年 7月 2022年 2月 2022年 6月 2023年 6月	愛知県副知事 厚生労働省 大臣官房審議官 同省 中央労働委員会事務局審議官 同省 人材開発統括官 同省 中央労働委員会事務局長 （2021年10月同省退職） ボストンコンサルティンググループ シニアアドバイザー（現） 当社取締役〔非常勤〕（現） 宝ホールディングス株式会社 監査役 （社外監査役）（現）	（注）3	－
取締役 専務執行役員 国際事業統括部統括 営業本部長	平田 幸次	1959年 1月18日生	1981年 4月 2012年 6月 2013年 7月 2014年 6月 2017年 4月 2017年 6月 2018年 4月	当社入社 当社執行役員 営業本部技術統括部長 当社参与 営業本部内線統括部副部長 当社常務執行役員 営業本部内線統括 部長 当社専務執行役員 海外事業部統括 営業本部長 当社取締役 専務執行役員 海外事業 部統括 営業本部長 当社取締役 専務執行役員 国際事業 統括部統括 営業本部長（現）	（注）3	3,708
取締役 専務執行役員 技術研究開発部、 情報システム部、 情報通信統括部統括	池山 竜夫	1964年 4月13日生	1987年 4月 2013年 6月 2013年 7月 2016年 7月 2018年 4月 2021年 4月 2022年 4月 2022年 6月	当社入社 当社執行役員 三重支店営業部長兼工 事グループ長 当社執行役員 営業本部空調管統括部 長 当社執行役員 空調管本部空調管統括 部長 当社執行役員 三重支店長 当社専務執行役員 情報システム部、 情報通信統括部統括 当社専務執行役員 技術研究開発部、 情報システム部、情報通信統括部統括 当社取締役 専務執行役員 技術研究 開発部、情報システム部、情報通信統 括部統括（現）	（注）3	1,913
取締役 専務執行役員 東京本部長	山崎 重光	1965年 3月25日生	1987年 4月 2015年 6月 2016年 7月 2017年 4月 2021年 4月 2022年 4月 2022年 6月	当社入社 当社参与 経営企画室副室長 当社執行役員 経営企画部副部長兼経 営管理グループ長 当社執行役員 営業本部内線統括部長 当社執行役員 人事部長 当社専務執行役員 東京本部長 当社取締役 専務執行役員 東京本部 長（現）	（注）3	2,900

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
取締役 (常任監査等委員) 〔常勤〕	寺田 修一	1958年 4月27日生	2007年 7月 2009年 7月 2012年 7月 2017年 4月 2019年 6月 2020年 4月 2023年 6月	中部電力株式会社東京支社 副支社長 同社 法務部長 同社 執行役員 法務部長 中部精機株式会社 取締役 中部電力株式会社 監査役 中部電力パワーグリッド株式会社 監査役 当社取締役 (常任監査等委員) (現)	(注) 4	—
取締役 (監査等委員) 〔非常勤〕	杉田 勝彦	1954年 4月12日生	1984年 4月 2004年 4月 2012年 9月 2015年 6月 2021年 6月	名古屋弁護士会登録 石原法律事務所 (現石原総合法律事務所) 入所 石原総合法律事務所 副所長 (現) 豊島株式会社 社外監査役 (現) 当社監査役 〔非常勤〕 当社取締役 (監査等委員) 〔非常勤〕 (現)	(注) 4	182
取締役 (監査等委員) 〔非常勤〕	柴田 光明	1953年 1月26日生	1981年 3月 2003年 5月 2007年 8月 2013年 7月 2015年 7月 2019年 6月 2021年 6月	公認会計士登録 中央青山監査法人 代表社員 あずさ監査法人 代表社員 有限責任 あずさ監査法人 監事 公認会計士柴田光明事務所 所長 (現) 当社監査役 〔非常勤〕 当社取締役 (監査等委員) 〔非常勤〕 (現)	(注) 4	182
取締役 (監査等委員) 〔常勤〕	木村 昌彦	1959年12月21日生	1982年 4月 2011年 6月 2014年 6月 2018年 4月 2021年 4月 2021年 6月	当社入社 当社執行役員 秘書室長 当社執行役員 経理部長 当社執行役員 長野支店長 当社監査役室顧問 〔常勤〕 当社取締役 (監査等委員) (現)	(注) 4	2,858
計						22,646

- (注) 1 取締役 飯塚厚、鶴飼裕之及び吉本明子は、社外取締役である。
- 2 取締役 (監査等委員) 寺田修一、杉田勝彦及び柴田光明は、社外取締役 (監査等委員) である。
- 3 取締役 (監査等委員である取締役を除く。) の任期は、2023年3月期に係る定時株主総会終結の時から2024年3月期に係る定時株主総会終結の時までである。
- 4 取締役 (監査等委員) 寺田修一、杉田勝彦、柴田光明及び木村昌彦の任期は、2023年3月期に係る定時株主総会終結の時から2025年3月期に係る定時株主総会終結の時までである。
- 5 2016年6月時点における職名は、同年7月1日付組織改定を反映した記載としている。
- 6 当社は執行役員制度を導入しており、2023年6月29日現在の取締役以外の執行役員は次のとおりである。

職名	氏名	担当業務
専務執行役員	大嶋 主税	経営企画部、経理部統括
専務執行役員	佐治 嘉隆	法務部、総務部、安全品質環境部統括
専務執行役員	吉岡 修	配電本部長
常務執行役員	廣瀬 東志一	中部本部長
常務執行役員	細川 義洋	国際事業統括部長
執行役員	佐藤 英樹	長野支店長
執行役員	高田 久嗣	安全品質環境部長
執行役員	大坪 彰司	配電本部市場開発部長
執行役員	加藤 憲二郎	大阪本部長
執行役員	渡部 篤	営業本部内線統括部長
執行役員	上山 憲司	名古屋支店長
執行役員	森 弘幸	人事部長
執行役員	二村 剛司	岡崎支店長
執行役員	伊藤 泰隆	岐阜支店長
執行役員	入谷 通雄	静岡支店長
執行役員	内田 厚	経営考査部長
執行役員	栗山 誠	情報システム部長
執行役員	伊藤 公一	経営企画部長
執行役員	紀田 巖	営業本部営業部長
執行役員	松下 雅樹	教育センター所長
執行役員	大庭 弘	配電本部配電統括部長
執行役員	小倉 稔彦	経理部長
執行役員	小林 浩	技術研究開発部長
執行役員	永井 一也	東京本部副本部長
執行役員	長瀬 誠	エネルギー事業部長
執行役員	松山 孝臣	三重支店長
執行役員待遇	平野 明人	経営企画部（トーエネックサービス出向）

② 社外役員の状況

当社の社外取締役は6名（うち監査等委員である社外取締役は3名）である。社外取締役は、経営陣から独立した立場で、それぞれの経歴を通じて培った識見、経験を踏まえ、経営の監督機能及び監査機能を担っている。

社外取締役 飯塚厚は、財務省の関税局長、SOMPOホールディングス株式会社の顧問、損保ジャパン日本興亜総合研究所株式会社の理事長を歴任し、現在、日本郵政株式会社の取締役兼代表執行役副社長である。なお、日本郵政株式会社と当社との間に特別の利害関係はない。

社外取締役 鵜飼裕之は、国立大学法人名古屋工業大学の副学長、同大学の学長を歴任し、現在、学校法人東邦学園の理事、学校法人東邦学園愛知東邦大学の学長であるが、当社との間に特別の利害関係はない。

社外取締役 吉本明子は、愛知県副知事、厚生労働省の中央労働委員会事務局長を歴任し、現在、ボストンコンサルティンググループのシニアアドバイザーであるが、当社との間に特別の利害関係はない。

社外取締役（監査等委員）寺田修一は、中部電力株式会社の出身者である。同社は、当社議決権数の51.90%を保有する親会社であり、同社並びにその分割子会社である中部電力パワーグリッド株式会社及び中部電力ミライズ株式会社は、配電設備工事等の主要取引先である。また、当社は、同社から取締役2名（2023年6月29日現在）及び出向者11名（2023年3月31日現在）を受け入れている。

社外取締役（監査等委員）杉田勝彦は、当社との間に特別の利害関係はない。

社外取締役（監査等委員）柴田光明は、当社の会計監査人である有限責任 あずさ監査法人の出身者であるが、既に退職し独立して活動しており、当社との間に特別の利害関係はない。

なお、社外取締役を選任するための当社からの独立性に関する基準については、会社法、金融商品取引所の定める「社外性」、「独立性」に関する要件に加え、当社の経営に関し率直かつ建設的に助言できる高い識見と豊富な経験を重視している。

③ 社外取締役による監督又は監査と内部監査、監査等委員会監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役（監査等委員である取締役を除く。）は、監査等委員である社外取締役と定期的に意見交換を実施し、相互連携を図っている。

監査等委員である社外取締役は、他の監査等委員である取締役、会計監査人及び内部監査部門の状況や重要な会議の内容について、監査等委員会を通じて情報を収集し、意見交換等を行うことにより監査機能の強化を図っている。

(3) 【監査の状況】

① 監査等委員会監査の状況

監査等委員会については、監査等委員である社内取締役1名、監査等委員である社外取締役3名の計4名に監査等委員会直属の監査等委員会室の使用人（4名）を加え、監査等委員でない取締役の職務執行の適法性・適正性を監査する。なお、監査等委員である社外取締役のうち1名は、公認会計士であり、財務及び会計に関する高度な知見を有している。

当事業年度において当社は、監査等委員会を20回開催しており、個々の監査等委員の出席状況については次のとおりである。

氏名	役職	出席回数
鈴木 健一	取締役常任監査等委員（常勤・社外）	20回のうち20回出席
杉田 勝彦	取締役監査等委員（非常勤・社外）	20回のうち20回出席
柴田 光明	取締役監査等委員（非常勤・社外）	20回のうち19回出席
木村 昌彦	取締役監査等委員（常勤）	20回のうち20回出席

監査等委員会における具体的な検討内容として、監査方針や監査計画策定、監査報告書の作成、会計監査人の選任、会計監査人の報酬、定時株主総会への付議議案内容の監査、常勤監査等委員選定、決算・配当等に関して審議した。

監査等委員会は、株主の負託を受けた独立の機関として、法令及び定款に基づき取締役の職務の執行を監査することにより、会社の健全で持続的な成長を確保し、社会的信頼に応える良質な企業統治体制が確立出来ているかを確認した。

「会社の業務の適正を確保するための体制」（内部統制システム）については、取締役会で決議した5つの体制について、環境変化に対応しつつ適切に運用されているかを監査した。

会計監査については、会計監査人が独立の立場で、かつ「監査に関する品質管理基準」に基づく監査を実施しているかを確認するとともに、会計監査人から職務の執行状況等について報告を受け、会計監査人の監査の方法や結果の相当性の監査をした。なお、監査上の主要な検討事項については、会計監査人と協議を行うとともに、その監査の実施状況について報告を受け、必要に応じて説明を求めた。

常勤監査等委員は、常勤者としての特性を踏まえ、監査の環境の整備及び社内の情報の収集に積極的に努め、内部統制システムの構築・運用の状況を日常的に監視・検証するとともに、他の監査等委員と情報の共有及び意思の疎通を図った。社内の情報の収集にあたっては、取締役会その他重要な会議に出席し、監査等委員でない取締役及び使用人等からその職務の執行状況について報告を受け、必要に応じて説明を求め、重要な決裁書類等を閲覧し、本店及び主要な事業場の往査において業務及び財産の状況を調査した。また、子会社については、子会社の取締役及び監査役等と意思疎通及び情報の交換を図り、必要に応じて子会社から事業の報告を受けた。

社外監査等委員は、監査等委員会や取締役会において、各々の専門的見地から意見を発言した。非常勤監査等委員は、常勤監査等委員から監査等委員会にて説明を受けるほか、一部の事業場往査を行い社内の情報収集に努めた。

② 内部監査の状況等

イ 内部監査の状況

内部監査機能については、経営の効率化及び業務の適正の確保に寄与することを目的とし、業務執行部門から独立した社長直属の経営考査部（8名）を専任部署として設置している。同部は、会社業務全般にわたり、定型業務及び特命事項の考査を実施し、考査の結果については、社長に報告するとともに、関係部門に助言・勧告を行い、継続的に改善を促している。

また、重要な事項等については取締役会に直接報告することとしている。

ロ 内部監査、監査等委員会監査及び会計監査の相互連携

監査等委員会は、監査計画及び監査実施結果の聴取のため、会計監査人との会合を定期的に年6回、その他にも適宜実施している。さらに、会計監査人往査の一部に立ち会うなど、会計監査人の監査体制を確認するとともに意見及び情報交換を行い、相互の連携を高めている。

監査等委員会は、経営考査部から考査テーマ・目的などの事前説明や考査結果の説明を都度受け、監査等委員会からは、監査結果を経営考査部に情報提供しており、緊密な連携を保っている。また、コンプライアンス推進委員会の事務局である法務部からも定期的に報告を受けている。

③ 会計監査の状況

イ 監査法人の名称

有限責任 あずさ監査法人

ロ 継続監査期間

16年間

ハ 業務を執行した公認会計士

指定有限責任社員 業務執行社員 岩田国良

指定有限責任社員 業務執行社員 村井達久

ニ 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士4名、その他15名である。

ホ 監査法人の選定方針と理由

監査等委員会は、「会計監査人の選任に関する評価基準」として、当社の監査を遂行するにあたり会計監査人が十分な規模、体制を有し、独立性が確保されていると認められることを条件としている。また、「会計監査人の解任または不再任の決定の方針」として会計監査人が会社法第340条第1項各号に該当すると認められる場合には会計監査人を解任し、適正な監査の遂行が困難であると認められる場合には解任または不再任を株主総会の目的とすることとしている。

監査等委員会は、会計監査人を前述の評価基準及び決定の方針に基づいて総合的に判断した結果、有限責任あずさ監査法人を選定した。

ヘ 監査等委員会による監査法人の評価

監査等委員会は、会計監査人及び経理部から聴取した会計監査人の概要、監査品質、前年度の監査実績等について協議した結果、適正であることから「会計監査人の解任または不再任を第105回定時株主総会の議案としない」ことを決議した。

④ 監査報酬の内容等

イ 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)
提出会社	59	—	60	—
連結子会社	—	—	—	—
計	59	—	60	—

ロ 監査公認会計士等と同一のネットワーク（KPMGメンバーファーム）に対する報酬（イを除く）

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)
提出会社	—	—	—	—
連結子会社	0	—	—	—
計	0	—	—	—

ハ その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容
該当事項なし。

ニ 監査報酬の決定方針

当社は、監査報酬の決定に関する方針を定めていないが、監査内容、監査時間数等を総合的に勘案したうえで、決定している。

ホ 監査等委員会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査等委員会は、過年度の監査計画と実績の状況を踏まえ、項目別監査時間、報酬単価、報酬額の推移、職務執行状況を検証し、当事業年度における監査計画の活動内容及び報酬見積の算出根拠の妥当性を総合的に判断した結果、会計監査人の報酬等について、会社法第399条第1項の同意を行っている。

(4) 【役員の報酬等】

① 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社の取締役の報酬に関する事項は、任意の指名・報酬委員会での審議を経て、取締役会での決議に基づき社長が決定している。社長の決定権限の内容及び裁量の範囲は、株主総会決議事項の範囲内の内容である。

また、取締役の個人別の報酬等の内容に係る決定方針に関する事項は、任意の指名・報酬委員会が審議された決定方針案を取締役会で審議のうえ決議した。その概要は次のとおりである。

- ・当社の取締役（監査等委員である取締役を除く。以下本方針において同じ）の報酬は、当社の持続的な成長及び中長期的な企業価値の向上のため、優秀な人材の確保を可能とするとともに、株主と一層の価値共有を進め、業績向上へのインセンティブとして機能する水準・構成とすることを基本方針とする。
- ・個々の取締役の報酬の決定に際しては、業務執行取締役の報酬は固定報酬としての基本報酬、業績連動報酬及び譲渡制限付株式報酬により構成する。社外取締役及び非業務執行取締役については、基本報酬のみとする。なお、退職慰労金その他名目の如何を問わず、退職金は支給しない。
- ・取締役の基本報酬は、月例の固定報酬とし、会社業績、他社水準、中長期的な経営環境等を総合的に勘案し、職責に応じ役位別に決定する。
- ・業績連動報酬は、事業年度ごとの重要業績評価指標を反映した現金報酬とし、連結経常利益の目標値に対する達成度合いに応じて算出された額を賞与として毎年、一定時期に支給する。なお、目標となる業績指標とその値は、構成員の過半数を独立社外取締役とする任意の指名・報酬委員会の審議を踏まえ見直しを行う。
- ・譲渡制限付株式報酬は、当社の企業価値の持続的な向上を図るインセンティブを与えるとともに、株主との一層の価値共有を進めることを目的とする。付与数については、会社業績、他社水準、中長期的な経営環境等を総合的に勘案し、職責に応じ役位別に決定する。付与は、在任中、毎年、一定の時期に行う。
- ・報酬水準は、独立した第三者が行う役員報酬調査結果を踏まえ、任意の指名・報酬委員会にて審議し、取締役会はその審議内容を尊重する。報酬割合は、業績連動報酬の割合を固定せず、業績が向上するにつれて総額に占める業績連動報酬の割合が高くなる設計とし、任意の指名・報酬委員会が審議された種類別の報酬割合の範囲内で決定する。

業績連動報酬に係る指標を、中期経営計画の数値目標から算定した連結経常利益とした理由は、当社グループの業績を端的に表すものと判断したためである。当事業年度における業績連動報酬に係る指標の目標は、2022年度中期経営計画の連結経常利益12,000百万円であり、実績は、8,983百万円である。

当事業年度における取締役の個人別の報酬等の内容の決定に係る委任に関する事項は、取締役会の委任決議に基づき代表取締役社長藤田祐三が取締役の個人別の報酬額の具体的内容を決定している。

委任を受けた代表取締役社長は、株主総会で決議された報酬総額の範囲内で個人別の報酬額を決定している。当該権限を委任した理由は、代表取締役社長は任意の指名・報酬委員会の委員長であり、当該委員会の審議内容に従った決定をするためである。

取締役会は、当該権限が代表取締役社長によって適切に行使されるよう任意の指名・報酬委員会の審議を経て当該審議の内容に従って決定することを決定方針に定める等の措置を講じており、当該手続きを経て取締役の個人別の報酬額が決定されていることから、取締役会はその内容が決定方針に沿うものであると判断している。

監査等委員である取締役の報酬については、株主総会で決議された報酬総額の範囲内において、固定報酬のみを支給することとし、監査等委員会の協議により決定している。

当事業年度における監査等委員である取締役の報酬の額は、上記プロセスに従いこの範囲内で決定した。

役員の報酬等の額に関する株主総会の決議年月日は、2021年6月25日であり、決議の内容は、下記のとおりである。

- ・取締役（監査等委員である取締役を除く。）の報酬限度額は、賞与を含み年額4億円以内（うち社外取締役分8,500万円以内）とすること、並びに各取締役に対する具体的金額及び支給の時期等の決定は、取締役会の決議によるものとする。なお、この報酬等の額には、使用人兼務取締役の使用人分給与は含まないものとする。
- ・監査等委員である取締役の報酬限度額は、年額1億円以内とすること、並びに各監査等委員である取締役に對する具体的金額及び支給の時期等の決定は、監査等委員である取締役の協議によるものとする。

また、取締役に対する譲渡制限付株式報酬の付与のための報酬に関する株主総会の決議年月日は、2022年6月28日であり、決議の内容は、下記のとおりである。

- ・上記の報酬枠とは別枠にて、対象取締役に対して譲渡制限付株式の付与のために支給する報酬は金銭債権とし、その総額は、年額60百万円以内とする。また、各対象取締役への具体的な支給時期及び配分については、取締役会の決定によるものとする。なお、使用人兼務取締役の使用人分給与を含まない。

また、対象取締役は、当社の取締役会決議に基づき、支給される金銭債権の全部を現物出資財産として払込み、当社の普通株式について発行又は処分を受けるものとし、これにより発行又は処分をされる当社の普通株式の総数は年20,000株以内（ただし、当社の普通株式の株式分割（当社の普通株式の無償割当てを含む。）又は株式併合が行われた場合その他譲渡制限付株式として発行又は処分をされる当社の普通株式の総数の調整が必要な事由が生じた場合には、当該総数を、合理的な範囲で調整する。）とする。

※ 同株主総会の決議時点における員数については、取締役（監査等委員である取締役を除く。）は11名、監査等委員である取締役は4名である。

② 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額（百万円）			対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	業績連動報酬	譲渡制限付 株式報酬	
取締役 (監査等委員及び社外取締役 を除く。)	253	212	34	6	9
取締役（監査等委員） (社外取締役を除く。)	23	23	—	—	1
社外役員	60	60	—	—	8

(注) 1 譲渡制限付株式報酬は、当事業年度における費用計上額を記載している。

2 上記には、2022年6月28日開催の第104回定時株主総会の終結の時をもって退任した取締役3名の報酬が含まれている。

③ 役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載していない。

(5) 【株式の保有状況】

① 投資株式の区分の基準及び考え方

当社は株式の価値の変動又は株式に係る配当によって利益を受けることを目的とする投資株式を純投資目的株式とし、取引先との安定的な関係維持・強化を図り、企業価値の向上に資することを目的とする投資株式を純投資目的以外の株式と区分する。

② 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

イ 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社の保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式は、取引関係の維持・強化を通じて当社グループの中長期的な企業価値の増大に資するため保有している。

個別銘柄の保有の適否に関する検証の方法・内容については、2022年9月開催の取締役会にて、銘柄の企業グループごとの工事受注等による利益獲得貢献度に基づく投資収益率と当社の資本コスト（WACC）を比較し、採算性を検証している。また、相手先企業との取引関係強化等の定性的な効果も含め、総合的に資本コストに見合っていないと判断した場合は売却を実施する。

ロ 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額 (百万円)
非上場株式	55	474
非上場株式以外の株式	77	13,610

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額 (百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	4	7	設備工事業における取引先関係の維持・強化を図るために保有している。また、工事の受注拡大を目的として、購入している。
非上場株式以外の株式	7	16	設備工事業における取引先関係の維持・強化を図るために保有している。また、工事の受注拡大を目的として、購入している。

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額 (百万円)
非上場株式	3	12
非上場株式以外の株式	2	36

ハ 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報
特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の 株式の 保有の 有無
	株式数（株）	株式数（株）		
	貸借対照表計上額 （百万円）	貸借対照表計上額 （百万円）		
KDD I (株)	902,400	902,400	通信設備等の建設・保守・メンテナンス等の設備工事業における取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	3,693	3,614		
トヨタ自動車(株)	860,985	860,985	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	1,618	1,913		
オリンパス(株)	677,200	677,200	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	1,570	1,583		
(株)マキタ	304,002	304,002	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	有
	997	1,196		
本田技研工業(株)	200,000	200,000	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	702	697		
オーエスジー(株)	247,363	247,363	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	491	464		
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	425,144	425,144	事務所や店舗において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引や主要取引金融機関として、資金借入取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	有
	360	323		
東海旅客鉄道(株)	20,000	20,000	鉄道施設幹線等の建設・保守・メンテナンス等の設備工事業における取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	316	319		
第一生命ホールディングス(株)	115,100	115,100	事務所や店舗において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引及び当社事業拡大に関わる有益な情報交換を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	有
	280	287		
イオン(株)	100,190	100,190	店舗の建設・保守・メンテナンス等の設備工事業における取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るため継続して保有している。	無
	257	261		
アサヒグループホールディングス(株)	50,000	50,000	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	246	223		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の 株式の 保有の 有無
	株式数（株）	株式数（株）		
	貸借対照表計上額 （百万円）	貸借対照表計上額 （百万円）		
住友電気工業(株)	133,379	133,379	幅広く顧客基盤を持つ得意先として、設備工事業の取引及び資材調達先として取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	有
	226	195		
(株)大林組	202,625	202,625	幅広く顧客基盤を持つ得意先として設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	205	182		
サッポロホールディングス(株)	60,000	60,000	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	204	138		
野村ホールディングス(株)	374,526	374,526	事務所や店舗において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引及び当社事業拡大に関わる有益な情報交換を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	有
	190	192		
(株)フジミインコーポレーテッド	24,200	24,200	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	176	162		
(株)三井住友フィナンシャルグループ	31,881	31,881	事務所や店舗において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引や主要取引金融機関として資金借入取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	有
	168	124		
日東電工(株)	16,300	16,300	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	139	143		
インフロニア・ホールディングス(株)	114,600	114,600	幅広く顧客基盤を持つ得意先として設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	117	119		
イビデン(株)	20,600	20,600	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	108	124		
(株)八十二銀行	180,850	180,850	事務所や店舗において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引や主要取引金融機関として資金借入取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	有
	103	73		
日本トムソン(株)	149,347	142,819	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。更なる関係強化のため、取引先持株会に加入し買付を行っている。	無
	86	77		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の 株式の 保有の 有無
	株式数（株）	株式数（株）		
	貸借対照表計上額 （百万円）	貸借対照表計上額 （百万円）		
富士通㈱	4,446	4,446	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	79	81		
㈱豊田自動織機	10,500	10,500	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	77	88		
㈱明電舎	40,000	40,000	幅広く顧客基盤を持つ得意先として、設備工事業の取引及び資材調達先として取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	76	101		
㈱大和証券グループ本社	115,120	115,120	事務所や店舗において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引及び当社事業拡大に関わる有益な情報交換を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	有
	71	79		
NTN㈱	187,242	187,242	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	63	40		
パナソニックホールディングス㈱	50,730	50,730	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	59	60		
AGC㈱	11,402	10,463	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。更なる関係強化のため、取引先持株会に加入し買付を行っている。	無
	56	51		
日置電機㈱	6,050	6,050	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	52	42		
スズキ㈱	10,500	10,500	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	50	44		
日精樹脂工業㈱	48,953	46,047	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。更なる関係強化のため、取引先持株会に加入し買付を行っている。	無
	48	46		
㈱西武ホールディングス	34,200	34,200	施設の建設・保守・メンテナンス等の設備工事業における取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	46	43		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の 株式の 保有の 有無
	株式数（株）	株式数（株）		
	貸借対照表計上額 （百万円）	貸借対照表計上額 （百万円）		
特種東海製紙(株)	15,000	15,000	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	44	47		
清水建設(株)	52,500	52,500	幅広く顧客基盤を持つ得意先として設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	39	38		
(株)アイチコーポレーション	49,347	49,347	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	39	43		
日本製鉄(株)	12,400	12,400	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	38	26		
横浜ゴム(株)	12,075	12,075	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	33	20		
(株)十六フィナンシャルグループ	11,000	11,000	事務所や店舗において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引や主要取引金融機関として資金借入取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	有
	31	23		
オークマ(株)	4,920	4,920	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	29	25		
三井住友トラスト・ホールディングス(株)	5,533	5,533	事務所や店舗において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引や主要取引金融機関として資金借入取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	25	22		
大成建設(株)	6,000	6,000	幅広く顧客基盤を持つ得意先として設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	24	21		
MS&ADインシュアランスグループホールディングス(株)	5,344	5,344	事務所や店舗において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引及び当社事業拡大に関わる有益な情報交換を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	有
	21	21		
岡谷鋼機(株)	2,000	2,000	事務所の建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引及び当社事業拡大に関わる有益な情報交換を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	有
	20	19		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の 株式の 保有の 有無
	株式数（株）	株式数（株）		
	貸借対照表計上額 （百万円）	貸借対照表計上額 （百万円）		
東海東京フィナン シャル・ホールデ イングス(株)	52,500	52,500	事務所や店舗において、建設・保守・メンテナ ンス等の設備工事業の取引及び当事業拡大に 関わる有益な情報交換を行っており、取引関係 の維持・強化を図るために継続して保有してい る。	有
	19	21		
富士古河E&C(株)	4,800	4,800	幅広く顧客基盤を持つ得意先として設備工事業 の取引を行っており、取引関係の維持・強化を 図るために継続して保有している。	無
	18	12		
(株)キッツ	18,946	18,946	工場や事務所等において、建設・保守・メンテ ナンス等の設備工事業の取引を行っており、取 引関係の維持・強化を図るために継続して保有 している。	無
	17	13		
トピー工業(株)	8,763	*	工場や事務所等において、建設・保守・メンテ ナンス等の設備工事業の取引を行っており、取 引関係の維持・強化を図るために継続して保有 している。	無
	17	*		
イオンモール(株)	9,778	8,831	店舗の建設・保守・メンテナンス等の設備工事 業における取引を行っており、取引関係の更な る強化を図るため取引先持株会に加入し買付を 行っている。	無
	16	14		
豊和工業(株)	18,356	18,356	工場や事務所等において、建設・保守・メンテ ナンス等の設備工事業の取引を行っており、取 引関係の維持・強化を図るために継続して保有 している。	無
	16	14		
(株)名古屋銀行	5,000	5,000	事務所や店舗において、建設・保守・メンテナ ンス等の設備工事業の取引や主要取引金融機関 として資金借入取引を行っており、取引関係の 維持・強化を図るために継続して保有してい る。	無
	15	14		
(株)浅沼組	4,640	2,320	幅広く顧客基盤を持つ得意先として設備工事業 の取引を行っており、取引関係の維持・強化を 図るために継続して保有している。	無
	14	11		
(株)御園座	8,000	8,000	劇場の建設・保守・メンテナンス等の設備工事 業における取引を行っており、取引関係の維 持・強化を図るために継続して保有している。	無
	14	15		
(株)大垣共立銀行	6,957	6,957	事務所や店舗において、建設・保守・メンテナ ンス等の設備工事業の取引や主要取引金融機関 として資金借入取引を行っており、取引関係の 維持・強化を図るために継続して保有してい る。	有
	12	13		
キリンホールディ ングス(株)	5,897	5,897	工場や事務所等において、建設・保守・メンテ ナンス等の設備工事業の取引を行っており、取 引関係の維持・強化を図るために継続して保有 している。	無
	12	10		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の 株式の 保有の 有無
	株式数（株）	株式数（株）		
	貸借対照表計上額 （百万円）	貸借対照表計上額 （百万円）		
旭ダイヤモンド工業(株)	11,910	*	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。更なる関係強化のため、取引先持株会に加入し買付を行っている。	無
	11	*		
(株)百五銀行	30,000	30,000	事務所や店舗において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引や主要取引金融機関として資金借入取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	11	10		
(株)守谷商会	4,900	4,900	幅広く顧客基盤を持つ得意先として設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	11	10		
コカ・コーラボトラーズジャパンホールディングス(株)	7,500	7,500	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	10	10		
千代田化工建設(株)	26,736	26,736	幅広く顧客基盤を持つ得意先として設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	10	12		
(株)バローホールディングス	—	74,016	—	無
	—	156		
シャープ(株)	*	10,000	工場や事務所等において、建設・保守・メンテナンス等の設備工事業の取引を行っており、取引関係の維持・強化を図るために継続して保有している。	無
	*	11		

(注) 1 定量的な保有効果については、秘密保持の観点から記載していない。

なお、採算性の検証は、銘柄の企業グループごとの工事受注等による利益獲得貢献度に基づく投資収益率と当社の資本コスト（WACC）を比較し、実施している。

- 2 「—」は、当該銘柄を保有していないことを示している。「*」は、当該銘柄の貸借対照表計上額が当社の資本金額の100分の1以下であり、かつ貸借対照表計上額の大きい順の60銘柄に該当しないために記載を省略していることを示している。
- 3 当社の株式の保有の有無については、銘柄が持株会社の場合はその主要な子会社の保有分を勘案し記載している。

みなし保有株式

該当事項なし。

- ③ 保有目的が純投資目的である投資株式
該当事項なし。

第5【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（1976年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」という。）に準拠して作成し、「建設業法施行規則」（1949年建設省令第14号）に準じて記載している。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（1963年大蔵省令第59号。）第2条の規定に基づき、同規則及び「建設業法施行規則」（1949年建設省令第14号）により作成している。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2022年4月1日から2023年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2022年4月1日から2023年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人により監査を受けている。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っている。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、セミナー等に参加している。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年 3月31日)	当連結会計年度 (2023年 3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金預金	29,015	30,101
預け金	1,500	1,700
受取手形・完成工事未収入金等	※1 69,521	※1 79,887
未成工事支出金	6,577	※2 6,787
材料貯蔵品	3,177	3,505
商品	111	117
その他	3,458	3,673
貸倒引当金	△90	△138
流動資産合計	113,270	125,633
固定資産		
有形固定資産		
建物・構築物	58,341	58,171
機械、運搬具及び工具器具備品	113,655	116,256
土地	31,633	31,897
建設仮勘定	9,634	401
減価償却累計額	△67,373	△74,796
有形固定資産合計	145,891	131,931
無形固定資産		
のれん	1,253	940
その他	2,793	3,121
無形固定資産合計	4,047	4,061
投資その他の資産		
投資有価証券	※3,※4 28,877	※3,※4 28,405
繰延税金資産	4,868	6,871
その他	※4 6,511	※4 6,662
貸倒引当金	△1,869	△3,393
投資その他の資産合計	38,389	38,546
固定資産合計	188,328	174,538
資産合計	301,599	300,172

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年 3月31日)	当連結会計年度 (2023年 3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形・工事未払金等	39,531	45,485
短期借入金	4,182	9,082
リース債務	7,470	7,710
未払費用	7,351	7,100
未払法人税等	1,852	1,111
未成工事受入金	2,533	3,719
工事損失引当金	247	※2 292
リース解約損失引当金	—	967
その他	1,536	2,467
流動負債合計	64,704	77,937
固定負債		
社債	8,400	8,400
長期借入金	23,463	22,381
リース債務	55,463	49,483
退職給付に係る負債	18,662	19,594
資産除去債務	3,801	4,686
その他	506	495
固定負債合計	110,298	105,041
負債合計	175,002	182,978
純資産の部		
株主資本		
資本金	7,680	7,680
資本剰余金	6,840	6,848
利益剰余金	105,381	97,310
自己株式	△1,548	△1,537
株主資本合計	118,354	110,302
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	7,689	7,548
為替換算調整勘定	206	388
退職給付に係る調整累計額	320	△1,079
その他の包括利益累計額合計	8,216	6,857
非支配株主持分	26	34
純資産合計	126,596	117,193
負債純資産合計	301,599	300,172

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
売上高		
完成工事高	203,614	214,981
その他の事業売上高	16,002	17,071
売上高合計	※1 219,617	※1 232,053
売上原価		
完成工事原価	※2 173,356	※2 187,403
その他の事業売上原価	11,357	12,329
売上原価合計	184,713	199,732
売上総利益		
完成工事総利益	30,258	27,578
その他の事業総利益	4,644	4,742
売上総利益合計	34,903	32,320
販売費及び一般管理費	※3,※4 20,831	※3,※4 22,033
営業利益	14,072	10,287
営業外収益		
受取利息	109	51
受取配当金	336	441
受取地代家賃	175	192
持分法による投資利益	747	75
雑収入	212	172
営業外収益合計	1,582	932
営業外費用		
支払利息	2,106	2,131
シンジケートローン手数料	20	—
雑支出	132	104
営業外費用合計	2,259	2,236
経常利益	13,394	8,983
特別利益		
固定資産売却益	※5 904	※5 12
貸倒引当金戻入額	0	—
投資有価証券売却益	—	106
特別利益合計	905	118
特別損失		
固定資産除売却損	※6 109	※6 139
減損損失	—	※7 10,004
貸倒引当金繰入額	1,574	1,525
投資有価証券評価損	10	0
リース解約損	610	—
リース解約損失引当金繰入額	—	967
損害賠償金	—	510
特別損失合計	2,305	13,148
税金等調整前当期純利益又は 税金等調整前当期純損失 (△)	11,994	△4,046
法人税、住民税及び事業税	3,751	2,824
法人税等調整額	△44	△1,330
法人税等合計	3,706	1,493
当期純利益又は当期純損失 (△)	8,288	△5,539
非支配株主に帰属する当期純利益	4	8
親会社株主に帰属する当期純利益又は 親会社株主に帰属する当期純損失 (△)	8,283	△5,548

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
当期純利益又は当期純損失 (△)	8,288	△5,539
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	491	△147
為替換算調整勘定	208	105
退職給付に係る調整額	157	△1,357
持分法適用会社に対する持分相当額	△15	41
その他の包括利益合計	※1 842	※1 △1,357
包括利益	9,130	△6,897
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	9,123	△6,907
非支配株主に係る包括利益	7	9

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	7,680	6,839	99,368	△1,545	112,343
会計方針の変更による 累積的影響額			158		158
会計方針の変更を反映した 当期首残高	7,680	6,839	99,527	△1,545	112,502
当期変動額					
剰余金の配当			△2,429		△2,429
親会社株主に帰属する 当期純利益			8,283		8,283
自己株式の取得				△2	△2
自己株式の処分		0		0	0
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	0	5,854	△2	5,852
当期末残高	7,680	6,840	105,381	△1,548	118,354

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算 調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	7,198	1	176	7,376	20	119,740
会計方針の変更による 累積的影響額						158
会計方針の変更を反映した 当期首残高	7,198	1	176	7,376	20	119,898
当期変動額						
剰余金の配当						△2,429
親会社株主に帰属する 当期純利益						8,283
自己株式の取得						△2
自己株式の処分						0
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	491	204	143	839	6	845
当期変動額合計	491	204	143	839	6	6,697
当期末残高	7,689	206	320	8,216	26	126,596

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	7,680	6,840	105,381	△1,548	118,354
当期変動額					
剰余金の配当			△2,523		△2,523
親会社株主に帰属する 当期純損失			△5,548		△5,548
自己株式の取得				△2	△2
自己株式の処分		8		13	21
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	8	△8,071	11	△8,052
当期末残高	7,680	6,848	97,310	△1,537	110,302

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算 調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	7,689	206	320	8,216	26	126,596
当期変動額						
剰余金の配当						△2,523
親会社株主に帰属する 当期純損失						△5,548
自己株式の取得						△2
自己株式の処分						21
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	△141	182	△1,399	△1,358	8	△1,350
当期変動額合計	△141	182	△1,399	△1,358	8	△9,402
当期末残高	7,548	388	△1,079	6,857	34	117,193

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益又は 税金等調整前当期純損失 (△)	11,994	△4,046
減価償却費	8,970	9,887
減損損失	—	10,004
のれん償却額	313	313
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	1,580	1,571
リース解約損失引当金の増減額 (△は減少)	—	967
その他の引当金の増減額 (△は減少)	△57	45
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	△942	△1,020
受取利息及び受取配当金	△446	△492
支払利息	2,106	2,131
為替差損益 (△は益)	△85	14
投資有価証券評価損益 (△は益)	10	0
投資有価証券売却損益 (△は益)	—	△106
持分法による投資損益 (△は益)	△747	△75
有形及び無形固定資産除売却損益 (△は益)	△795	127
リース解約損	610	—
売上債権の増減額 (△は増加)	△9,788	△10,339
未成工事支出金の増減額 (△は増加)	△1,629	△187
棚卸資産の増減額 (△は増加)	△223	△335
仕入債務の増減額 (△は減少)	4,758	5,130
未成工事受入金の増減額 (△は減少)	254	1,166
未払消費税等の増減額 (△は減少)	△4,417	1,404
その他	△32	33
小計	11,434	16,194
リース解約損の支払額	△610	—
法人税等の支払額	△4,880	△3,553
営業活動によるキャッシュ・フロー	5,943	12,640
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△30	△201
定期預金の払戻による収入	100	30
預け金の純増減額 (△は増加)	△500	500
投資有価証券の取得による支出	△149	△25
投資有価証券の売却による収入	3	154
関係会社株式の取得による支出	△3,086	△176
貸付金の回収による収入	18	12
有形固定資産の取得による支出	△4,974	△2,378
有形固定資産の売却による収入	7,357	51
権利金等の払戻による収入	4,580	—
利息及び配当金の受取額	682	887
その他	△1,030	△973
投資活動によるキャッシュ・フロー	2,969	△2,119

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額（△は減少）	△7,200	4,900
長期借入れによる収入	1,979	—
長期借入金の返済による支出	△1,082	△1,082
社債の償還による支出	△5,708	—
自己株式の取得による支出	△2	△2
自己株式の売却による収入	0	0
リース債務の返済による支出	△10,992	△7,526
セール・アンド・リースバックによる収入	21	7
利息の支払額	△2,106	△2,131
配当金の支払額	△2,426	△2,518
非支配株主への配当金の支払額	△1	△1
その他	△3	△3
財務活動によるキャッシュ・フロー	△27,522	△8,358
現金及び現金同等物に係る換算差額	177	13
現金及び現金同等物の増減額（△は減少）	△18,432	2,176
現金及び現金同等物の期首残高	46,857	28,424
現金及び現金同等物の期末残高	※1 28,424	※1 30,601

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

連結子会社数 6社

すべての子会社を連結の範囲に含めている。

連結子会社名

- ・(株)トーエネックサービス
- ・旭シンクロテック(株)
- ・統一能科建築安裝(上海)有限公司
- ・TOENEC (THAILAND) CO., LTD.
- ・TOENEC PHILIPPINES INCORPORATED
- ・PT. ASAHI SYNCHROTECH INDONESIA

(注) TOENEC (THAILAND) CO., LTD. は、Tri-En TOENEC Co., Ltd. への事業移管が終了し清算手続き中である。

2 持分法の適用に関する事項

持分法適用関連会社数 4社

すべての関連会社を持分法適用の範囲に含めている。

持分法適用関連会社名

- ・P F I 豊川宝飯斎場(株)
- ・(株)中部プラントサービス
- ・Tri-En TOENEC Co., Ltd.
- ・HAWEE MECHANICAL AND ELECTRICAL JOINT STOCK COMPANY

持分法適用関連会社のうちTri-En TOENEC Co., Ltd.、HAWEE MECHANICAL AND ELECTRICAL JOINT STOCK COMPANYの決算日は12月31日であり、持分法の適用にあたっては、同日現在の財務諸表を使用している。

持分法適用にあたり発生した投資差額(のれん相当額)は、10年間で均等償却している。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち、統一能科建築安裝(上海)有限公司、TOENEC (THAILAND) CO., LTD.、TOENEC

PHILIPPINES INCORPORATED、PT. ASAHI SYNCHROTECH INDONESIAの決算日は12月31日であり、連結財務諸表の作成にあたっては、同日現在の財務諸表を使用し、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っている。

また、その他の連結子会社については決算日に相違はない。

4 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

棚卸資産

① 未成工事支出金

個別法による原価法

② 材料貯蔵品・商品

主として移動平均法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産

① リース資産以外の有形固定資産

主として定率法

ただし、当社及び国内連結子会社については、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）、2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物、機械装置のうち太陽光発電事業用設備について、定額法を採用している。

なお、耐用年数及び残存価額については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっている。

② リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用している。

無形固定資産

定額法

ただし、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法による。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上している。

工事損失引当金

将来の工事損失の発生に備えるため、工事損失が確実視される場合に、当連結会計年度末において合理的に見積もることができる工事損失見込額を計上する方法によっている。

リース解約損失引当金

リース契約の解約による損失に備えるため、個別に見積もった損失見込額を計上している。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっている。

② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（15年）による定額法により費用処理している。

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（15年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生した連結会計年度から費用処理している。

③ 小規模企業等における簡便法の採用

一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用している。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

当社グループの顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点（収益を認識する通常の時点）は、以下のとおりである。

① 工事契約

当社グループは、配電線工事、地中線工事、屋内線工事、空調管工事及び通信工事を請け負っている。

これらの取引については、一定の期間にわたり履行義務を充足することから、期間がごく短い工事契約を除き、その進捗度に応じて収益を認識している。進捗度の見積りは、実施した工事に関して発生した工事原価が、完成までに予想される工事原価総額に占める割合（インプット法）を使用している。

工事収益総額の見積り、完成までの進捗状況に変更が生じる可能性がある場合、見積りの見直しを行っている。なお、変動対価等を含む収益の額に重要性はない。また、約束した対価の金額に重要な金融要素は含まれていない。

② 太陽光発電事業

当社グループは、再生可能エネルギーの固定価格買取制度を利用した太陽光発電事業を営んでいる。検針日から期末までの売電量を見積もって計上することで、会計期間に対応した収益を認識している。

(6) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、発生原因に応じ20年以内で均等償却している。

(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなる。

(重要な会計上の見積り)

会計上の見積りにあたっては、連結財務諸表作成時に入手可能な情報に基づいて合理的な金額を算出している。当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額が会計上の見積りによるもののうち、翌連結会計年度の連結財務諸表に重要な影響を及ぼすリスクがある項目は以下のとおりである。

工事契約に係る収益認識

(1) 当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
一定の期間にわたり充足される履行義務に係る工事契約の売上高	79,752	91,516

(2) 会計上の見積りの内容について連結財務諸表の利用者の理解に資するその他の情報

設備工事業における工事契約において、一定の期間にわたり充足される履行義務については、期間がごく短い工事契約を除き、履行義務の充足に係る進捗度を見積もり、当該進捗度に基づき収益を一定の期間にわたり認識している。なお、進捗度の見積りは、実施した工事に関して発生した工事原価が、完成までに予想される工事原価総額に占める割合（インプット法）を使用している。

決算日における履行義務の充足に係る進捗度の見積りは、施工部署が作成した実行予算を基礎としており、発注者又は外注業者等との間で行われた協議の結果に関する情報を主要な仮定として織り込んでいる。

こうした協議の結果は、経済状況による材料費・外注費の変動や設計変更などにより変化するため、不確実性の要素を含んでおり、将来の収益に重要な影響を及ぼす可能性がある。

(連結貸借対照表関係)

※1 受取手形・完成工事未収入金等のうち、顧客との契約から生じた債権及び契約資産の金額は、それぞれ次のとおりである。

	前連結会計年度 (2022年 3月31日)	当連結会計年度 (2023年 3月31日)
受取手形	768百万円	958百万円
電子記録債権	4,370	6,028
完成工事未収入金	46,076	51,072
未収入金	2,948	2,871
契約資産	15,357	18,957

※2 損失の発生が見込まれる工事契約に係る未成工事支出金と工事損失引当金は、相殺せずに両建てで表示している。
工事損失引当金に対応する未成工事支出金の額

	前連結会計年度 (2022年 3月31日)	当連結会計年度 (2023年 3月31日)
	一百万円	0百万円

※3 このうち関連会社に対する金額は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (2022年 3月31日)	当連結会計年度 (2023年 3月31日)
投資有価証券 (株式)	14,406百万円	14,184百万円

※4 担保資産

担保に供している資産は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (2022年 3月31日)	当連結会計年度 (2023年 3月31日)
投資有価証券	64百万円	48百万円
その他 (長期貸付金)	15	11
計	80	60

当社が出資しているPFI事業会社 (前連結会計年度9社、当連結会計年度7社) の金融機関からの借入債務に係る担保に供している。

(連結損益計算書関係)

※1 売上高については、顧客との契約から生じる収益及びそれ以外の収益を区分して記載していない。顧客との契約から生じる収益の金額は、連結財務諸表「注記事項 (収益認識関係) 1 顧客との契約から生じる収益を分解した情報」に記載している。

※2 完成工事原価に含まれる工事損失引当金繰入額は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
	28百万円	186百万円

※3 このうち主要な費目及び金額は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
従業員給料手当	10,269百万円	10,656百万円
退職給付費用	795	689
雑費	2,162	2,298

※4 一般管理費に含まれる研究開発費は、次のとおりである。

前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
455百万円	507百万円

※5 固定資産売却益の内訳は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
機械、運搬具及び工具器具備品	896百万円	7百万円
土地	8	5
計	904	12

※6 固定資産除売却損の内訳は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
建物・構築物	61百万円	105百万円
機械、運搬具及び工具器具備品	47	31
土地	—	2
無形固定資産	0	—
その他（長期前払費用）	0	0
計	109	139

※7 当連結会計年度において、当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上した。

場所	用途	種類	減損損失 (百万円)
静岡県	太陽光発電事業用資産	建設仮勘定	9,564
		投資その他の資産「その他」	440
計			10,004

当社グループは、原則として、太陽光発電事業については案件ごとにグルーピングを行っている。

当資産グループについて、第2四半期連結会計期間において事業の見通しが不透明となり、当初想定していた収益が見込めなくなったため、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として計上した。回収可能価額については、将来キャッシュ・フローが見込めないことから使用価値を零としている。

(連結包括利益計算書関係)

※1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	705百万円	△132百万円
組替調整額	—	△91
税効果調整前	705	△224
税効果額	△213	76
その他有価証券評価差額金	491	△147
為替換算調整勘定		
当期発生額	208	105
組替調整額	—	—
税効果調整前	208	105
税効果額	—	—
為替換算調整勘定	208	105
退職給付に係る調整額		
当期発生額	△416	△2,364
組替調整額	642	412
税効果調整前	225	△1,951
税効果額	△67	593
退職給付に係る調整額	157	△1,357
持分法適用会社に対する持分相当額		
当期発生額	1	53
組替調整額	△16	△11
持分法適用会社に対する持分相当額	△15	41
その他の包括利益合計	842	△1,357

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式 (千株)	19,329	—	—	19,329

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式 (千株)	640	0	0	640

(変動事由の概要)

増加の内訳は、単元未満株式の買取りによるものである。

減少の内訳は、単元未満株式の買増請求による売渡しによるものである。

3 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2021年 6月25日 定時株主総会	普通株式	1,588	85	2021年 3月31日	2021年 6月28日
2021年10月28日 取締役会	普通株式	841	45	2021年 9月30日	2021年11月30日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2022年 6月28日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	1,682	90	2022年 3月31日	2022年 6月29日

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式（千株）	19,329	—	—	19,329

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式（千株）	640	0	5	635

（変動事由の概要）

普通株式の自己株式の増加0千株は、単元未満株式の買取りによる増加0千株である。

普通株式の自己株式の減少5千株は、譲渡制限付株式報酬としての自己株式の処分による減少5千株、単元未満株式の売渡しによる減少0千株である。

3 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2022年 6月28日 定時株主総会	普通株式	1,682	90	2022年 3月31日	2022年 6月29日
2022年10月28日 取締役会	普通株式	841	45	2022年 9月30日	2022年11月30日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2023年 6月28日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	934	50	2023年 3月31日	2023年 6月29日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
現金預金勘定	29,015百万円	30,101百万円
預け金勘定	1,500	1,700
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	△1,590	△1,200
預入期間が3ヶ月を超える預け金	△500	—
現金及び現金同等物	28,424	30,601

2 重要な非資金取引の内容

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
ファイナンス・リース取引に係る資産及び 債務の額	12,726百万円	1,774百万円

(リース取引関係)

ファイナンス・リース取引

(借主側)

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

有形固定資産

主として、エネルギー事業における太陽光発電事業用設備及び設備工事業における事業用車両である。

(2) リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりである。

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

前連結会計年度(2022年 3月31日)

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、安全性の高い金融資産で資金運用し、銀行等金融機関からの借入れ・社債発行で資金調達するほか、中部電力関係会社間のキャッシュ・マネジメント・サービスを利用して資金運用及び資金調達することとしている。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形・完成工事未収入金等は、顧客の信用リスクに晒されている。当該リスクに関しては、主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに、工事部門及び管理部門が連携し、財務状況の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っている。

預け金は、中部電力関係会社間の資金効率の向上や有利子負債削減を図るとともに、余裕資金を持つ会社に安定的な運用先を共有するためのキャッシュ・マネジメント・サービスによるものである。

投資有価証券は、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されているが、定期的に時価や発行体(取引先企業)の財務状況等を把握し、また、取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直している。

営業債務である支払手形・工事未払金等は、そのほとんどが1年以内の支払期日である。

社債及び借入金は、運転資金及び太陽光発電事業投資等を目的とする資金調達である。

リース債務は、主に太陽光発電事業用設備及び事業用車両の所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るものである。

営業債務や社債・借入金に係る流動性リスクについては、各部署からの報告に基づき経理部が資金繰計画を作成するなどの方法により管理している。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがある。

(4) 信用リスクの集中

当期の連結決算日現在における営業債権のうち18.7%が中部電力グループ(中部電力㈱、中部電力パワーグリッド㈱、中部電力ミライズ㈱)に対するものである。

当連結会計年度（2023年 3月31日）

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、安全性の高い金融資産で資金運用し、銀行等金融機関からの借入れ・社債発行で資金調達するほか、中部電力関係会社間のキャッシュ・マネジメント・サービスを利用して資金運用及び資金調達することとしている。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形・完成工事未収入金等は、顧客の信用リスクに晒されている。当該リスクに関しては、主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに、工事部門及び管理部門が連携し、財務状況の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っている。

預け金は、中部電力関係会社間の資金効率の向上や有利子負債削減を図るとともに、余裕資金を持つ会社へ安定的な運用先を共有するためのキャッシュ・マネジメント・サービスによるものである。

投資有価証券は、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されているが、定期的に時価や発行体（取引先企業）の財務状況等を把握し、また、取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直している。

営業債務である支払手形・工事未払金等は、そのほとんどが1年以内の支払期日である。

社債及び借入金は、運転資金及び太陽光発電事業投資等を目的とする資金調達である。

リース債務は、主に太陽光発電事業用設備及び事業用車両の所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るものである。

営業債務や社債・借入金に係る流動性リスクについては、各部署からの報告に基づき経理部が資金繰計画を作成するなどの方法により管理している。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがある。

(4) 信用リスクの集中

当期の連結決算日現在における営業債権のうち16.5%が中部電力グループ（中部電力㈱、中部電力パワーグリッド㈱、中部電力ミライズ㈱）に対するものである。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりである。

前連結会計年度（2022年 3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 投資有価証券（※2）	13,891	13,891	—
資産計	13,891	13,891	—
(1) 社債	8,400	8,376	△23
(2) 長期借入金（※3）	24,545	24,515	△29
(3) リース債務	62,933	61,865	△1,067
負債計	95,878	94,757	△1,121

（※1）「現金預金」、「預け金」、「受取手形・完成工事未収入金等」、「支払手形・工事未払金等」及び「短期借入金」については、現金及び短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略している。

（※2）市場価格のない株式等は、「(1) 投資有価証券」には含めていない。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりである。

区分	前連結会計年度（百万円）
非上場株式等	14,986

（※3）1年以内返済予定の長期借入金は、「(2) 長期借入金」に含めている。

当連結会計年度（2023年 3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 投資有価証券（※2）	13,645	13,645	—
資産計	13,645	13,645	—
(1) 社債	8,400	8,302	△97
(2) 長期借入金（※3）	23,463	23,178	△284
(3) リース債務	57,193	56,349	△844
負債計	89,056	87,830	△1,225

（※1）「現金預金」、「預け金」、「受取手形・完成工事未収入金等」、「支払手形・工事未払金等」及び「短期借入金」については、現金及び短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略している。

（※2）市場価格のない株式等は、「(1) 投資有価証券」には含めていない。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりである。

区分	当連結会計年度（百万円）
非上場株式等	14,759

（※3）1年以内返済予定の長期借入金は、「(2) 長期借入金」に含めている。

(注1) 金銭債権及び満期がある有価証券の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度(2022年 3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超5年以内 (百万円)	5年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金預金	29,015	—	—	—
預け金	1,500	—	—	—
受取手形・完成工事未収入金等	54,163	—	—	—
投資有価証券				
その他有価証券				
(1) 債券	—	—	—	—
(2) その他	—	—	—	100
合計	84,679	—	—	100

当連結会計年度(2023年 3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超5年以内 (百万円)	5年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金預金	30,101	—	—	—
預け金	1,700	—	—	—
受取手形・完成工事未収入金等	60,929	—	—	—
投資有価証券				
その他有価証券				
(1) 債券	—	—	—	—
(2) その他	—	—	—	100
合計	92,731	—	—	100

(注2) 短期借入金、社債、長期借入金及びリース債務の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度(2022年 3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	3,100	—	—	—	—	—
社債	—	—	—	—	—	8,400
長期借入金	1,082	1,082	1,082	1,082	1,082	19,135
リース債務	7,470	7,529	7,535	7,577	7,647	25,173
合計	11,652	8,611	8,617	8,659	8,729	52,708

当連結会計年度(2023年 3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	8,000	—	—	—	—	—
社債	—	—	—	—	—	8,400
長期借入金	1,082	1,082	1,082	1,082	1,082	18,053
リース債務	7,710	7,711	7,749	7,825	7,540	18,656
合計	16,792	8,793	8,831	8,907	8,622	45,109

3 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類している。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類している。

(1) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

前連結会計年度（2022年 3月31日）

区分	時価（百万円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券				
その他有価証券				
株式	13,891	—	—	13,891
資産計	13,891	—	—	13,891

当連結会計年度（2023年 3月31日）

区分	時価（百万円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券				
その他有価証券				
株式	13,645	—	—	13,645
資産計	13,645	—	—	13,645

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品
前連結会計年度（2022年 3月31日）

区分	時価（百万円）			
	レベル 1	レベル 2	レベル 3	合計
社債	—	8,376	—	8,376
長期借入金（※1）	—	24,515	—	24,515
リース債務	—	61,865	—	61,865
負債計	—	94,757	—	94,757

（※1）1年以内返済予定の長期借入金は、長期借入金に含めている。

当連結会計年度（2023年 3月31日）

区分	時価（百万円）			
	レベル 1	レベル 2	レベル 3	合計
社債	—	8,302	—	8,302
長期借入金（※1）	—	23,178	—	23,178
リース債務	—	56,349	—	56,349
負債計	—	87,830	—	87,830

（※1）1年以内返済予定の長期借入金は、長期借入金に含めている。

（注） 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

投資有価証券

上場株式は相場価格を用いて評価している。上場株式は活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1の時価に分類している。

社債及び長期借入金

これらの時価は、元利金の合計額を同様の社債発行又は新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定しており、レベル2の時価に分類している。

リース債務

リース債務の時価は、新規に同様のリース取引を行った場合に想定される条件により算定しており、レベル2の時価に分類している。

(有価証券関係)

1 その他有価証券

前連結会計年度 (2022年 3月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 連結貸借対照表計上額が取得 原価を超えるもの			
株式	13,683	2,666	11,016
債券	—	—	—
その他	—	—	—
小計	13,683	2,666	11,016
(2) 連結貸借対照表計上額が取得 原価を超えないもの			
株式	208	243	△35
債券	—	—	—
その他	—	—	—
小計	208	243	△35
合計	13,891	2,910	10,981

(注) 非上場株式等 (連結貸借対照表計上額579百万円) については、市場価格がないことから、上表の「その他有価証券」には含めていない。

当連結会計年度 (2023年 3月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 連結貸借対照表計上額が取得 原価を超えるもの			
株式	13,519	2,745	10,774
債券	—	—	—
その他	—	—	—
小計	13,519	2,745	10,774
(2) 連結貸借対照表計上額が取得 原価を超えないもの			
株式	125	143	△17
債券	—	—	—
その他	—	—	—
小計	125	143	△17
合計	13,645	2,888	10,757

(注) 非上場株式等 (連結貸借対照表計上額575百万円) については、市場価格がないことから、上表の「その他有価証券」には含めていない。

2 売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）

区分	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	3	—	—
債券	—	—	—
その他	—	—	—
合計	3	—	—

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

区分	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	154	106	—
債券	—	—	—
その他	—	—	—
合計	154	106	—

3 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）

有価証券について10百万円（その他有価証券の株式）減損処理を行っている。

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

有価証券について0百万円（その他有価証券の株式）減損処理を行っている。

なお、減損処理にあたっては、期末における時価が取得原価に比べ50%以上下落した場合には減損処理を行い、30%以上50%未満下落した場合には、回復可能性等を考慮して減損処理を行っている。市場価格のない株式等については、1株当たり純資産額に保有株式数を乗じた額が取得原価の50%以上下落した場合には、減損処理を行っている。

（注） 売買目的有価証券、満期保有目的の債券はない。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社及び一部の連結子会社は、確定給付型の制度として、確定給付企業年金制度及び退職一時金制度を設けているほか、確定拠出型の制度として、確定拠出年金制度を設けている。また、従業員の退職等に際して、退職給付会計に準拠した数理計算による退職給付債務の対象とされない割増加算退職金等を支給する場合がある。

当社及び一部の連結子会社は、当連結会計年度において、60歳から65歳への定年延長に伴う確定給付企業年金制度及び退職一時金制度の改定を行っており、2023年4月に導入する。この制度改定に伴い、退職給付債務が1,265百万円増加し、過去勤務費用が同額発生している。

なお、一部の連結子会社が有する退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算している。

2 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表 ((3)に掲げられた簡便法を適用した制度を除く)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
退職給付債務の期首残高	49,933百万円	48,448百万円
勤務費用	1,525	1,502
利息費用	155	153
数理計算上の差異の発生額	61	△75
過去勤務費用の発生額	—	1,259
退職給付の支払額	△3,236	△2,837
その他	7	7
退職給付債務の期末残高	48,448	48,456

(注) 当連結会計年度の過去勤務費用の発生額は、海外子会社で発生した過去勤務費用△6百万円を含んでいる。

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表 ((3)に掲げられた簡便法を適用した制度を除く)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
年金資産の期首残高	30,764百万円	30,464百万円
期待運用収益	615	610
数理計算上の差異の発生額	△376	△1,230
事業主からの拠出額	1,765	1,788
退職給付の支払額	△2,306	△2,063
その他	2	2
年金資産の期末残高	30,464	29,571

(3) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
退職給付債務の期首残高	651百万円	679百万円
退職給付費用	71	59
退職給付の支払額	△42	△28
退職給付債務の期末残高	679	710

(4) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2022年 3月31日)	当連結会計年度 (2023年 3月31日)
積立型制度の退職給付債務	36,750百万円	36,028百万円
年金資産	△30,464	△29,571
	6,285	6,456
非積立型制度の退職給付債務	12,377	13,138
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	18,662	19,594
退職給付に係る負債	18,662	19,594
退職給付に係る資産	—	—
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	18,662	19,594

(5) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
勤務費用	1,596百万円	1,561百万円
利息費用	155	153
期待運用収益	△615	△610
数理計算上の差異の費用処理額	1,165	971
過去勤務費用の費用処理額	△497	△504
その他	41	36
確定給付制度に係る退職給付費用	1,845	1,608

(6) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
過去勤務費用	△497百万円	△1,763百万円
数理計算上の差異	723	△187
合計	225	△1,951

(7) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりである。

	前連結会計年度 (2022年 3月31日)	当連結会計年度 (2023年 3月31日)
未認識過去勤務費用	5,922百万円	4,158百万円
未認識数理計算上の差異	△5,504	△5,692
合計	417	△1,534

(8) 年金資産に関する事項

① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (2022年 3月31日)	当連結会計年度 (2023年 3月31日)
株式	32%	33%
債券	16	16
一般勘定	23	23
合同運用口	1	1
オルタナティブ	27	26
その他	1	1
合計	100	100

(注) オルタナティブ投資は、ローリスクローリターンの商品に限定して運用している。

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮している。

(9) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表している。）

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
割引率	0.3%	0.3%
長期期待運用収益率	2.0	2.0

3 確定拠出制度

当社及び一部の連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度480百万円、当連結会計年度475百万円である。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2022年 3月31日)	当連結会計年度 (2023年 3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	592百万円	1,070百万円
未払賞与金	1,858	1,809
未払事業税	145	142
未払退職年金掛金	54	55
退職給付に係る負債	5,563	5,853
投資有価証券評価損	121	119
減損損失	296	3,320
資産除去債務	1,151	1,424
その他	525	1,027
繰延税金資産小計	10,311	14,822
評価性引当額 (注)	△451	△2,901
繰延税金資産合計	9,859	11,920
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△3,321	△3,244
固定資産圧縮積立金	△535	△530
資産除去債務に対応する除去費用	△936	△1,102
その他	△197	△171
繰延税金負債合計	△4,990	△5,049
繰延税金資産の純額	4,868	6,871

(注) 評価性引当額が2,449百万円増加している。この増加の主な内容は、減損損失に係る評価性引当額が1,206百万円増加したこと及び貸倒引当金に係る評価性引当額が955百万円増加したことによるものである。

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2022年 3月31日)	当連結会計年度 (2023年 3月31日)
法定実効税率	30.30%	30.30%
(調整)		
永久に損金に算入されない項目	0.86	△4.28
永久に益金に算入されない項目	△0.54	2.43
住民税均等割	1.18	△3.68
評価性引当額の増減	△0.56	△60.51
関連会社持分法損益	△1.12	△1.53
その他	0.78	0.36
税効果会計適用後の法人税等の負担率	30.90	△36.91

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの。

(1) 当該資産除去債務の概要

太陽光発電事業における発電所用地の不動産賃貸借契約に伴う原状回復義務等である。

(2) 当該資産除去債務の金額の算定方法

使用見込期間を取得から主に17年と見積り、割引率は $\Delta 0.033\% \sim 1.378\%$ を使用して資産除去債務の金額を計算している。

(3) 当該資産除去債務の総額の増減

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
期首残高	3,518百万円	3,801百万円
有形固定資産の取得に伴う増加額	465	—
見積りの変更による増減額 (△は減少)	—	870
時の経過による調整額	9	14
有形固定資産の売却に伴う減少額	△192	—
期末残高	3,801	4,686

(賃貸等不動産関係)

前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)

重要性が乏しいため、記載を省略している。

当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)

重要性が乏しいため、記載を省略している。

(収益認識関係)

1 顧客との契約から生じる収益を分解した情報
前連結会計年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他 (注)	合計
	設備工事業	エネルギー事業	計		
配電線工事	73,515	—	73,515	—	73,515
地中線工事	9,677	—	9,677	—	9,677
屋内線工事	64,723	—	64,723	—	64,723
空調管工事	35,827	—	35,827	—	35,827
通信工事	19,869	—	19,869	—	19,869
エネルギー事業	—	11,582	11,582	—	11,582
その他	—	—	—	4,383	4,383
顧客との契約から生じる収益	203,614	11,582	215,196	4,383	219,580
その他の収益	—	—	—	36	36
外部顧客との収益	203,614	11,582	215,196	4,420	219,617

(注) 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、商品販売、賃貸リース、損害保険代理業等を含んでいる。

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他 (注)	合計
	設備工事業	エネルギー事業	計		
配電線工事	75,540	—	75,540	—	75,540
地中線工事	8,934	—	8,934	—	8,934
屋内線工事	73,944	—	73,944	—	73,944
空調管工事	36,805	—	36,805	—	36,805
通信工事	19,755	—	19,755	—	19,755
エネルギー事業	—	12,475	12,475	—	12,475
その他	—	—	—	4,519	4,519
顧客との契約から生じる収益	214,981	12,475	227,456	4,519	231,976
その他の収益	—	47	47	30	77
外部顧客との収益	214,981	12,522	227,503	4,549	232,053

(注) 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、商品販売、賃貸リース、損害保険代理業等を含んでいる。

2 収益を理解するための基礎となる情報

収益を理解するための基礎となる情報は、連結財務諸表「注記事項（連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項） 4 会計方針に関する事項（5）重要な収益及び費用の計上基準」に記載している。

3 当期及び翌期以降の収益の金額を理解するための情報

(1) 契約資産及び契約負債の残高等

顧客との契約から生じた債権、契約資産及び契約負債の期首残高及び期末残高は次のとおりである。
前連結会計年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）

（単位：百万円）

	期首残高	期末残高
顧客との契約から生じた債権	48,932	54,163
契約資産	10,637	15,357
契約負債	2,218	2,533

契約資産は主に、顧客との契約について期末日時点で一部の履行義務を果たしているが、まだ請求していない財又はサービスに係る対価に対する当社グループの権利に関連するものである。契約資産は、対価に対する権利が無条件になった時点で債権に振り替えられる。

契約負債は主に、顧客から工事代金として受け入れた前受金である。期首現在の契約負債残高のほとんどすべてを、当連結会計年度に収益として認識している。

また、当連結会計年度において、過去の期間に充足（又は部分的に充足）した履行義務から認識した収益の額に重要性はない。

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

（単位：百万円）

	期首残高	期末残高
顧客との契約から生じた債権	54,163	60,929
契約資産	15,357	18,957
契約負債	2,533	3,719

契約資産は主に、顧客との契約について期末日時点で一部の履行義務を果たしているが、まだ請求していない財又はサービスに係る対価に対する当社グループの権利に関連するものである。契約資産は、対価に対する権利が無条件になった時点で債権に振り替えられる。

契約負債は主に、顧客から工事代金として受け入れた前受金である。期首現在の契約負債残高のほとんどすべてを、当連結会計年度に収益として認識している。

また、当連結会計年度において、過去の期間に充足（又は部分的に充足）した履行義務から認識した収益の額に重要性はない。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

前連結会計年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）

期末日時点で残存履行義務に配分した取引価格の総額は、当連結会計年度末において103,825百万円である。当該金額は、主に工事契約に係るものであり、工事の進捗に応じて約7割は1年以内に、約3割は1年超3年以内に収益認識する予定である。

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

期末日時点で残存履行義務に配分した取引価格の総額は、当連結会計年度末において148,270百万円である。当該金額は、主に工事契約に係るものであり、工事の進捗に応じて約7割は1年以内に、約3割は1年超3年以内に収益認識する予定である。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものである。

当社グループは、電気工事・管工事その他設備工事全般に関する事業、太陽光発電事業等のエネルギー事業及び電気工事材料等の販売などの事業を展開しており、「設備工事業」、「エネルギー事業」を報告セグメントとしている。

「設備工事業」においては、配電線工事、地中線工事、屋内線工事、空調管工事、通信工事を受注施工しており、「エネルギー事業」においては、太陽光発電事業、学校空調システムサービス、マンション高圧一括受電サービス事業等を営んでいる。

2 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であり、セグメント利益は、営業利益ベースの数値である。セグメント間の取引価格及び振替価格は市場実勢価格等に基づいている。

なお、セグメント資産及び負債については、経営資源の配分の決定及び業績を評価するための検討対象としていないため、記載していない。

3 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失その他の項目の金額に関する情報
前連結会計年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他 (注1)	合計	調整額 (注2)	連結財務 諸表計上額 (注3)
	設備工事業	エネルギー 事業	計				
売上高							
外部顧客への売上高	203,614	11,582	215,196	4,420	219,617	—	219,617
セグメント間の内部 売上高又は振替高	21	—	21	3,806	3,827	△3,827	—
計	203,635	11,582	215,218	8,226	223,444	△3,827	219,617
セグメント利益	15,839	3,350	19,190	547	19,738	△5,666	14,072
その他の項目							
減価償却費	2,367	5,719	8,086	548	8,634	336	8,970

- (注) 1 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、商品販売、賃貸リース、損害保険代理業等を含んでいる。
- 2 セグメント利益の調整額△5,666百万円には、セグメント間取引消去118百万円及び報告セグメントに配分していない全社費用△5,785百万円が含まれている。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない連結財務諸表提出会社の管理部門に係る一般管理費である。
- 3 セグメント利益は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っている。

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他 (注1)	合計	調整額 (注2)	連結財務 諸表計上額 (注3)
	設備工事業	エネルギー 事業	計				
売上高							
外部顧客への売上高	214,981	12,522	227,503	4,549	232,053	—	232,053
セグメント間の内部 売上高又は振替高	—	—	—	3,877	3,877	△3,877	—
計	214,981	12,522	227,503	8,427	235,931	△3,877	232,053
セグメント利益	12,493	3,335	15,829	391	16,220	△5,933	10,287
その他の項目							
減価償却費	2,737	6,092	8,829	690	9,520	366	9,887

- (注) 1 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、商品販売、賃貸リース、損害保険代理業等を含んでいる。
- 2 セグメント利益の調整額△5,933百万円には、セグメント間取引消去174百万円及び報告セグメントに配分していない全社費用△6,108百万円が含まれている。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない連結財務諸表提出会社の管理部門に係る一般管理費である。
- 3 セグメント利益は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っている。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）

1 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略している。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略している。

(2) 有形固定資産

本邦に存在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略している。

3 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
中部電力グループ（※）	75,916	設備工事業、エネルギー事業及びその他

※ 中部電力グループ：中部電力㈱、中部電力パワーグリッド㈱、中部電力ミライズ㈱

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

1 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略している。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略している。

(2) 有形固定資産

本邦に存在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略している。

3 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
中部電力グループ（※）	75,076	設備工事業、エネルギー事業及びその他

※ 中部電力グループ：中部電力㈱、中部電力パワーグリッド㈱、中部電力ミライズ㈱

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）

該当事項なし。

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他	全社・消去	合計
	設備工事業	エネルギー事業	計			
減損損失	－	10,004	10,004	－	－	10,004

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他	全社・消去	合計
	設備工事業	エネルギー事業	計			
当期償却額	313	－	313	－	－	313
当期末残高	1,253	－	1,253	－	－	1,253

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他	全社・消去	合計
	設備工事業	エネルギー事業	計			
当期償却額	313	－	313	－	－	313
当期末残高	940	－	940	－	－	940

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）

該当事項なし。

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

該当事項なし。

【関連当事者情報】

1 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

- ① 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等
前連結会計年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）
重要性が乏しいため、記載を省略している。

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）
重要性が乏しいため、記載を省略している。

- ② 連結財務諸表提出会社と同一の親会社をもつ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等

前連結会計年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）

種類	会社等の名称	所在地	資本金 又は出資金 (百万円)	事業の内容	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
同一の 親会社 を持つ 会社	中部電力パ ワーグリッ ド㈱	名古屋市 東区	40,000	一般送配電 事業	なし	工事請負	電気工事の受 注 (注) 1	72,858	完成工事未 収入金	12,419
									未成工事受 入金	13
同一の 親会社 を持つ 会社	㈱中電オー トリース	名古屋市 南区	100	総合リース 業	なし	事業用車両 のリース	リースによる 車両の取得 (注) 2	1,211	リース債務 (流動) リース債務 (固定)	1,064 5,001
							リース債務の 返済 (注) 2	1,049		
							リース債務利 息の支払い (注) 2	184		

当連結会計年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

種類	会社等の名称	所在地	資本金 又は出資金 (百万円)	事業の内容	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
同一の 親会社 を持つ 会社	中部電力パ ワーグリッ ド㈱	名古屋市 東区	40,000	一般送配電 事業	なし	工事請負	電気工事の受 注 (注) 1	72,162	完成工事未 収入金	12,617
									未成工事受 入金	13
同一の 親会社 を持つ 会社	㈱中電オー トリース	名古屋市 南区	100	総合リース 業	なし	事業用車両 のリース	リースによる 車両の取得 (注) 2	1,256	リース債務 (流動) リース債務 (固定)	1,118 5,233
							リース債務の 返済 (注) 2	1,116		
							リース債務利 息の支払い (注) 2	190		

取引条件及び取引条件の決定方針等

- (注) 1. 市場価格等を勘案し、価格交渉のうえ取引金額を決定している。
2. 当社と関連を有しない他の当事者と同様の条件によっている。

2 親会社又は重要な関連会社に関する注記

(1) 親会社情報

中部電力㈱（東京証券取引所・名古屋証券取引所に上場）

(2) 重要な関連会社の要約財務情報

重要性が乏しいため、記載を省略している。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
1株当たり純資産額	6,772.38円	6,267.16円
1株当たり当期純利益又は 1株当たり当期純損失(△)	443.23円	△296.83円

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載していない。

2 1株当たり純資産額の算定上の基礎

	前連結会計年度 (2022年 3月31日)	当連結会計年度 (2023年 3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	126,596	117,193
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	26	34
(うち非支配株主持分(百万円))	(26)	(34)
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	126,570	117,159
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数(千株)	18,689	18,694

3 1株当たり当期純利益の算定上の基礎

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益又は 親会社株主に帰属する当期純損失(△)(百万円)	8,283	△5,548
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益 又は親会社株主に帰属する当期純損失(△) (百万円)	8,283	△5,548
普通株式の期中平均株式数(千株)	18,689	18,692

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
(株)トーエネック	第3回無担保社債 (適格機関投資家限定) (グリーンボンド)	2019年 3月14日	8,400	8,400	0.40	無担保社債	2029年 3月14日
合計	—	—	8,400	8,400	—	—	—

(注) 連結決算日後5年内における償還予定額は以下のとおりである。

1年以内 (百万円)	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
—	—	—	—	—

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	3,100	8,000	0.37	—
1年以内に返済予定の長期借入金	1,082	1,082	0.63	—
1年以内に返済予定のリース債務	7,470	7,710	3.50	—
長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く。）	23,463	22,381	0.60	2024年6月30日 から 2035年3月27日
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）	55,463	49,483	3.53	2024年4月30日 から 2035年2月28日
合計	90,578	88,656	—	—

(注) 1 「平均利率」については、借入金等の当期末残高に対する加重平均利率を記載している。

2 長期借入金及びリース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりである。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	1,082	1,082	1,082	1,082
リース債務	7,711	7,749	7,825	7,540

【資産除去債務明細表】

明細表に記載すべき事項が連結財務諸表規則第15条の23に規定する注記事項として記載されているため、記載を省略している。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	52,301	107,608	163,202	232,053
税金等調整前四半期純利益又は税金等調整前四半期(当期)純損失(△)(百万円)	2,257	△7,465	△6,422	△4,046
親会社株主に帰属する四半期純利益又は親会社株主に帰属する四半期(当期)純損失(△)(百万円)	1,376	△7,133	△6,453	△5,548
1株当たり四半期純利益又は1株当たり四半期(当期)純損失(△)(円)	73.67	△381.66	△345.25	△296.83

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益又は1株当たり四半期純損失(△)(円)	73.67	△455.28	36.38	48.41

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年 3月31日)	当事業年度 (2023年 3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金預金	19,527	21,646
受取手形	324	765
電子記録債権	3,384	5,131
完成工事未収入金	57,858	62,498
未成工事支出金	6,120	6,192
材料貯蔵品	3,176	3,494
商品	49	51
未収入金	3,059	2,986
その他	3,135	3,240
貸倒引当金	△58	△119
流動資産合計	96,577	105,887
固定資産		
有形固定資産		
建物	50,042	49,695
減価償却累計額	△33,627	△34,324
建物（純額）	16,415	15,370
構築物	6,893	6,860
減価償却累計額	△4,760	△4,923
構築物（純額）	2,132	1,936
機械及び装置	100,465	102,535
減価償却累計額	△17,917	△24,138
機械及び装置（純額）	82,548	78,396
車両運搬具	1,688	1,533
減価償却累計額	△904	△763
車両運搬具（純額）	784	770
工具器具・備品	6,659	6,783
減価償却累計額	△5,841	△5,955
工具器具・備品（純額）	817	827
土地	31,471	31,769
建設仮勘定	9,621	398
有形固定資産合計	143,791	129,470
無形固定資産		
ソフトウェア	1,307	1,735
その他	1,245	1,145
無形固定資産合計	2,553	2,881

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年 3月31日)	当事業年度 (2023年 3月31日)
投資その他の資産		
投資有価証券	※1 14,436	※1 14,185
関係会社株式	※1 7,905	※1 7,957
関係会社出資金	138	138
長期貸付金	42	30
関係会社長期貸付金	※1 403	※1 424
破産更生債権等	153	152
長期前払費用	1,648	1,554
繰延税金資産	4,337	5,623
その他	4,643	4,279
貸倒引当金	△2,257	△3,805
投資その他の資産合計	31,453	30,541
固定資産合計	177,797	162,893
資産合計	274,375	268,781
負債の部		
流動負債		
支払手形	663	467
電子記録債務	8,623	13,237
工事未払金	24,681	24,295
短期借入金	4,182	9,082
リース債務	7,518	7,764
未払金	3,131	2,952
未払費用	6,448	6,172
未払法人税等	1,563	755
未成工事受入金	1,737	2,579
工事損失引当金	247	264
リース解約損失引当金	—	967
その他	1,236	2,186
流動負債合計	60,031	70,723
固定負債		
社債	8,400	8,400
長期借入金	23,463	22,381
リース債務	55,660	49,843
退職給付引当金	18,198	17,194
資産除去債務	3,801	4,559
その他	30	43
固定負債合計	109,554	102,421
負債合計	169,586	173,144

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年 3月31日)	当事業年度 (2023年 3月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	7,680	7,680
資本剰余金		
資本準備金	6,831	6,831
その他資本剰余金	8	16
資本剰余金合計	6,840	6,848
利益剰余金		
利益準備金	1,639	1,639
その他利益剰余金		
海外市場開拓積立金	100	100
固定資産圧縮積立金	1,231	1,220
別途積立金	73,900	78,200
繰越利益剰余金	7,292	△6,021
利益剰余金合計	84,163	75,138
自己株式	△1,548	△1,537
株主資本合計	97,136	88,130
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	7,652	7,506
評価・換算差額等合計	7,652	7,506
純資産合計	104,789	95,637
負債純資産合計	274,375	268,781

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
売上高		
完成工事高	182,154	190,894
兼業事業売上高	15,595	16,724
売上高合計	197,749	207,618
売上原価		
完成工事原価	156,048	167,832
兼業事業売上原価	11,124	12,128
売上原価合計	167,173	179,960
売上総利益		
完成工事総利益	26,105	23,061
兼業事業総利益	4,471	4,595
売上総利益合計	30,576	27,657
販売費及び一般管理費		
役員報酬	341	337
従業員給料手当	9,239	9,486
退職給付費用	749	658
法定福利費	1,488	1,519
福利厚生費	665	722
修繕維持費	172	135
事務用品費	143	140
通信交通費	430	538
動力用水光熱費	156	225
調査研究費	455	507
広告宣伝費	237	285
貸倒引当金繰入額	2	60
交際費	134	195
寄付金	5	7
地代家賃	649	726
減価償却費	857	995
租税公課	639	676
保険料	22	23
雑費	1,982	2,041
販売費及び一般管理費合計	18,374	19,284
営業利益	12,202	8,373
営業外収益		
受取利息	92	18
受取配当金	※1 571	※1 831
受取地代家賃	270	285
雑収入	162	152
営業外収益合計	1,097	1,287
営業外費用		
支払利息	2,050	2,105
社債利息	50	33
シンジケートローン手数料	20	—
雑支出	125	109
営業外費用合計	2,246	2,248
経常利益	11,053	7,412

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
特別利益		
固定資産売却益	※2 902	※2 6
貸倒引当金戻入額	0	—
投資有価証券売却益	—	106
特別利益合計	902	112
特別損失		
固定資産除売却損	※3 59	※3 113
減損損失	—	10,004
貸倒引当金繰入額	1,574	1,525
投資有価証券評価損	5	0
リース解約損	610	—
リース解約損失引当金繰入額	—	967
損害賠償金	—	510
特別損失合計	2,249	13,121
税引前当期純利益又は税引前当期純損失 (△)	9,706	△5,596
法人税、住民税及び事業税	3,094	2,116
法人税等調整額	△113	△1,210
法人税等合計	2,981	905
当期純利益又は当期純損失 (△)	6,724	△6,502

【完成工事原価報告書】

		前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)		当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)	
区分	注記 番号	金額 (百万円)	構成比 (%)	金額 (百万円)	構成比 (%)
材料費		42,578	27.3	50,414	30.0
労務費		8,735	5.6	8,073	4.8
(うち労務外注費)		(一)	(一)	(一)	(一)
外注費		57,769	37.0	61,042	36.4
経費		46,964	30.1	48,302	28.8
(うち人件費)		(23,151)	(14.8)	(22,639)	(13.5)
計		156,048	100	167,832	100

(注) 原価計算の方法は、個別原価計算である。

【兼業事業売上原価報告書】

1 エネルギー事業

		前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)		当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)	
区分	注記 番号	金額 (百万円)		金額 (百万円)	
経費		7,621		8,469	
兼業事業売上原価		7,621		8,469	

2 商品販売

		前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)		当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)	
区分	注記 番号	金額 (百万円)		金額 (百万円)	
期首商品棚卸高		38		49	
当期商品仕入高		3,514		3,661	
計		3,552		3,710	
期末商品棚卸高		49		51	
兼業事業売上原価		3,503		3,658	

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益準備金	利益剰余金		
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金		
						海外市場 開拓積立金	固定資産 圧縮積立金	特別償却 準備金
当期首残高	7,680	6,831	7	6,839	1,639	100	1,243	9
会計方針の変更による 累積的影響額								
会計方針の変更を反映した 当期首残高	7,680	6,831	7	6,839	1,639	100	1,243	9
当期変動額								
剰余金の配当								
固定資産圧縮積立金の取崩							△11	
特別償却準備金の取崩								△9
別途積立金の積立								
当期純利益								
自己株式の取得								
自己株式の処分			0	0				
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）								
当期変動額合計	—	—	0	0	—	—	△11	△9
当期末残高	7,680	6,831	8	6,840	1,639	100	1,231	—

	株主資本					評価・換算差額等		純資産合計
	利益剰余金			自己株式	株主資本 合計	その他 有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
	その他利益剰余金		利益剰余金 合計					
	別途積立金	繰越利益 剰余金						
当期首残高	69, 200	7, 554	79, 748	△1, 545	92, 722	7, 160	7, 160	99, 883
会計方針の変更による 累積的影響額		120	120		120			120
会計方針の変更を反映した 当期首残高	69, 200	7, 675	79, 868	△1, 545	92, 843	7, 160	7, 160	100, 004
当期変動額								
剰余金の配当		△2, 429	△2, 429		△2, 429			△2, 429
固定資産圧縮積立金の取崩		11	－		－			－
特別償却準備金の取崩		9	－		－			－
別途積立金の積立	4, 700	△4, 700	－		－			－
当期純利益		6, 724	6, 724		6, 724			6, 724
自己株式の取得				△2	△2			△2
自己株式の処分				0	0			0
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）						492	492	492
当期変動額合計	4, 700	△383	4, 294	△2	4, 292	492	492	4, 784
当期末残高	73, 900	7, 292	84, 163	△1, 548	97, 136	7, 652	7, 652	104, 789

当事業年度（自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益準備金	利益剰余金		
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金		
						海外市場 開拓積立金	固定資産 圧縮積立金	別途積立金
当期首残高	7,680	6,831	8	6,840	1,639	100	1,231	73,900
当期変動額								
剰余金の配当								
固定資産圧縮積立金の取崩							△11	
別途積立金の積立								4,300
当期純損失								
自己株式の取得								
自己株式の処分			8	8				
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）								
当期変動額合計	－	－	8	8	－	－	△11	4,300
当期末残高	7,680	6,831	16	6,848	1,639	100	1,220	78,200

	株主資本				評価・換算差額等		純資産合計
	利益剰余金		自己株式	株主資本 合計	その他 有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
	その他 利益剰余金	利益剰余金 合計					
	繰越利益 剰余金						
当期首残高	7,292	84,163	△1,548	97,136	7,652	7,652	104,789
当期変動額							
剰余金の配当	△2,523	△2,523		△2,523			△2,523
固定資産圧縮積立金の取崩	11	－		－			－
別途積立金の積立	△4,300	－		－			－
当期純損失	△6,502	△6,502		△6,502			△6,502
自己株式の取得			△2	△2			△2
自己株式の処分			13	21			21
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					△145	△145	△145
当期変動額合計	△13,313	△9,025	11	△9,006	△145	△145	△9,152
当期末残高	△6,021	75,138	△1,537	88,130	7,506	7,506	95,637

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

(2) その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

2 棚卸資産の評価基準及び評価方法

(1) 未成工事支出金

個別法による原価法

(2) 材料貯蔵品・商品

移動平均法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）

3 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

① リース資産以外の有形固定資産

定率法

ただし、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）、2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物、機械装置のうち太陽光発電事業用設備については定額法を採用している。

なお、耐用年数及び残存価額については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっている。

② リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用している。

(2) 無形固定資産及び長期前払費用

定額法

なお、耐用年数については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっている。

また、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法によっている。

(3) 少額減価償却資産

取得価額が10万円以上20万円未満の資産については、法人税法に規定する方法に基づき、各事業年度毎に一括して3年間で均等償却を行っている。

4 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上している。

(2) 工事損失引当金

将来の工事損失の発生に備えるため、工事損失が確実視される場合に、当事業年度末において合理的に見積もることができる工事損失見込額を計上する方法によっている。

(3) リース解約損失引当金

リース契約の解約による損失に備えるため、個別に見積もった損失見込額を計上している。

(4) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上している。

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっている。

② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（15年）による定額法により費用処理している。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（15年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生した事業年度から費用処理している。

5 収益及び費用の計上基準

当社の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点（収益を認識する通常の時点）は、以下のとおりである。

(1) 工事契約

当社は、配電線工事、地中線工事、屋内線工事、空調管工事及び通信工事を請け負っている。

これらの取引については、一定の期間にわたり履行義務を充足することから、期間がごく短い工事契約を除き、その進捗度に応じて収益を認識している。進捗度の見積りは、実施した工事に関して発生した工事原価が、完成までに予想される工事原価総額に占める割合（インプット法）を使用している。

工事収益総額の見積り、完成までの進捗状況に変更が生じる可能性がある場合、見積りの見直しを行っている。なお、変動対価等を含む収益の額に重要性はない。また、約束した対価の金額に重要な金融要素は含まれていない。

(2) 太陽光発電事業

当社は、再生可能エネルギーの固定価格買取制度を利用した太陽光発電事業を営んでいる。検針日から期末までの売電量を見積もって計上することで、会計期間に対応した収益を認識している。

6 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっている。

(重要な会計上の見積り)

会計上の見積りにあたっては、財務諸表作成時に入手可能な情報に基づいて合理的な金額を算出している。当事業年度の財務諸表に計上した金額が会計上の見積りによるもののうち、翌事業年度の財務諸表に重要な影響を及ぼすリスクがある項目は以下のとおりである。

工事契約に係る収益認識

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前事業年度	当事業年度
一定の期間にわたり充足される履行義務に係る工事契約の売上高	66,280	73,958

(2) 会計上の見積りの内容について財務諸表の利用者の理解に資するその他の情報

連結財務諸表「注記事項（重要な会計上の見積り） 工事契約に係る収益認識」に記載した内容と同一である。

(貸借対照表関係)

※1 担保資産

担保に供している資産は、次のとおりである。

	前事業年度 (2022年 3月31日)	当事業年度 (2023年 3月31日)
投資有価証券	28百万円	12百万円
関係会社株式	36	36
関係会社長期貸付金	15	11
計	80	60

当社が出資しているPFI事業会社（前事業年度9社、当事業年度7社）の金融機関からの借入債務に係る担保に供している。

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引にかかるものが、次のとおり含まれている。

	前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
受取配当金	235百万円	390百万円

※2 固定資産売却益の内訳は、次のとおりである。

	前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
機械及び装置	893百万円	6百万円
車両運搬具	0	—
工具器具・備品	0	0
土地	8	—
計	902	6

※3 固定資産除売却損の内訳は、次のとおりである。

	前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)	当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)
建物	54百万円	36百万円
構築物	4	65
機械及び装置	0	5
工具器具・備品	0	2
土地	—	2
長期前払費用	0	0
計	59	113

(有価証券関係)

前事業年度（2022年 3月31日）

子会社株式及び関連会社株式（貸借対照表計上額 子会社株式4,153百万円、関連会社株式3,752百万円）は、市場価格がないことから、時価を記載していない。

当事業年度（2023年 3月31日）

子会社株式及び関連会社株式（貸借対照表計上額 子会社株式4,153百万円、関連会社株式3,804百万円）は、市場価格がないことから、時価を記載していない。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2022年 3月31日)	当事業年度 (2023年 3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	701百万円	1,189百万円
未払賞与金	1,640	1,556
未払事業税	145	110
未払退職年金掛金	53	53
退職給付引当金	5,514	5,209
投資有価証券評価損	541	540
減損損失	290	3,320
資産除去債務	1,151	1,381
その他	176	667
繰延税金資産小計	10,215	14,029
評価性引当額	△967	△3,435
繰延税金資産合計	9,248	10,594
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△3,317	△3,241
固定資産圧縮積立金	△535	△530
資産除去債務に対応する除去費用	△936	△1,077
その他	△121	△122
繰延税金負債合計	△4,911	△4,971
繰延税金資産の純額	4,337	5,623

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	前事業年度 (2022年 3月31日)	当事業年度 (2023年 3月31日)
法定実効税率	30.30%	30.30%
(調整)		
永久に損金に算入されない項目	0.73	△1.61
永久に益金に算入されない項目	△0.58	1.56
住民税均等割	1.42	△2.59
評価性引当額の増減	△0.37	△44.09
その他	△0.78	0.24
税効果会計適用後の法人税等の負担率	30.72	△16.19

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、連結財務諸表「注記事項（収益認識関係）」に同一の内容を記載しているため、注記を省略している。

④【附属明細表】
【有価証券明細表】
【株式】

銘柄	株式数（株）	貸借対照表計上額（百万円）
(投資有価証券)		
その他有価証券		
KDD I (株)	902,400	3,693
トヨタ自動車(株)	860,985	1,618
オリンパス(株)	677,200	1,570
(株)マキタ	304,002	997
本田技研工業(株)	200,000	702
オーエスジー(株)	247,363	491
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	425,144	360
東海旅客鉄道(株)	20,000	316
第一生命ホールディングス(株)	115,100	280
イオン(株)	100,190	257
アサヒグループホールディングス(株)	50,000	246
住友電気工業(株)	133,379	226
(株)大林組	202,625	205
サッポロホールディングス(株)	60,000	204
野村ホールディングス(株)	374,526	190
(株)フジミインコーポレーテッド	24,200	176
(株)三井住友フィナンシャルグループ	31,881	168
日東電工(株)	16,300	139
(株)NEXPOINT	16,600	129
インフロニア・ホールディングス(株)	114,600	117
イビデン(株)	20,600	108
(株)八十二銀行	180,850	103
中部国際空港(株)	2,046	102
日本トムソン(株)	149,347	86
富士通(株)	4,446	79
(株)豊田自動織機	10,500	77
(株)明電舎	40,000	76
その他（105銘柄）	1,165,365	1,359
計	6,449,649	14,085

【債券】

該当事項なし。

【その他】

種類及び銘柄	投資口数等（口）	貸借対照表計上額（百万円）
（投資有価証券）		
その他有価証券		
〔投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資〕		
合同会社三重故郷創生プロジェクト匿名組合	1	100
その他（1銘柄）	1	0
計	2	100

（注） 売買目的有価証券、満期保有目的の債券はない。

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 （百万円）	当期増加額 （百万円）	当期減少額 （百万円）	当期末残高 （百万円）	当期末 減価償却 累計額又は 償却累計額 （百万円）	当期償却額 （百万円）	差引当期末 残高 （百万円）
有形固定資産							
建物	50,042	313	661	49,695	34,324	1,324	15,370
構築物	6,893	18	51	6,860	4,923	207	1,936
機械及び装置	100,465	2,286	216	102,535	24,138	6,431	78,396
車両運搬具	1,688	204	359	1,533	763	218	770
工具器具・備品	6,659	450	325	6,783	5,955	437	827
土地	31,471	300	2	31,769	—	—	31,769
建設仮勘定	9,621	350	9,573 (9,564)	398	—	—	398
有形固定資産計	206,842	3,923	11,189 (9,564)	199,576	70,105	8,620	129,470
無形固定資産							
ソフトウェア	1,972	772	342	2,401	666	328	1,735
その他	1,600	—	14	1,585	439	85	1,145
無形固定資産計	3,572	772	357	3,987	1,106	414	2,881
長期前払費用	1,750	3	3	1,750	196	96	1,554

（注） 1 「当期減少額」欄の（）内は内書きで、減損損失の計上額である。

2 建設仮勘定の「当期減少額」のうち主なものは、太陽光発電事業用資産に係る減損損失の計上によるものである。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	2,315	3,924	0	2,314	3,924
工事損失引当金	247	158	140	—	264
リース解約損失引当金	—	967	—	—	967

(注) 貸倒引当金の「当期減少額(その他)」は、洗替計算による戻入額である。なお、債権回収に伴う取崩額1百万円を含んでいる。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略している。

(3) 【その他】

該当事項なし。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・売渡し	
取扱場所	(特別口座) 名古屋市中区栄3丁目15番33号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内1丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	—
買取・売渡手数料	無料
公告掲載方法	当社の公告方法は、電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞及び中部経済新聞に掲載して行う。 なお、電子公告は当社のホームページに掲載しており、そのアドレスは次のとおりである。 https://www.toenec.co.jp/
株主に対する特典	なし

- (注) 当社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない。
- 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
 - 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
 - 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
 - 株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はない。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から本有価証券報告書提出日までの間において、関東財務局長に提出した金融商品取引法第25条第1項各号に掲げる書類は、次のとおりである。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書	事業年度 (第104期)	自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日	2022年 6月29日提出
(2) 内部統制報告書	事業年度 (第104期)	自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日	2022年 6月29日提出
(3) 四半期報告書及び確認書	第105期第1 四半期	自 2022年 4月 1日 至 2022年 6月30日	2022年 8月 5日提出
	第105期第2 四半期	自 2022年 7月 1日 至 2022年 9月30日	2022年11月 9日提出
	第105期第3 四半期	自 2022年10月 1日 至 2022年12月31日	2023年 2月 8日提出
(4) 臨時報告書	企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書である。		2022年 7月 1日提出

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項なし。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2023年 6 月 28 日

株式会社トーエネック

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

名古屋事務所

指定有限責任社員 公認会計士 岩田 国良
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 村井 達久
業務執行社員

<財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社トーエネックの2022年4月1日から2023年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社トーエネック及び連結子会社の2023年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

一定の期間にわたり認識する収益における工事原価総額の見積りの合理性	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
株式会社トーエネックグループは設備工事業セグメントに含まれる配電線工事、地中線工事、屋内線工事、空調管工事及び通信工事において工事契約を請け負っている。連結財務諸表注記「（重要な会計上の見積り）工事契約に係る収益認識」に記載のとおり、工事契約に係る収益のうち、一定の期間にわたり認識した収益は91,516百万円であり、連結売上高の39.4%を占めている。なお、このうち株式会社トーエネックの一定の期間にわたり認識した収益は73,958百万円であり、連結グループ全体において重要な割合を占めている。 連結財務諸表注記「（連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項） 4. 会計方針に関する事項 (5) 重要な収益及び費用の計上基準」に記載のとおり、工事契約については、一定の期間にわたり履行義務を充足することから、期間がごく短い工事契約を除き、その進捗度に応じて収益を認識している。この進捗度の見積りは、実施した工事に関して発生した工事原価が、完成までに予想される工事原価総額に占める割合（インプット法）を使用している。 進捗度の見積りの基礎となる工事原価総額は、契約ごとの実行予算を使用して見積もられる。また、工事契約は、基本的な仕様や作業内容が発注者の指図に基づいて行われるため、契約内容の個別性が強い。 したがって、工事原価総額の見積りにあたっては、全ての工事契約に適用可能な画一的な判断尺度を得られにくく、工事原価総額の見積りの基礎となる実行予算の作成と修正にあたって不確実性を伴う。具体的には、以下の点に関する経営者の判断が連結会計年度末における工事原価総額の見積りに重要な影響を及ぼす。 - 発注者に引き渡す義務である、工事契約の施工内容が特定され、実行予算上、必要と判断された見積工事原価が網羅的に含まれているか否かの判断 - 工事着手後の状況の変化（工事の進行途上において当事者間の新たな合意による工事契約の変更、工種・工法の見直しなど）による作業内容の変更が、適時・適切に実行予算に反映されているか否かの判断 以上から、当監査法人は、一定の期間にわたり認識する収益における工事原価総額の見積りの合理性が、当連結会計年度の連結財務諸表監査において特に重要であり、監査上の主要な検討事項に該当すると判断した。	当監査法人は、一定の期間にわたり認識する収益における工事原価総額の見積りの合理性を評価するため、株式会社トーエネックにおいて主に以下の監査手続を実施した。 (1) 内部統制の評価 実行予算の策定プロセスに関連する内部統制の整備・運用状況の有効性を評価した。評価にあたっては、特に以下に焦点を当てた。 - 受注時に発注者からの注文内容を実行予算に網羅的に計上するための統制 - 作業内容ごとの工数の積算方法、使用する情報・データ、不確定要素がある場合のリスクの反映等、実行予算の作成方法を社内でも遵守させる統制 - 工事着手後の状況の変化を、適時・適切に実行予算に反映するための統制 (2) 工事原価総額の見積りの合理性の評価 工事原価総額の見積りの基礎となる工事契約ごとの実行予算の作成にあたって採用された主要な仮定の適切性を評価するため、連結財務諸表に与える影響を考慮し、大規模工事を中心に、作成の根拠について工事責任者及び工事管理者に対して質問したほか、主に以下の監査手続を実施した。 - 契約書及び仕様書と実行予算との比較により、発注者と合意した作業内容が網羅的に実行予算に含まれているかどうかを確かめた。 - 積算部署が作成した受注見積りの基礎となる積算工事原価と施工部署が作成した実行予算を突合することによって、発注者と合意した施工内容と工事原価総額が整合しているかどうかを確かめた。 - 施工部署が作成した実行予算を閲覧し、材料費、外注費、経費がそれぞれ査定された結果により算定されているかどうかを確かめた。 - 施工管理者から工事の進捗状況を聴取し、工事工程表や実行予算の消化状況等に照らして、実行予算を見直すべきかの判断について質問したほか、回答の基礎となる人員配置表や外注業者への作業指示書等を閲覧した。 - 実行予算の推移を確認し、実行予算の残額と残工期、残工程を確認しながら適時・適切に実行予算の修正が行われているかどうかを確かめた。 - 実際の工事原価発生額と実行予算とを対比し、差異内容の検討を行うとともに、適時・適切に工事原価総額の見積りの見直しが行われているかどうかを確かめた。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査等委員会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査等委員会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

<内部統制監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社トーエネックの2023年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、株式会社トーエネックが2023年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査等委員会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

※1 上記の監査報告書の原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管している。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていない。

独立監査人の監査報告書

2023年 6 月 28 日

株式会社トーエネック

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人
名古屋事務所

指定有限責任社員 公認会計士 岩田 国良
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 村井 達久
業務執行社員

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社トーエネックの2022年4月1日から2023年3月31日までの第105期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社トーエネックの2023年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

(一定の期間にわたり認識する収益における工事原価総額の見積りの合理性)

個別財務諸表の監査報告書で記載すべき監査上の主要な検討事項「一定の期間にわたり認識する収益における工事原価総額の見積りの合理性」は、連結財務諸表の監査報告書に記載されている監査上の主要な検討事項「一定の期間にわたり認識する収益における工事原価総額の見積りの合理性」と実質的に同一である。このため、個別財務諸表の監査報告書では、これに関する記載を省略する。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査等委員会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査等委員会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

※1 上記の監査報告書の原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管している。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていない。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2023年 6月29日
【会社名】	株式会社トーエネック
【英訳名】	TOENEC CORPORATION
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 社長執行役員 藤 田 祐 三
【最高財務責任者の役職氏名】	—
【本店の所在の場所】	名古屋市中区栄一丁目20番31号
【縦覧に供する場所】	株式会社名古屋証券取引所 (名古屋市中区栄三丁目8番20号) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号) 株式会社トーエネック 東京本部 (東京都豊島区巢鴨一丁目3番11号) 株式会社トーエネック 大阪本部 (大阪市淀川区新北野三丁目8番2号) 株式会社トーエネック 静岡支店 (静岡市葵区研屋町51番地) 株式会社トーエネック 三重支店 (津市桜橋二丁目177番地1) 株式会社トーエネック 岐阜支店 (岐阜市茜部中島三丁目10番地) 株式会社トーエネック 長野支店 (長野市三輪二丁目1番8号) (注) 大阪本部は金融商品取引法で定める縦覧場所ではないが、投資家の 便宜を図るために備え置くものである。

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長 社長執行役員 藤田 祐三は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用している。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものである。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である2023年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠した。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定している。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行った。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社並びに連結子会社及び持分法適用関連会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定した。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社並びに連結子会社2社及び持分法適用関連会社1社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定した。なお、連結子会社4社及び持分法適用関連会社3社については、金額的及び質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めていない。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の前連結会計年度の売上高（連結会社間取引消去後）の金額が高い拠点から合算していき、前連結会計年度の連結売上高の概ね2/3に達している当社を「重要な事業拠点」とした。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金及び棚卸資産に至る業務プロセスを評価の対象とした。加えて、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業又は業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象とした。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断した。

4 【付記事項】

該当事項なし。

5 【特記事項】

該当事項なし。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2023年 6月29日
【会社名】	株式会社トーエネック
【英訳名】	TOENEC CORPORATION
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 社長執行役員 藤 田 祐 三
【最高財務責任者の役職氏名】	—
【本店の所在の場所】	名古屋市中区栄一丁目20番31号
【縦覧に供する場所】	株式会社名古屋証券取引所 (名古屋市中区栄三丁目8番20号) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号) 株式会社トーエネック 東京本部 (東京都豊島区巢鴨一丁目3番11号) 株式会社トーエネック 大阪本部 (大阪市淀川区新北野三丁目8番2号) 株式会社トーエネック 静岡支店 (静岡市葵区研屋町51番地) 株式会社トーエネック 三重支店 (津市桜橋二丁目177番地1) 株式会社トーエネック 岐阜支店 (岐阜市茜部中島三丁目10番地) 株式会社トーエネック 長野支店 (長野市三輪二丁目1番8号)

(注) 大阪本部は金融商品取引法で定める縦覧場所ではないが、投資家の便宜を図るために備え置くものである。

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長 社長執行役員 藤田 祐三は、当社の第105期（自 2022年4月1日 至 2023年3月31日）の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認した。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はない。